草津白根山観測所の紹介

大　場　　武
（東工大・草津白根火山観測所）

草津白根火山観測所は1987年11月に発足し，かれこれ4年余りが経過した。当観測所は東京工業大学に所属するが学部の下部組織ではなく付属の研究所と同じ扱いになっている。当所は標高1,000mの群馬県吾妻郡草津町に位置し夏は涼しく冬はとても寒く積雪に覆われる。ここのスタッフは所長に吉田稔教授を戴き平林順一助教授，大場武助手とつづき，臨時職員の山本玉枝さん，草津町事業部から出向している細谷英男君の総勢たったの5名からなっている。5名と言っても常に全員観測所にいる訳ではなく，休日を除く平日の勤務日の標準的な勤務時間に占める観測所における滞在時間の割合で各氏の存在状態を表すと，吉田教授がほぼ0％，平林助教授が約60％，大場助手が約80％，山本玉枝さんが58％，細谷英男君が74％となる。これらの値はあくまでも私の感覚によるもので絶対的のものではないが各氏の100％に足らざる理由を考えてみると，先ず所長の0％というのは吉田教授が本来，理学部化学科教授で観測所の所長職は併任であるためで，平林助教授が60％というのは大岡山 キャンパスで事務的な仕事があることと他の火山におけるフイールドワークが多いことによる。大場助手が80％であるのは平林助教授に伴い火山におけるフィールドワークがあるため。山本玉枝さんと細谷英男君の値はあらかじめ勤務時間がこのように決められている。

当観測所は火山観測と火山化学研究の両側面をもっている。おもな火山観測の項目は，湯釜火口湖については温度，水位，電気伝導度，湖水溶存成分の化学組成，ハイドロフォンによる音波振動。草津白根山の湯釜火口湖は湖水のpHが1から2で，ある意味で極限的なこの湖は多くの研究者の関心を集めている。火山周辺に見られる火山ガスや強酸性温泉水については温度，化学組成を観測する。湯釜火口の近くには地震計と傾斜計が深さ100mに埋まっている。山頂と町の間には殺生河原と呼ばれる噴気地帯がありそこでは地温と大気中のガス組成を観測している。火山ガスや温泉水の化学組成の観測は毎月1回，定期的に採取分析を行なう。そのため観測所には化学実験室がある。火山化学研究については観測所としてテーマをもっているわけではないが個人的には酸性温泉水と火山ガスの発生場を物理化学的に解明したいと考えている。全国の活火山に配置する大学の火山観測所がする化学研究という見方からも，かつて例がない珍しい施設だと思う。草津白根山は興味深い対象であるが当所の人員は少なく，学生の受け入れもない現状では観測が主体であり研究には余り時間がさけない。これは普賢岳のように他の火山が長期にわたり活動を続けると更に拍車がかかる。将来は観測所が増築され，研究/観測比が増えればより魅力的な場所になると思う。

ところで草津白根山は3,000年前を最後に溶岩を流出していない（早川，由井，1983）。有史時代の記録によると，最近では水蒸気爆発を繰り返す活動期と噴気温泉活動のみとなる静穏期を交互に繰り返している。1882－1905年の23年間は活動期，それから20年静穏で1925年から1942年まで17年活動が続いた。それから32年休んで1976年から活動期にはいり現在も活動期にあると思われる。現在の活動は前二回の活動よりも弱く，百年単位の時間尺度でみると草津白根山の活動は低下傾向にあるのかもしれない。まもなく静穏期に入ってしまう恐れもあるが東大地震研の観測によると水釜溶岩円頂丘の直下約1kmに火山性微動の発生源があり（藤田，他，1991）マグマは健在であるらしい。現在火山ガスの組成は1982－83年の噴火の時の組成に近く，気象庁地磁気観測所によると白根山の下では温度か上昇している結果が えられている。また最近になり湯釜湖水にポリチオン酸が検出されるようになり（大沢，他，1991）当分観測，研究の甲斐がありそうである。

編集者　高野穆一郎　〒153 東京都目黒区駒場3丁目8番1号　東京大学教養学部化学教室　電話 03(3467)1171
発行者　日本地球化学会　〒113　東京都文京区弥生2－4－16　学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内　電話 東京 03(3817)5801

Z15-314

日本地球化学会ニュース
No. 128
1992. II. 25

国立国会図書館 4.2.

1992年度日本地球化学会春季シンポジウム

1992年度日本地球化学会春季シンポジウム（The 1992 Spring Meeting of the Geochemical Society of Japan）は地球惑星科学関連学会1992年合同大会（1992年4月7～10日，京都大学教養部）の中の固有セッションとして3日目(9日）と4日目（10日）にB会場で開催されます。プログラムは以下のように決まりました。

プログラム

1月9日（木）

【一般講演1】

（9：00～10：45）　座長　長尾敬介・植田千秋

9：00　B31－01
ICP-MSによるStevns Klint 堆積物（K-T boundary）中の白金族元素（特に白金）の定量的分析
藍川昌秀・M.B. Shabani・増田彰正（東大理），R. Ganapathy（J.T. Baker Inc.）

9：15　B31－02
Marine effects of huge underwater-shock wave at the K／T boundary
三浦保範（山口大理）

9：30　B31－03
アリゾナ隕石孔のESR年代
池谷元伺・小河一敏・石井　博（阪大理）

9：45　B31－04
衝撃合成ダイヤモンド中への希ガスの取り込み機構
久住晶子（神戸大理），松田准一（阪大理），草場啓治・庄野安彦（東北大金材研）

10：00　B31－05
レーザープローブ法による希ガスの拡散係数決定の試み
松田准一・高畑直人・小嶋　稔（阪大理）

10：15　B31－06
アルミニウム箔中に検出された過剰He
長尾敬介（岡山大地球内部研）

10：30　B31－07
アモルファスシリカの結晶化による希ガスの挙動
松原佳代（阪大理），山本鋼志（神戸大理）

——休憩（10：45～11：00）——

【招待講演】

（11：00～12：00）　座長　野津憲治

11：00　B31－08*
ダイヤモンドと海水とをつなぐ懸け橋－地球と環境との一つの接点－
赤木　右（農工大工）

11：30　B31－09*
ミシシッピ・ヴァレイ型鉱床の閃亜鉛鉱のRb-Sr年代測定
中井俊一（東大理）

【一般講演2】

（15：30～17：15）　座長　石橋純一郎・益田晴恵

15：30　B32－01
西赤道太平洋（Ontong-Java海台）より得られた後期更新世における酸素および炭素同位体比記録
岡田　誠・大河内直彦・平　朝彦（東大海洋研）

15：45　B32－02
カドミウム－カルシウム比から明らかにされる過去32万年の太平洋深層水の栄養塩量の変化
大河内直彦（東大海洋研），川幡穂高（地調），岡田　誠・平　朝彦（東大海洋研）

16：00　B32－03
西部赤道太平洋における^{230}Th堆積速度の時間的変動について
成田尚史（放医研），岡田　誠・野崎義行（東大海洋研）

16：15　B32－04
北フイージー海盆海底熱水系における熱水組成の時間的変動

石橋純一郎（東大理），野尻幸宏（国立環境研），D. Grimaud（パリ第7大）

16：30　B 32－05
降水中の Pb-210, Bi-210. Po-210 の周年観測
時枝隆之・原田　晃・角皆静男（北大水産）

16：45　B 32－06
本邦上空の成層圏二酸化炭素の炭素および酸素同位体組成の経年変動
蒲生俊敬・堤　眞（東大海洋研），酒井　均（山形大理），中澤高清（東北大理），本田秀之（宇宙研）

17：00　B 32－07
レーザーを用いた流紋岩中の斑晶鉱物の酸素同位体比の微量測定
益田晴恵（大阪市大理），J.R. O'Neil（ミシガン大）

〖ポスターセッション〗
（4月9日　10：30～13：30）

B 32－P 87　海底堆積物中の火山ガラスの変質に伴う鉱物の生成と化学組成
益田晴恵・田中宏明（大阪市大理），J. R. O'Neil, D. R. Peacor, W. T. Jiang（ミシガン大），蒲生俊敬（東大海洋研）

4月10日（金）

〖一般講演3〗
（9：00～12：00）　座長　清水　洋・川辺岩夫

9：00　B 41－01
温泉ガスの連続観測によるその起源と挙動の考察
永峰康一郎・杉崎隆一（名大理）

9：15　B 41－02
万座空噴の強酸性温泉水と火山ガスについて
大場　武・平林順一（東工大草津白根火山観測所）

9：30　B 41－03
Experimental volatilization of arsenic and phosphorus from volcanic rocks
V.S. Mambo・榎　康村・吉田　稔（東工大理）

9：45　B 41－04
数気圧下における火山岩と酸性溶液との flow 法による相互作用
野上健治・吉田　稔（東工大理），小坂丈予（玉川大農）

10：00　B 41－05
砂質片麻岩における希土類元素の粒界濃集と部分溶融液への寄与
梶塚　泉・鈴木和博（名大理），上岡　晃（地調）

10：15　B 41－06
Remarkable fractionations of yttrium from holmium in marine deposits
川辺岩夫・井上智季・石井　暁（愛媛大理）
――休憩（10：30～10：45）――

10：45　B 41－07
中国，新疆砂漠域における塩類化土地の化学組成および同位体組成について
矢吹貞代・岡田昭彦・劉　嶺強（理研），樊　自立・田　長彦・常　青（新疆生物土壌砂漠研）

11：00　B 41－08
タクラマカン砂漠南部域の土壌および水試料の化学的，同位体的特質
張　勁（東大理），高橋和也・矢吹貞代・牛木久雄（理研），増田彰正（東大理）

11：15　B 41－09
壺ノ沢片岩と氷上花崗岩のモナザイト・ジルコンの Th-U-全鉛アイソクロン（CHIME）年代
鈴木和博・足立　守（名大理）

11：30　B 41－10
モリブデナイトの Re-Os 年代：信頼度の高い方法の開発とその応用
鈴木勝彦・其　魯・清水　洋・増田彰正（東大理）

11：45　B 41－11
^{96}Zr の二重β崩壊の半減期の地球化学的方法による決定
川島敦道（東大理），高橋和也（理研），増田彰正（東大理）

合同大会全般のプログラムは，3月中旬頃お手元に配送されることと思います。なお，懇親会は9日18：00からです。

合同大会参加費	一般	1,000円
	学生	500円
春季シンポジウム予稿集		600円
共通セッション予稿集		2,000円
懇親会費		3,000円

連絡先：1992年合同大会実行委員　松田　准一
〒560 豊中市待兼山町1－1
大阪大学理学部宇宙地球科学科
Tel. 06－844－1151 ext. 4177
Fax. 06－854－6813

「地球化学会有志懇談会」（4月9日，12：00～13：00）
春季シンポジウム期間中に，日本地球化学会の会員が中心となって科研費の重点領域を申請することに関心のある方々で懇談会を持ちたいと思います。ふるってご参加ください。場所は合同大会会期中に掲示します。
（呼びかけ人：清水　洋・田中　剛・野津憲治・松田准一）

日本地球化学会

1991年度　第3回評議員会議事録

日　時：1991年9月29日　18:00－20:30
場　所：愛媛大学理学部会議室
出席者：綿秋邦彦会長，脇田　宏副会長，鳥居鉄也監事，海老原　充，金森　悟，北　逸郎，佐野有司，清水　洋，下山　晃，鈴木俊雄，高岡宣雄，高野穆一郎，立川　涼，田中　剛，角皆静男，長尾敬介，野崎義行，野津憲治，藤原祺多夫，松田准一，松久幸敬，柳　哮，吉田　稔評議員，（小倉評議員代理）安部喜也

1．前回議事録を了承した。

2．報告事項

2－1　庶務（野津評議員）

第6回化学情報講演会，CO_2 と海洋とのかかわりに関する国際ワークショップ，第8回地球大気化学国際シンポジウム，の共催，協賛を承認した。「ブループラネット賞」，秩父宮記念学術賞，「猿橋賞」の受賞候補者の推薦依頼があった。献本が4冊あった。日本学術会議研究連絡委員会委員候補者を郵送による投票で選び，以下の候補者を推薦した。地球化学・宇宙化学研究連絡委員会（5名）：石渡良志，角皆静男，増田彰正，酒井　均，野津憲治。鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会（1名）：松久幸敬。海洋科学研究連絡委員会（1名）：酒井　均。

2－2　幹事会（野津評議員）

9月21日東京大学理学部において幹事会を行った。出席者は，綿秋会長，脇田副会長，海老原，清水，高野，野津，松久各幹事で，第3回評議員会の議題内容について議論した。

2－3　編集

(1) Geochemical Journal（松久評議員）

Vol. 25, No. 1 は出版済み，No. 2 は印刷完了。No. 3 は校正中。No. 4 の特集号「日本の地熱系」は編集済み。今年度の投稿件数は9月末で37編。

(2) 地球化学（金森評議員）

Vol. 25, No. 1 は印刷中。No. 2 は特集号を計画し，原稿を集めている。

(3) ニュース（高野評議員）

No. 126 は配布完了。No. 127 は10月中に原稿を集め，11月に発行予定。

2－4　行事

(1) 1991年度愛媛年会（立川評議員）

講演件数は254件。事前登録者数は340名。9月29日午後開催した市民講演会には70名弱の参加があった。

(2) 1992年度春季シンポジウム（松田評議員）

1992年4月7－10日，地球惑星科学関連学会1992年合同大会に参加する形で，京都大学教養部で開催される。そのプログラム委員会が7月11日，9月28日に開催された。講演募集のサーキュラーを11月初旬に発送。

(3) 1992年度東京年会（小椋評議員代理安部会員）

1992年10月1～3日，東京農工大学農学部（府中市）で開催を予定し，準備を進めている。

(4) その他（清水評議員）

地球惑星科学関連学会連絡会ニュース No. 1 が発行された。1993年以降合同大会に参加すべきか検討する時期になった。Goldschmidt Conference のサーキュラーを学会期間中に配布し，ニュースにも掲載する予定である。

2－5　選挙管理委員会（高野評議員）

1992－1993年度役員選挙結果の報告があった。

2－6　将来計画委員会（脇田副会長）

9月30日17時30分から「地球化学の振興」に関するシンポジウムを開く。

2－7　学術会議

(1) 地球化学・宇宙化学研連（角皆評議員）

第15期へ将来計画の検討を引き継ぐ。

3．審議事項

3－1　入退会承認

1991年5月1日から7月31日までの入会退会は，以下の通り承認された。

入会（21名－すべて正会員）：澤田　淳，氏家真澄，吉川英樹，相馬悠子，山田　努，堀内一穂，稲葉一穂，竹花大介，堀　雅明，マリウス オリオン イェンドリセク，薦田康夫，中野孝教，原田一行，宮崎昭仁，岡井貴司，白幡浩志，杉谷健一郎，（以下学生）大和田淳子，鍵　裕之，伊藤　孝，池見洋明

退会（15名－すべて正会員）：矢島敏彦，服部和夫，小林茂男，松井信行，西沢　修，三井さち子，荻原克久，米谷正広，永田　武（逝去），稲森　潤，上田誠也，原田武夫，三澤朋子，尾形亜津美，青山　拓（学）

また，その他の異動は，以下の通りである。

海外→国内（1名）：大田啓一

学生→一般（11名）：三好　正，田口和典，長尾誠也，本多牧生，斎藤　努，菅　正彦，石川剛志，鳥越紀子，能登征美，三島康史，市橋秀樹

この結果，会員数は以下のようになった。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1991年5月1日	926	19	4	949
入　会	21	1	0	21
退　会	15	0	0	15
1991年7月31日	932	19	4	955

学生61，在外31 を含む

3−2　1991年度総会議事次第，および総会に提出される案件

幹事会が提出した総会議事次第案が了承された。総会に提出される1990年度事業報告，1991年度事業中間報告，1992年度事業計画，1990年度会計報告（第2回評議員会にて承認済み），1991年度会計中間報告，1992年度予算案が審議され，原案どおり了承された。

3−3　日本学術会議・陸水研究連絡委員会委員候補者の選出

陸水研連から1名の推薦依頼があり，投票の結果，安部喜也21票，半田暢彦2票で，安部会員を推薦することとなった。

3−4　1992年度学会賞等受賞者選考委員会の委員選出

5名連記の投票の結果，角皆静男（13票），綿秋邦彦（10），松久幸敬（9），増田彰正（8），松尾禎士（8）の各氏が選出され，綿秋氏が会長から委員長に指名された。なお，欠員が出た場合には，一國雅巳（4），小嶋　稔（5），高岡宣雄（5），半田暢彦（5）の4氏の中から繰上がることとなった。

1991年度第4回評議員会議事録要旨

1991年度第4回評議員会は，12月14日15時30分より東京大学教養学部会議室で開かれ，出席者は綿秋会長を始め23名であった。以下に議事の概要をまとめる。正式の議事録は，次回評議員会で承認されたのち，ニュースに掲載の予定である。

1. 庶務，編集，行事に関する報告があった。1992年度の年会は10月1〜3日に東京農工大学農学部で行われる。
2. 1990年8月1日から10月31日までの入会19名（すべて正会員），退会2名（すべて正会員）が承認された。この結果，会員数は7月31日現在，正会員947名（学生69名，在外31名を含む），賛助会員19名，名誉会員6名，合計972名となった。
3. 平成5年度から科学費の分科細目が変更になり，地球化学は，分科「化学」の中の「分析・地球化学」から分科「地球科学」の中の細目「地球化学」として独立する。今回の変更により地球科学関連の審査委員候補者の推薦を見直す必要があり，日本学術会議会員3名より関係学会へ12月16日に懇談会を開催する旨通知があった。本学会では，対応策を検討するため，現幹事，旧幹事，研連委員が12月13日に会合をもち，3名の一段審査委員はすべて本学会から推薦する，二段審査委員は地物系，地質系と持ち回りにする，との基本的な方針をまとめた。この方針が評議員会で了承され，12月16日の懇談会へは，綿秋会長，脇田副会長，各皆研連委員長が出席することも了承されたる。

（訂正）　ニュース127号1990年度決算報告（p. 5）に誤りがありました。次のように訂正します。

（誤）（自 1990年6月30日　至 1990年12月31日）

（正）（自 1990年1月1日　至 1990年12月31日）

新入会員紹介　（1991.8.1〜1991.10.31）

入　会（19名）

正会員（19名）

永井　尚生　日本大学文理学部化学科
百島　則幸　九州大学理学部化学教室
青田　尚美　金沢女子短期大学
植田　千秋　大阪大学教養部
河田　陽介　三菱マテリアル㈱原子力技術センター
末野　重穂　筑波大学地球科学系
辻　　正彦　兵庫県立公害研究所
梶原　義照　石油資源開発㈱技術研究所
高橋　勝治　大日本インキ化学鉱業㈱総合研究所
藤巻　宏和　東北大学理学部地学科
S 大浦　泰嗣　金沢大学大学院自然科学研究科物質科学専攻
S 田中　宏明　大阪市立大学理学部地学科
S 宮崎　明子　東京大学理学部地球惑星物理学教室
S 安藤　隆丸　静岡大学理学部地球科学科
S 上村　　仁　東京都立大学理学部化学教室
S 橋爪　　光　東京大学理学部地球惑星物理学教室
S 松田　直子　東京大学大学院理学部系研究科化学専攻
S 野上　健治　東京工業大学理学部化学科
S V.S.マンボ　東京工業大学理学部化学科

（S は学生扱いの一般会員です）

1992〜1993年度　日本地球化学会　役員

会　長　脇田　　宏
副会長　半田　暢彦
監　事　一國　雅巳
評議員　安部喜也，石渡良志，海老原　充，大隅多加志，北　逸郎，日下部　実，佐野有司，清水　洋，下山　晃，杉崎隆一，鈴木徳行，高岡宣雄，立川　涼，富樫茂子，中井俊一，長尾敬介，野津義行，野尻幸宏，乗木新一郎，藤原祺多夫，松田准一，松久幸敬，綿秋邦彦

1992〜1993年度　日本地球化学会　会務分担

会　長　脇田　　宏（東京大学理学部地殻化学実験施設）
副会長　半田　暢彦（名古屋大学水圏科学研究所）
庶　務　清水　　洋（東京大学理学部化学教室）
会　計　中井　俊一（東京大学理学部地殻化学実験施設）

編集
G.J.　松久　幸敬（地質調査所鉱物資源部）
地化　田中　　剛（名古屋大学理学部地球科学教室）
ニュース　野尻　幸宏（国立環境研究所地球環境研究グループ）
行　事　海老原　充（東京都立大学理学部化学教室）

1992年度学会賞等受賞者選考委員会委員長

綿秋　邦彦（東京大学教養学部化学教室）

1992年地球惑星科学関連学会合同大学委員

松田　准一（大阪大学理学部宇宙地球科学教室）

日本地球化学会の会員構成について

会員問題検討委員会委員長　脇田　宏

1. はじめに

今期の評議員会には，日本地球化学会の発展を促進するため「会員問題検討会」が設けられた。この委員会が当面するおもな課題は，学会の強化策で，具体的には新入会員の勧誘と会員構成の実態を把握することであった。新入会員の勧誘については，会員諸氏にも多大なご協力をいただき，1990年1月から1991年7月までの間に，129名の新会員を迎えるなど一応の成果をおさめることができた。小稿では，会員の構成など本学会の現状を報告し，会員諸氏が地球化学会の将来像を考えていただく際の参考となれば幸いである。

なお，当委員会の活動は，委員長のほか評議員の半田暢彦，長尾敬介，松田准一，野津憲治，清水　洋の各氏に野尻幸宏会員を加えた7名の委員で行われた。

2. 学会員数

今年度配布された名簿の作成時（1991年6月現在）に日本地球化学会の会員総数は951人であった。在外会員32人，賛助会員19人を除くと国内の正会員は900人である。そのうち，名誉会員は岩崎岩次，小穴　進也，野口喜三雄，浜口　博の諸先生と最近推挙された鳥居鉄也，西村雅吉の両先生を加えて6名である。また，学生の会員は65人である（表1）。

表1　日本地球化学会員の構成

国内会員	名誉会員	6人	900人
	正会員	894人	
在外会員			32人
賛助会員			19人
合計			954人

正会員の中には，学生65人が含まれている。

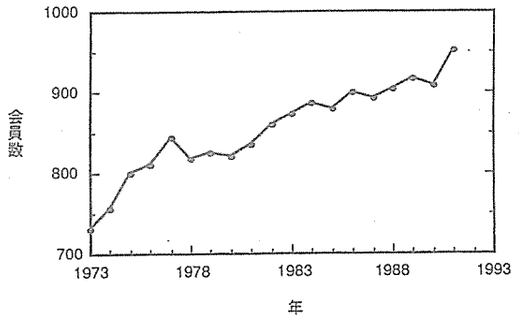


図1　会員数の変化

表2　地球科学関連学会所属の会員数

学会名	会員数
日本地下水学会	506
地球電磁気・地球惑星圏学会	519
日本測地学会	555
日本地形学連合	591
日本鉱物学会	782
日本地熱学会	844
日本地球化学会	905
日本岩石・鉱物・鉱床学会	962
日本火山学会	1,009
日本陸水学会	1,044
日本海洋学会	1,536
日本第四紀学会	1,716
地震学会	1,745
日本応用地質学会	1,891
日本地学団体研究会	2,580
日本気象学会	3,630
日本地質学会	4,921
日本化学会	30,620

第15期日本学術会議会員選出時（1991年5月）のデータ（研究者数）による。

1973年以降の会員数の変化を示すのが図1である。1953年約200名の会員で発足した「地球化学研究会」は1963年「日本地球化学会」に名称が変更された時には，約300名となっていた。その後，会員数は順調にふえたが，ここ10年間は800〜900名ぐらいで，のび悩みの状態にある。

国内正会員900人という数は，国内の地球科学関連の諸学会の中でどのくらいの規模であろうか（表2）。同じくらいの学会としては日本地熱学会，三鉱学会，火山学会などがある。少し大きな学会として海洋学会の1500人，地震学会の1800人がある。さらに大きな学会としては気象学会の3000人，地質学会の5000人などがある。地球科学関連ではないが，日本化学会は3万人の規模である。会員が，1000名を越え，1500名にもなると学会活動

も活発となり，財政的にも運営が楽になる。また，学術会議会員の推薦など対外的にも有利な点が多くなる。

ここで，1991年7月末までに129名もの新会員の加入があったが，長期会費滞納者と住所不明者の整理が行われたため，82名の退会者を出し，差引き47名の増加にとどまった。これは学会の財政圧迫の要因を除去するもので，体質の強化をはかったのであるが，今後，長期滞納者を出さない努力が必要とされる。

3. 会員の所属機関

1991年6月に作成された名簿にもとづき学会員の所属を分析した結果は以下の通りである（図2）。

国内会員900人のうち，56.5%にあたる509人は学校関係に所属する人で，このうち483人が国公私立の大学に所属する会員である。国公立の研究機関・試験所などに所属する会員の数は189人で，その比率は約21%である。約16%にあたる140人は会社関係の会員である。また，勤務先に記載のない人の数は62人で，約7%に相当する。

所属する会員数の多い機関を順にならべたものが表3

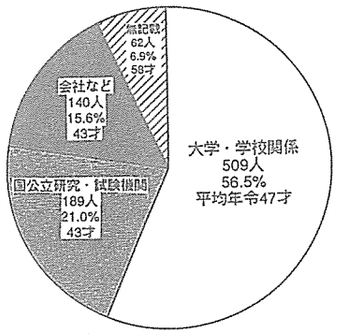


図2 国内会員の所属別分布と平均年令

表3 機関別会員数

	機関名	人数	平均年令
1	東京大学	47人	39才
2	地質調査所	46	42
3	名古屋大学	28	46
4	北海道大学	22	42
5	岡山大学	19	42
6	東北大学	15	43
6	九州大学	15	48
8	筑波大学	14	42
8	京都大学	14	46
10	国立環境研究所	13	41
11	愛媛大学	12	43
12	神戸大学	10	35
12	東京都立大学	10	42

平均年令は年令を推定できた人（約96%）から求めた。

である。東京大学と地質調査所が1，2位を占め，名古屋大学，北海道大学が続いている。第5位の岡山大学は三朝の地球内部研究センター所属の会員がほとんどである。この表から，東北大学，京都大学などにかなりの数の会員がいることもわかる。

次に，会員の所属する会社としては，電力・資源・エネルギー関係の会社が多く，地質調査，コンサルタント関係が続いている。

4. 会員の年令構成

学会員の年令構成は学会の将来像を描く上で必須のデータである。不都合なことに，現在，学会には完全な会員の年令データはなく，いろいろな資料から求めた。したがって，今回の結果は±1年ぐらいの推定誤差があることをお断りしておく。年令データはこうして推定することができた96%の会員（868人）のデータにもとづいている。

会員の年令構成は図3のヒストグラムに示す通りである。40才前半の会員が一番多く，会員の平均年令は47才である。したがって，会員の54%を占める大学関係の会員の平均年令も47才である。研究・試験機関の平均年令は少し若く，43才である。名簿に所属が記載されていない会員の年令推定はむずかしく，平均年令は58才と算出されたが，大部分は定年となられた会員であると思わ

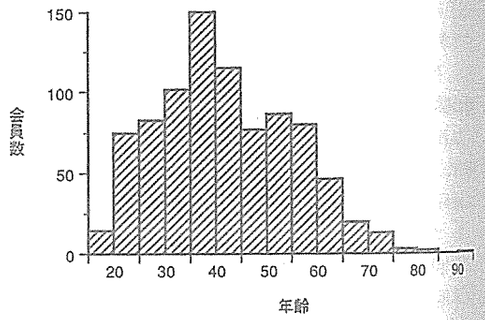


図3 国内会員の年令別分布

表4 国内会員の年令別百分率と平均年令の変化

年令	1973年	1977年	1981年	1991年
20～30才	20.5%	14.1%	7.7%	12.8%
31～40才	19.0%	30.4%	34.8%	22.3%
41～50才	32.8%	24.1%	20.1%	29.4%
51～60才	20.4%	23.3%	25.5%	18.4%
61～70才	5.4%	6.6%	9.3%	12.7%
71～80才	1.6%	1.2%	2.2%	3.7%
81～90才	0.3%	0.3%	0.4%	0.6%
91才以上				0.1%
全会員数	731人	844人	835人	951人
平均年令	42.1才	42.9才	44.8才	47.0才

表5 学会員の地域別分布：会員数と平均年令

地域名	大学など	研究・試験機関	会社・その他	計
北海道	36(43)	6(43)	3	45(45)
東北	40(44)	4	9(55)	53(46)
関東*	38(49)	108(43)	24(42)	170(44)
東京・神奈川	141(46)	24(48)	107(48)	272(47)
北陸	23(53)	10(41)	5(57)	38(50)
中部	67(52)	17(43)	19(50)	103(50)
近畿	61(45)	7(44)	20(58)	88(48)
中国・四国	66(44)	4	2	72(44)
九州・沖縄	36(50)	9(38)	13(52)	58(49)
その他**	1	0	0	1
合計	509(47)	189(43)	202(49)	900(47)

*：茨城，栃木。群馬，埼玉，千葉各県.
**：外国の大学に勤務する国内会員1名.
平均年令は年令を推定できる人（約96%）から求めた.

れる。

会員年令構成の時間的な変化については，1985年の将来計画委員会談話会報告（松尾，1985）のデータと合わせて表4に示す。このデータに対する年令推定誤差は±0.1才程度であった。

5. 会員の地域的分布

学会員の分布を地域別に示したのが表5である。本学会では全国を8ブロックに分け評議員の選出などを行っているが，ここでは会員数の多い関東地域を筑波地区と京浜地区に分けて9地域として表示した。大学関係では東京・神奈川，試験・研究機関は筑波に多いという当然の結果となっている。

6. 会員の専門分野

地球化学会の方向を定める上にも，会員の専門分野の分布を把握することも必要である。今回は充分な資料がなかったので，これについて報告することはできない。次回の名簿作成時にこうした調査をすることが望ましい。

7. おわりに

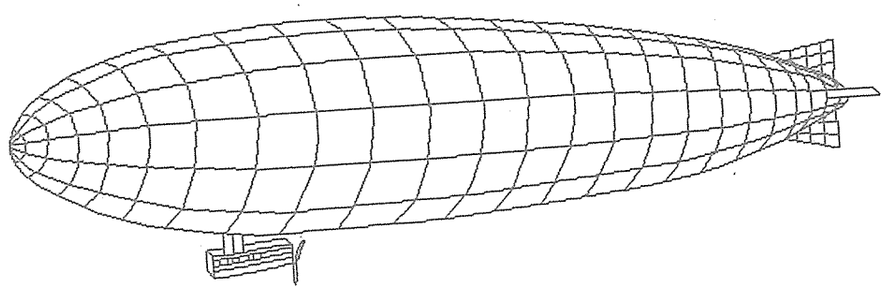
日本地球化学会は，学会員の研究活動を推進させるために組織である。地球化学を振興させるには，今期のような委員会活動のほか，個々の研究者が研究に専念し，地球化学の分野ばかりでなく，周辺領域にも衝撃を与える研究成果をあげていくことが一番である。

定年退官を期に退会される会員も少なくない。それぞれの会員がこれまでに蓄積された知見を学会内に温存するために，公職退職者に対する処遇を考えてもよいのではないだろうか。学会に永年（たとえば35年以上）在籍された会員は，「永久会員」として，学会が会費を負担するなどの案は如何であろうか。こうしたことはこれまで何回も将来計画委員会などで提言されている。

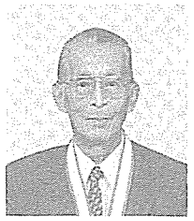
科学研究費の配分方法の検討，分科・細目の見直しにも見られるように，地球科学諸分野は再編成の時期を迎えている。世間は以前にもまして，地球化学の進展を要望している。地球化学が周辺領域と強調しながら発展を遂げるため，現在ほど重要な時期はない。すべての会員のご協力をいただいて地球化学会を発展させていくことが必要である。

参考文献

松尾禎士，日本地球化学ニュース，No. 103, 2(1985).



第１回柴田賞受賞者黒田和夫（P.K. Kuroda）博士のプロフィールと業績



我が国地球化学の興祖である柴田雄次先生を記念する日本地球化学会柴田賞の第１回目が，1991年度本会年会において黒田和夫博士（Arkansas 大学名誉教授，Nevada 大学客員教授，米国環境保護局（Las Vegas）上級研究員）に贈られました。授賞業績は，既に良く知られている「太陽系初期における Pu-244の存在」を発見したこと，及び「天然原子炉の存在」を予言し，研究されたことです。

黒田教授は，大正６年４月１日福岡県黒木町のお生まれで，昭和14年（1939）東京大学理学部木村健二郎研究室を卒業，同研究室副手，助手（一時は柴田研）を経て昭和19年理博，助教授となられ，昭和24年（1949）に渡米（Minnesota 大 Sandell 教授研究室）されました。

この戦中，戦後の時期は，柴田，木村両先生の「東洋産含希元素鉱物の化学」並びに「本邦温泉－特に箱根，増富，有馬，三朝－の微量化学成分と天然放射能の分析・地球化学」の研究に専念され，その成果は1949年第１回日本化学会賞に結実すると共に，1956年の天然原子炉理論の伏線となりました。

天然原子炉というのは，^{235}U の存在比が大きかった昔に U 鉱床中で核分裂連鎖反応が起きたこと（中性子増殖係数 $k_\infty = \varepsilon p f \eta$ が１より大きくなった；但し，ε = ^{238}U の速中性子核分裂による増加率，p = ^{238}U の共鳴吸収による減少率，f = ^{235}U の熱中性子利用率，η = ^{235}U の核分裂当たりの放出中性子数）を指します。分析値の分かっている色々の U 鉱物で計算すると $k_\infty < 1$ となりますが，鉱物によっては k_∞ が１より小さいが１に近い値となり，sub-critical な反応は起こり得ます。実際，1953年には H. G. Thode と G. Wetheril は Xe の同位体分析から ^{238}U の自発核分裂の他に ^{235}U の誘導核分裂を見出しています。しかし，$k_\infty > 1$ ではありません。鍵は p の値（中性子の熱化率）で，黒田教授は U 鉱物の生成過程（U 水溶液からの沈殿・濃縮）を考えて（$UO_2 \cdot nH_2O$＋不純物）の系に注目し，中性子減速に効く水の量 n と不純物次第では $k_\infty > 1$ が容易に実現しうることを見出し，1956年に J. Chem. Phys. の無審査欄に発表しました。

黒田教授は留学期限の1951年，アメリカ化学会で“温泉の放射能は地下の浅所から来る”ことを発表し，これに興味を持った Arkansas 大の R. Edwards 教授に口説かれて Fayettevill に赴き，40年近くを過ごすことになります。２人は火山や温泉の熱源が核エネルギーで，浅い所にあれば核分裂生成の $^{89,90}Sr$ や ^{131}I が見つかると考えました。ところが，Arkansas の有名な Hot Springs からは，雨水中のフォールアウトによるものしか検出できず，一方，急拠行った 2.5kg の pitchblende からの $^{89,90}Sr$ の分離・検出には成功して準教授に昇進，独立されました。

Curie 夫人が天然 U 鉱中の ^{238}U の α 壊変分岐から Ra，Po を発見したように，黒田教授は ^{238}U の自発核分裂分岐で作られる希元素の分離抽出による探索に力を入れて，$^{89,90}Sr$ の他に ^{99}Mo や43番元素 Tc，61番元素の Pm の検出に次々と成功されました。しかし，これらが何故温泉中に見い出されないかを考え続け，公開されたばかりの Fermi の原子炉理論を使って計算を試み，20億年前なら $k_\infty > 1$ という天然核連鎖反応が起こっていてよいとの上述の結果に至ったわけです。けれども，この話は実際1972年にフランスの科学者がアフリカ，ガボン共和国の Oklo 鉱山で $^{235}U/^{238}U$ 比の異常を見い出すまでは注目されませんでした。Oklo 現象と呼ばれるこの17億年前の異常は，ハイテクの結晶たる原子炉が自然の巧みで存在し，しかも，地球の歴史の中で1000億 kW•h という大規模な核変換があって，その死の灰は飛散することなく現在まで地下に存在していたことを示します。そして，重要なのはこの時期，鉱床を作るに十分な水，及び酸素があったことです。

1957年は人種差別騒動で有名な Little Rock(Arkansas 州都）事件を避けて，Argonne 国立研に移り，雨水のフォールアウトの研究を行い，有名な黒田の two-box モデルを作って ^{90}Sr の成層圏から対流圏への移動を説明されましたが，翌年 Arkansas に戻って本格的にフォールアウトと U 鉱物中の希元素研究を再開されました。また，一方で化学元素の起源と年令へのかねてよりの関心を深めて行かれました。1960年 J.H. Reynolds が Richardton 隕石に半減期 1.7×10^7 年の ^{129}I に由来する ^{129}Xe の濃縮を発見するや，その Xe 同位体スペクトルと地球大気のそれの比較から半減期 8.2×10^7 年の ^{244}Pu の自発核分裂成分を予見されました。但し，それは地球大気に濃縮しているように見え，実際隕石中で ^{244}Pu の証拠が発見されるのは1964年に黒田教授が来日されて筆者と東大核研の加速器を用いた ^{238}U 核分裂の実験をしていた留守中に当時の学生 M.W. Rowe が測定した Pasamonte 隕石の Xe スペクトルからでした。

^{244}Pu の自発核分裂で生じる $^{131-136}Xe$ のスペクトルは，1971年に E. C. Alexander らが Reynolds 教授の研究室で 13.0mg，$^{244}PuO_2$ を使って確認し，太陽系初期におけるこの消滅核種の存在は疑いないものとなりました。^{244}Pu の起源は，星における元素合成以外に考えられないので，これは太陽系を構成する化学元素の起源を追跡できるトレーサーであり，元素合成から太陽系形成までの 3×10^8 年の時間間隔を決める時計であるという重要性をもちます。

以上の一連の研究は，学生時代の1936年に聞いた F. W. Aston の，また翌年の N. Bohr の講演による開眼，1938年来の O. Hahn と F. Strassman による Ra-Be 中性子源を用いての ^{235}U 核分裂の発見，さらに1945年の原爆による敗戦等を通じて深い思いを持ち続けられた“核分裂”現象が基本であり，柴田・木村両先生に与えられた希元素の地球化学研究の流れを極めてユニークに発展・開花されたものです。核分裂発見に関しては，1937－8年には理研26″サイクロトンが稼働し，仁科－木村の共同研究として U，Th の速中性子照射試料が木村研に持ち込まれて，井川正夫氏により放射化学分離が行われ，卒研中の黒田教授は隣の実験台で山の尾や手代木のペグマタイト中の ^{226}Ra 分析を行いながらこれを横目で眺めていたこと，さらに，^{226}Ra 分析と同じ方法（Ba 担体と ^{228}Ra－MsTh 1－トレーサーを加えて分離）が Hahn らによって使われたことが後から分かり，非常な無念を持たれた由です。

隕石，特に始源的な炭素質コンドライトには，Renazzo 型あるいは CCF-Xe と呼ばれる起源の同定が困難な成分があります。これについては，超重元素の自発核分裂説（今は消えた），質量分別説，星内起源説など百家斉放の時代が1960年代中頃から続きますが，黒田教授は，1970－80年代を通じてこの問題に取り組み，“太陽系初期に起こった質量分別＋T. Tauri 段階での中性子照射＋宇宙線核破砕＋消滅核種 ^{129}I，^{244}Pu”で説明できるとして，現在，なお活発に主張されています。筆者は星内起源説を追求しており，最愛弟子の O.K. Manuel も別の形の元素合成説を主張して，黒田教授を元気付けているところです。人工・天然放射能の移動・分析，特に ^{244}Pu の場合と同じ考えによるそれらの年令決定のお仕事も大きく発展して，これで70名近い Ph. D. を輩出し，1991年末現在の350編の原著論文・著書は，まだまだ増え続けています。

（金沢大学理学部　坂本　浩）

日本地球化学会奨励賞受賞者の紹介

中井俊一会員

清水　洋



1991年度の日本地球化学会奨励賞は，「鉱床の年代と成因に関する同位体地球化学的研究」により中井俊一会員が受賞いたしました。中井氏は東京大学理学部化学教室増田研究室で，「La-Ba 法による年代測定法の開発と，その地球科学的応用」の研究を進めました。^{138}La の電子捕獲壊変を利用した La-Ba 年代測定法を初めて開発し，希土鉱物の年代測定に応用しました。そして，年代学的研究が遅れていた，希土鉱物鉱床の研究に大きな進歩をもたらしました。

1989年から２年間のミシガン大学地質学教室での研究では，主としてミシシッピーバレー型鉛・亜鉛鉱床の年代学的研究を行いました。この型の鉱床は，鉛・亜鉛型鉱床として重要な鉱床であるにもかかわらず，同位体を用いた年代学的研究がなく，その形成年代については意見が分かれていました。中井氏は，Rb-Sr 法により，この鉱床の閃亜鉛鉱（ZnS）の年代測定に成功し，ミシシッピーバレー型鉛・亜鉛鉱床の成因に関する研究に大きな突破口を開きました。それと同時に，硫化鉱物の年代学的研究に新たな道を開拓した研究として高い評価を受けています。

1991年３月からは，東京大学理学部地殻化学実験施設において，「希ガスの地球化学」の研究にも着手し，今後一層の活躍が期待されます。

書　評

日本近海における海底火山の噴火

小坂　丈予

（東海大学出版会　¥1,100）

小坂丈予博士は人も知る火山活動のフィールド観測の専門家である。その38年余りの研究活動中に観測した火山の数はいくつになるだろうか。著者が序文で述べているように，海底火山は地上の火山の活動にくらべて人の目にふれにくいし，深海底でおこった噴火活動は表面まで現象として現れない事すらある。

日本近海における海底火山の噴火を1952年の明神礁の活動から現在まで日本近海の海底火山の噴火に全て立ち会ったのは小坂博士１人だけなのではなかろうか。

海底火山の活動を目にすることは多くの人々にとっては不可能なことである。本書はその大部分は著者の貴重なフィルムによる画面構成で成り立っている。したがってこれを見ることにより海底火山の活動の様子をある程度まで知ることができる。それはある意味で驚異の連続である。

ここで取り上げられているのは，明神礁（1952, 1970），西之島新島（1973），福神海山（1973～1982），南日吉海山（1977），海徳海山（1984），福徳岡ノ場海底火山（1986），伊豆半島東方沖海底火山（1989），鹿児島湾北部（1977），薩摩硫黄島沖（1934），三宅島沖（1983），伊豆大島沖（1986）の各項である。それぞれ個性のある活動が記述されていて興味深い。

これに加えて，総説としてわが国近海における海底火山の活動と分布，海底火山活動にともなう諸現象の二項目が簡略に述べられており，海底火山のイメージを得ることができる。

さらに，最後に海底火山の観測法として，目視観測と写真撮影，変色海域の観測，海面温度の測定，海底地形測定，海底地震計，津波，水中音波の観測，潜水艇による海底噴気孔の調査などこれまでどのような方法が用いられてきたかが述べられている。これらは著者の実際の経験にもとずくもので読者にインパクトを与える。

海底火山の今後の問題として，防災，火山島の帰属の問題，鉱物資源としての海底火山と広く今後の展望も行っており，今後の研究者の指針となるものである。

本の後半はデータと解析であるが，何はともあれ，前半の写真の迫力は読む者を圧倒する力があり，これは著者の長年の経験から放出される力なのであろう。

（綿秡邦彦）

「Oceanic Basalts」

P. A. Floyd 編
Blackie and Son Ltd., £ 85

海底の石を直接手に取ることができたことは，月の石の採取とあいまって，70年代から80年代の地球科学の進展に大きく寄与した。本書は海洋の玄武岩と海洋地殻について，DSDP と ODP による成果と最新の学説について，地球科学の専門家や院生を対象にして書かれたものである。内容は，1. 海洋地殻の地球物理・地質学的構造，2. 海洋玄武岩の鉱物学，実験岩石学，マグマプロセス，変質変成プロセス，3. 様々なテクトニックセッティングの海洋の玄武岩の記載と成因論の各論，4. 玄武岩の源岩マントルである。

本書は地球物理，オフィオライト，海洋ペリドタイトの章を含むなど視野が広く，文献は充実しており，様々なテクトニックセッティングの各論に重点が置かれている。火成岩成因論という点では，Saunders, A. D. and Norry, M. J. 編（1989）の「Magmatism in the Oceanic Basins」，Geol. Soc. London Spec. Publ. 42, の方がまとまりがよい。これらの二つの本は相補的な関係にあるようだ。

本書では特に最近著しく研究が進展した背弧海盆について，Saunders & Tarney の一章がよくまとめられている。地球化学的にも，背弧海盆の玄武岩はしばしば MORB と島弧の中間の性質という表現がなされるが，その実態は必ずしも明らかではない。本書でも，MORB と区別がつかない例も示されているなど組成にはかなりの多様性がある。また，ネオジム同位体や Ce／Nb 比から第3成分として OIB や E－MORB が関与している可能性も指摘されている。なお，深海で細かく発泡したムース状の玄武岩が見つかったスミスリストや，日本海のデータの公表が間に合わなかったのが惜しまれる。

地球化学の視点でのレビュウは，各章のかなりのページを占めている。安定同位体と貴ガスについては，Exley, R. により，特に章が設けられている。深海の高圧下で急冷されて海洋玄武岩に閉じ込められた貴ガスや窒素の同位体は，マントルを知る上で極めて重要である。OIB の貴ガスは，脱ガスの少ないマントルから生じたことを示すが，低くて変化に富む酸素同位体比はリサイクル成分の寄与を示しており，主成分や微量成分を含めて，インテグレイトしたデータに基づく考察が，マントルの不均一性の成因論にとって不可欠であろう。

（富樫茂子）

第2回 IUAPPA ソウル会議に参加して

第2回 IUPPA Regional Conference on Air Pollution が1991年9月4～6日，韓国ソウル市において Korea Air Pollution Research Association の主催で行われた。私にとって東京，上海に続き3回目の国際大気汚染会議である。日本からも大勢の方々が参加された。この会議の日本側の委員は早稲田大学・塩沢清茂先生と産業公害防止協会・植政一氏である。Keynote Lectures として近藤次郎先生が “Action Program to Arrest Global Warming’ を，NAPAP の前局長 J.R. Mahony が “Acid Rain & Regional Scale Air Pollution－Processes, Effects and Control Strategies” を，Invited Lectures のひとつとして北野康先生が “Delicate Balance of the Global Environment” を講演なさり，関心を集めた。一般講演として，鶴見のほか田中茂先生，上野景平先生などの方が参加されておられた。私の講演は，幸か不幸か前後の演者が来なかった為，50分の “特別” 講演となった。この会議において東アジア，特に日本，韓国，中国（台湾を含む）を中心に定期的な大気汚染の会議を開く動きが具体的になった。中国大陸の王文興先生と台湾の呂世宗先生が中国としてどのような形で参加するかを打ち合わせておられたのが印象に残った。1992年にはソ連邦のウラジオストック市で第4回 ASAAQ 会議が，またカナダのモントリオール市で第3回 IUAPPA 会議が開かれる。

（鶴見　実）

IGC ニュース　No. 11　（1991. 12）

29th IGC　事務局

科学展示会の申込締切は3月31日

12月上旬現在，既に約40％のブースが予約済みです。展示会の参加申込締切は3月末日です。参加を希望する機関・企業は早めに事務局科学展示会係にお申し込み下さい。

ジオホストにご支援を

ジオホストは発展途上国からの参加者に経費の補助を与える制度です。これまでに79カ国から1000件余りの応募があり，ジオホスト選考委員会の予備審査で260件が選ばれました。最終的に何人がジオホストの恩恵を受けられるかは，募金等による資金にかかっています。ユネスコからの支援は前回のワシントン大会よりはるかに少ない旅費1万ドルのみとなり，組織委員会では，ジオホストの資金に寄付金の一部を当てるため「ジャパン・ファンド」を創設しました。今後とも各方面からの一層のご支援をお願い致します。

第10回科学プログラム委員会開催

地質調査所で12月13日，プログラム委員会代表委員会が開催され，アブストラクトの採否やプログラムの作成手続き等が審議されました。審議結果の主な点は以下の通りです。

(1) 諸外国の郵便事情も考慮し，アブストラクトの締切を1月31日まで延期して，なるべく多くの人に参加の機会を与える。また，招待講演者には，それ以外にも2件までの発表を受け付ける事とする。
(2) 届いたアブストラクトは原則として全部採用し，要旨集に掲載する。
(3) 現時点で申し込みの少ない以下のセッションを中止し，そのアブストラクトを関連する別のセッションに組み替える。
　Ⅰ－3－19，Ⅰ－3－36，Ⅰ－3－41，Ⅰ－3－53
　Ⅱ－5－4，Ⅱ－6－11，Ⅱ－17－8，Ⅱ－19－1
(4) 以下のセッションは他と統合する。
　Ⅱ－12－4：Ⅱ－12－5 と統合
　Ⅱ－16－11：Ⅰ－3－47 と統合を検討
　Ⅰ－3－18：Ⅱ－5－6 と統合を検討
(5) 最終的なプログラムは3月中旬に開催される第11回代表委員会で決定する。2月末日までに，運営委員会・プログラム代表委員およびコンビナートが，協議しつつプログラム案を作成する。

日本語ポスター完成

10月に作成した英語版と同じ図柄で同じ大きさの日本語版ポスターが完成しました。掲示頂ける機関は至急事務局までお申し込み下さい。英語版は配布し尽くし，在庫はありません。

地質調査所の「地質ニュース」には IGC 事務局ニュースが毎号掲載されています。あわせてご覧下さい。また，ご質問ご意見は下記事務局まで。

〒305 筑波学園郵便局　私書箱65号
第29回万国地質学会議事務局
（29th IGC 事務局）
Tel 0298-54-3627; Fax. 0298-54-3629

財団法人　神奈川科学技術アカデミー
平成4年度　研究集会開催助成募集要項

1. 趣　旨

本助成制度は，神奈川県内で開催される学術的な研究集会を支援することにより，地域の研究者，技術者の交流並びに神奈川県の科学技術に関する情報発信機能の強化に貢献することを目的とします。なおこのことから，境界領域的，共通基盤的な研究及び創造性に富む新たな研究活動であって，真に当財団の支援を必要とするものを重視します。

2. 助成対象

平成4年度に，県内で開催される科学技術に関する学術的な国際研究集会及び国内研究集会とします。

3. 助成対象の経費及び金額

研究集会の開催に必要な会場借り上げ費，運営費，招待研究者経費，その他開催に当たり直接必要な経費に対し，各費目とも50％以内で助成します。ただし，国際研究集会200万円，国内研究集会100万円を限度とします。なお，採択件数は国際3件程度，国内6件程度とします。

4. 申請者

前記研究集会の開催責任者

5. 申請方法

申請書に必要事項を記入し，事務局宛に送付して下さい。なお，選考の過程で必要な資料の提出等を求め

ることがあります。（受理した書類は返却しません）
また，神奈川県から補助金等を受けて（申請中のものも含む）開催される研究集会及び平成２年度並びに平成３年度に本助成制度の対象となった研究集会について申請する場合は，事前に事務局と協議して下さい。
申請書は事務局に請求して下さい。

6．申請書受領締切り

(1) 国際研究集会
平成４年３月10日（火）

(2) 国内研究集会

ア 前期（平成４年４月１日から平成４年９月30日に開催されるもの）
平成４年３月10日（火）

イ 後期（平成４年10月１日から平成５年３月31日に開催されるもの）
平成４年８月20日（木）頃

7．選考
当財団の助成審査委員会において厳正に審査し，理事長が決定のうえ採否を通知します。なお，国内研究集会の前期及び後期は分けて審査します。

8．助成金の交付
原則として，開催日までに交付します。なお，交付に当たっては決定時に示す手続きに従って下さい。

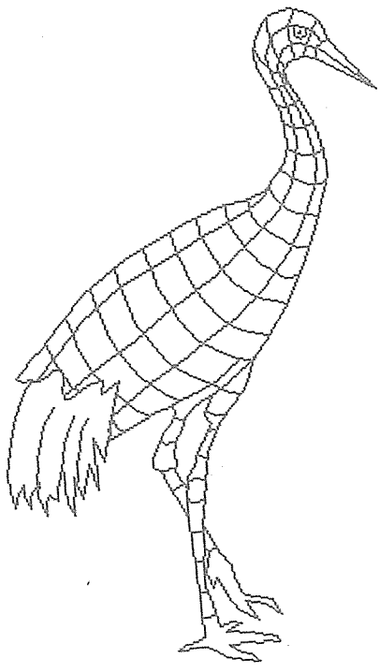
9．研究集会開催結果等の報告
当財団が指定する時期までに研究集会に関する結果報告書および収支決算書を提出して下さい。（当財団指定様式にて報告のこと）

10．その他
当財団の支援に対し，共催，協賛，後援等の位置付けをし，可能な限りパンフレット等の印刷物にその旨を明示して下さい。

【注意】
この募集は，できるだけ早く助成金を交付するために，平成４年度予算成立前に行うものです。よって，予算成立時には，助成金の総額等が変更になる場合があります。

≪事務局≫

財団法人 神奈川科学技術アカデミー
学術交流部交流普及科
〒213 神奈川県川崎市高津区坂戸 3−2−1
KSP 西棟 6F
TEL 044 (819) 2032
FAX 044 (819) 2026



日本学術会議だより No.23

第15期活動計画決まる

平成３年11月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は，このたび開催した第113回総会において，第15期活動計画と新しい特別委員会の設置を決定しましたので，その概要をお知らせいたします。

日本学術会議総会における内閣官房長官挨拶

平成３年10月23日（水）日本学術会議講堂

日本学術会議第113回総会に当たりまして，一言ご挨拶を申し上げます。

御承知の通り，日本学術会議は，我が国の科学者の内外に対する代表機関として，科学の向上発展を図り，行政，産業及び国民生活に科学を反映浸透させるという重大な責務を負っております。

21世紀に向けて，さらに調和のとれた真に豊かな国民生活を実現するためには，創造性豊かな科学技術は申すまでもなく，学術全般を一層発展させることが必要であります。また，我が国の国際的地位の向上に伴い，全地球的視点に立った我が国の国際的な貢献が強く求められております。

そこで，日本学術会議の皆様におかれましては，日本の科学研究の一層の進展のために，長期的かつ高い観点から議論を重ねていただくとともに，科学研究の分野において我が国がどのような国際的貢献をなすべきか等自然科学のみならず，人文・社会科学も含めた全学問的領域から総合的に検討していただき，建設的な御意見を積極的にお出しいただきたく，お諮りをいたします。

頂戴いたしました有意義な御意見につきましては，その実現に最大限の努力をいたしたいと考えております。

終わりに，日本学術会議の今後の御発展と，御出席の皆様方の御健勝を祈念いたしまして，私の挨拶といたします。

日本学術会議第113回総会報告

日本学術会議第113回総会（第15期・第２回）は，10月23日～25日の３日間開催された。

総会冒頭，官房長官の挨拶があった。（上掲）

近藤会長からの前回総会以降の経過報告に続いて，運営審議会附置委員会，部会，常置委員会，国際対応委員会の各委員長，部長からの報告があった。そして第15期日本学術会議の活動方針となる「第15期活動計画（申合わせ）」と「臨時（特別）委員会の設置について（申合わせ）」（別掲）の２件の提案があり，真剣な討議の後，一部修正をして，圧倒的多数の会員の賛成により可決した。この２件の提案内容は，前回の臨時総会で設置された第15期活動計画委員会が審議を重ねて作成したものであり，またその間に２回の連合部会及び部会を開いて，各会員の意見を集約したものである。

総会２日目は，予定を急遽変更してＳＳＣ（超電導超大型粒子加速器）計画についての討議を行った。これは去る10月15日に運営審議会のメンバーに対し，米国大統領補佐官Ｄ・アレン・ブロムリー博士が，ＳＳＣ建設計画に関して日本の協力を求めるスピーチを行ったのに対して，第４部から総会討議資料が提出されたためである。中岬貞雄第４部長と伊達宗行会員が登壇し説明を行い質問等に答えた後討議に入った。午後も熱心な討議は続き政府に対して要望を提出することが採択された。

内閣官房長官挨拶の中で諮られた学術に関する国際対応については，第15期活動計画の中にも提唱されているが学術会議としては，今後，重要案件として審議することとした。

このほか，広報委員会，将来計画委員会も開催された。

総会３日目は，各常置委員会，各特別委員会（第１回会議）が開催された。

第15期活動計画

日本学術会議は，創設以来，科学者や学術研究団体との連携の下に，その目的・職務の遂行に努力し，我が国の学術研究体制の整備についての重要な勧告等を行い，研究所の設立などを含めて数々の業績を挙げてきた。また，数多くの国際学術団体との連携・協力，国際学術協力活動への参加など世界の学界と提携しつつ学術の進展に貢献してきた。しかしながら，創設後40有余年を迎えた現在，学術を取り巻く状況は，国際的にも国内的にも著しい変化を生じた。このような状況を踏まえて，第15期日本学術会議は，本会議の創設以来の基本的精神を引き続き堅持しながら，変動の激しい内外情報に対応して，なお一層の成果を挙げるべく努力する。

日本学術会議は，学術に関する重要事項を自主的に審議し，我が国の学術研究の在り方についての方策を立案し，学術研究の成果を行政，産業及び国民生活に反映浸透させることを使命としている。このため，会員の科学的知見を結集し，時代の要請に即応しつつ将来を見通し，以下の視

点から学術研究の一層の推進を図る。

人文・社会及び自然科学を網羅した日本学術会議は，全学問的視野に立ち，学術研究団体を基盤とする科学者の代表機関であることを認識して，全科学者の参加と意見の集約を図らなければならない。さらに，本会議が集約した科学者の意見を速やかに政策の形成に反映させるようにすべきである。特に学術政策については，他の関係諸機関との連携を強化し，その実現を図る。

また，学術研究団体を基盤とする日本学術会議は，関係ある学術研究団体等から推薦された科学者を中心として構成される研究連絡委員会の重要性を認識し，その活動を強化するとともに，学術研究団体との連絡を密にし，研究基盤の強化を図り，高度化する学術の発展に貢献する。

我が国の科学者を内外に代表する機関である日本学術会議は，国際社会における我が国の地位の向上に照らし，海外諸国の期待と時代の要請にこたえて，学術の分野における国際貢献に積極的な役割を果たすべきである。

日本学術会議は，真理探究という基本理念に立脚し，国民とともに学術の在り方を考え，同時に学術の国際性を重視するものである。そのためには，学術の健全な発展に向けて，学問・思想の自由の尊重と研究の創意への十分な配慮の下に，長期的かつ大局的な視点に立ち，創造性豊かな研究の推進に努める。

科学が文化国家の基礎であるという確信に立ち，日本学術会議は，科学者の総意を代表してその精神を高揚したい。即ち，21世紀に向けて学術体制及び研究・開発の望ましい在り方を抜本的に検討し，我が国の学術政策に指針を与えることにより，国民の期待にこたえるとともに，人類の福祉と世界の平和に貢献することを期するものである。

1．重点目標

第15期活動計画の重点目標は，次のとおりとする。

(1) 人類の福祉・平和・地球環境の重視

今世紀において，科学・技術は長足の進歩を遂げたが，一方において，地球環境の悪化を始めとして，人類の将来を脅かすような事態が起こっている。さらに現在の世界は，激動の渦中にあり，その影響は，学術の分野にも及んでいる。

今日の社会的現実が提起している問題を解決するには，直接に関係する研究だけでなく，広く諸科学が積極的に関与する必要がある。そのためには，多くの研究領域が，それぞれ独自に一層の深化を図るとともに，共同の努力を行い，研究の内容，学問体系の変革にまで進むべきである。人文・社会及び自然科学を包含する日本学術会議は，その特徴を生かして十分な審議を行い，人類の福祉・平和・地球環境を重視して，学術研究の進むべき方向を提示する。

(2) 基礎研究の推進

学術の研究は，人類の発展に不可欠であることは言をまたない。日本学術会議は，将来の学術の発展に向けて，各分野の基礎研究の推進に積極的に取り組むこととする。

また，学術の領域は広範多岐であり，基礎研究であれ応用研究であれ，それぞれの領域ごとに方法論も異なり，研究者の求めるものに大きな違いがあることを十分に考慮し，各分野の研究者の声を聞き，それぞれに適した育成策を講ずる必要がある。それと同時に，学術研究の動向に注目し，いわゆる学際的研究や学問の総合化に留意しつつ，諸科学の調和のとれた発展を目指すことが重要である。

以上のため，第13期においては学術研究動向，第14期においては学術研究環境に関する調査研究を行い，我が国の学術水準の国際比較やその発展を阻害する諸因子などを指摘した。今期においては，これらの調査結果を参考にしつつ，創造性の基礎となる個人の着想を重視し，かつ，国際的にみた学術研究の動向を見極め，独創的研究の強化策等を積極的に図る。さらに，国民生活の向上発展に資する学術の具体的方策を審議提言する。

(3) 学術研究の国際貢献の重視

学術研究は，本来，真理の探究を目指す知的活動であり，その成果は広く人類共通の資産として共有されるべきものである。したがって，学術の国際交流は，学術研究にとって本質的に重要であり，その在り方に常に関心を払う必要があることは言うまでもない。

さらに近年は，国際平和の推進や環境問題の解決等，いわゆる地球的あるいは国際的規模の課題について，我が国の研究を充実させつつ，広く世界の諸科学の発展を積極的に推進する必要が増大している。また，発展途上国及び近隣諸国の学術振興のため，これら諸国の研究者に協力して，貢献策を立案することが強く要望されている。これらのことから，我が国の科学者が今後積極的に国際貢献に取り組み，学術を人類の繁栄と世界の平和に役立てるため積極的な役割を果たすことが必要となりつつある。

以上のような状況から，本会議が築いてきた国際学術交流・協力の在り方についての諸原則と実績を基盤として，学術の国際交流・協力の飛躍的な拡充強化を図り，国際的寄与を格段に拡大することが極めて重要である。

2．具体的課題（要旨）

次の課題を選定した。

(1) 科学者の倫理と社会的責任
(2) 学術研究の長期的展望
(3) 研究基盤の強化と研究の活性化
(4) 研究者の養成
(5) 学術情報・資料の整備
(6) 学術研究の国際交流・協力
(7) 国際対応への積極的取り組み
(8) 文化としての学術
(9) 平和と安全
(10) 死と医療
(11) 生命科学と社会的諸問題
(12) 人口・食糧・土地利用
(13) 資源・エネルギーと地球環境
(14) 巨大システムと人間

3．具体的課題への対処及び臨時（特別）委員会設置について（省略）

注：国際対応委員会の扱いは常置委員会の並びとする

◇今回の総会決定により設置された特別委員会◇

・文化としての学術
・平和と安全
・死と医療
・生命科学と社会的諸問題
・人口・食糧・土地利用
・資源・エネルギーと地球環境
・巨大システムと人間

御意見・お問い合わせ等がありましたら，下記までお寄せください。

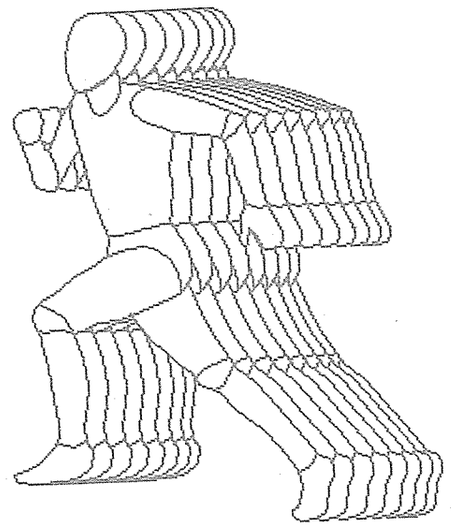
〒106 東京都港区六本木7-22-34
日本学術会議広報委員会　電話03(3403)6291

(16ページより続く)

多い約30%にも達する。これほどの割合を期待していなかった理由は，地球化学会の年会において共同利用研究員のそれほど多くの方に会うことがないからである。(実際，上記15人中の7人の名前が講演要旨に載っていただけである。) 私自身，いくつかの学会に入っており，そのすべてに出かけて行く訳ではないことを考えると，実感と30%という差は，納得できないものではないかもしれない。

そうは言っても，スタッフの80%以上が地球化学会の会員である地球内部研究センターを利用する多数の共同利用研究員の僅かな割合の方にしか，地球化学会の年会で会うことのできないという事実は，このところ年会に参加するたびに感じることである。これは，昔から多くの人によって言われている様に，地球化学会で発表される講演の地球化学といわれる地球化学の間に隔たりがあるためである。日本には，地球化学に関連した学会が，日本地球化学会の他にもいくつかある。したがって，地球化学会年会における地球化学と地球内部研究センターの地球化学の差などそれほど気にしなくてよいのかもしれない。しかし，私自身に関しては，地球内部研究センターで行われている地球化学の方がはるかに好ましく思っている。

同様なことが，Geochemical Journalと年会講演についても言えるのではないかと思う。Geochemical Journalに発表される論文の地球化学と地球化学会年会の講演の地球化学には，かなりの分野の差があるように，私には見える。Geochemical Journalの方が，より広い地球化学の分野をカバーしていると思うのは私だけであろうか。そうした目で，私の周りの地球化学会の会員を見てみると，その相当の割合の人が，論文の発表の場やGeochemical Journalに印刷される論文を見落とさないために，地球化学会の会員となっているのではないかとおもえてきた。言い換えれば，日本では，名前の通った欧文誌であるGeochemical Journalの存在が，950余人の日本地球化学会の会員の何割かを集めていると言えるのではないだろうか。この雑文を書いてGeochemical Journalという雑誌を大いに見直してしまった。



三朝から見た地球化学

岡山大学
地球内部研究センター
千葉　仁

岡山大学地球内部研究センターは，鳥取県の三朝温泉にある。昭和60年に旧岡山大学温泉研究所が，廃止転換されて生まれた全国共同利用の研究センターである。現在，地球深部物質，同位体岩石学，地球物質環境，地球年代学，造岩物質物性の5部門（研究スタッフ数12人）と客員部門である地球物理化学を加えた6部門から成り立っている。岡山大学の理学研究科（修士課程）と自然科学研究科（博士課程）を構成している講座でもあり，現在修士課程5人と博士課程5人の大学院生も三朝で，研究を行っている。現在の三朝の常勤スタッフ11人のうち，9人（82%）が日本地球化学会の会員である。大学院生，学振のPDF，技官の中にも地球化学会会員がおり，私の知る限りでは，その人数を加えると三朝における地球化学会の会員数は，12人となる。なんと，常時，地球内部研究センターで研究を行っている人たちの半数は日本地球化学会の会員なのである。おそらく，地球化学会の会員が，これだけ密に集まっているところは，ほかに日本中を探しても見あたらないのではないかと思われる。

このように地球化学会の会員の多い三朝で，現在，行われつつある研究の概略を紹介すると次のようなものである。マルチアンビル型の超高圧発生装置やピストンシリンダーを用いた超高圧下における物質の相平衡の決定や物性の測定，K-Ar法，Rb-Sr法，Nd-Sm法などによる年代測定，H，B，C，O，S，Sr，Nd，Ce，Pb，希ガスなどの元素の同位体を用いての地球の表層からマントル中で起こっていること，さらに隕石まで，それぞれの生成や変遷の過程の地球化学的解析，火山噴火における揮発生物質の役割とその環境への影響の評価の研究，鉱物や熱水の熱力学的性質の実験的測定，計算機実験による造岩物質の構造や物性の研究や熱水系における物質移動の研究，などなど非常に多岐にわたっている。研究の成果が発表される雑誌は，主として，地球化学に関連した雑誌である（1991年度だけで見てみても，Geochim. Cosmochim. Acta, J. G. R., G. R. L., Chem. Geol., Nature, Amer. Mineral., J. V. G. R., Geochem. Jour., Phys. Chem. Mineral. などである）。行われて研究を見ても，その成果が発表されている雑誌を見ても，地球内部研究センターが，広義の地球化学の研究機関であることが判ると思われる。

この様な研究を行っていくために地球内部研究センターに設置され使われている装置は，主要なもので，マルチアンビル型の超高圧発生装置2台，ピストンシリンダー1台，軽元素の同位体比測定用の気体用質量分析計3台，表面電離型質量分析計2台，希ガス用質量分析計2台などである。地球内部研究センターが，全国共同利用のセンターであることはすでに触れた。したがって，これらの装置は，共同利用研究員によっても使われている。共同利用にみえる方は，北は北海道から，南は沖縄まで，日本中から来ている。1990年度を見ると，単年度だけで，なんと述べ1400人もの共同利用研究員が，地球内部研究センターを利用している。一年間全く休み無しとしても，毎日4人弱の共同利用研究員が地球内部研究センターを利用していることになる。この数字は，驚くべき共同利用の実績を示すものであり，実際に，共同利用研究員が集中する夏休みなどでは，地球内部研究センターのゲストハウスが満杯となり，ゲストハウスに宿泊することが出来ない共同利用研究員がでるほどである。

さて，この様にたくさんの共同利用研究員のどれくらいの割合が，日本地球化学会の会員であろうか。全部の共同利用研究員について調べる暇がないため，平成3年度後期の正規の共同利用研究員（つまり，平成3年度後期共同利用研究員の公募に対して所定の期間内に応募した人）の名簿だけを調べてみた。51人の平成3年度後期の共同利用研究員のうち，15人が地球化学会の会員であった。この数は，私が実感から期待していた数よりずっと

（15ページへ続く）

編集者　高野穆一郎　〒153 東京都目黒区駒場3丁目8番1号　東京大学教養学部化学教室　電話 03(3467)1171
発行者　日本地球化学会　〒113　東京都文京区弥生2−4−16　学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内　電話 東京 03(3817)5801

215-314

日本地球化学会ニュース

No. 129

1992. IV. 20

国立国会 4.5.6 図書館

1992年度日本地球化学会年会のお知らせ

主　催　日本地球化学会　共催　日本化学会
日　時　1992年10月1日（木）〜3日（土）
会　場　東京農工大学農学部
東京都府中市幸町3−5−8
内　容　一般講演（15分）
ポスターセッション
課題講演（20分）
1）地球環境の変動と地球化学
2）東京湾およびその集水域内の物質循環
3）炭素を中心とした宇宙・地球の化学ダイナミクス
＊発表は原則としてOHPとします。スライドを希望する場合は，講演申込み時にお申し出下さい。ポスターセッションの展示法については，申込者に改めてお知らせします。
講演申込締切り
6月20日（土）必着
本号添付の所定の申込用紙を御使用下さい。
講演要旨原稿締切り
8月8日（土）必着
別添の“講演要旨作成上の注意”に従い作成してお送り下さい。
要旨集代　4,000円
参加費　日本地球化学会会員　1,000円
非会員　2,000円　学生　無料
懇親会　10月2日（金）18時から東京農工大学農学部大学生協食堂
会費　5,000円（学生　3,000円）
要旨集　参加，懇親会，小集会申込締切り
9月12日（土）
送　金　要旨集代，参加費及び懇親会費は9月12日（土）までに郵便振替で御送金下さい。
郵便振替　東京 3−605798
日本地球化学会年会準備委員会
宿泊等　各自手配して下さい。
年会申込先及び連絡先
〒183 東京都府中市幸町 3−5−8
東京農工大学農学部内
1992年度日本地球化学会年会準備委員会
安部喜也（0423）64−3311 内線466
小倉紀雄（0423）34−6906（直通）
FAX（0423）60−8264

日本学会事務センター東京事務所の移転

財団法人日本学会事務センターの東京事務所が移転しました。4月13日より，新事務所での業務が開始されました。これにともなって，本学会の事務所も同地に移転したことになります。今後の会員，会誌関係の連絡は，下記あてにお願いいたします。

（財）日本学会事務センター　日本地球化学会係
新住所　〒113 東京都文京区本駒込5丁目16番9号　学会センター　C21
電話番号（ダイヤルイン）
03−5814−5801　学会事務（庶務・窓口，渉外）
03−5814−5810　会員事務（入退会，住所変更等，会費，会誌）
03−5814−5800　大会事務（年次国内会議，国際会議）
03−5814−5811　事業部・海外部（雑誌の国内外への頒布）

日本地球化学会1991年度
第4回評議員会議事録

日　時：1991年12月14日　15：30－17：00
場　所：東京大学教養学部
出席者：綿秋邦彦会長，脇田宏副会長，鳥居鉄也監事，海老原充，小倉紀雄，北　逸郎，佐野有司，清水　洋，高岡宣雄，高野穆一郎，立川　涼，長尾敬介，野津憲治，半田暢彦，藤原祺多夫，松田准一（以上評議員），安部喜也，石渡良志，日下部　実，鈴木徳行，富樫茂子，中井俊一，野尻幸宏（以上次期評議員）

1．前回議事録を了承した。

2．報告事項

2－1　庶務（野津評議員）

第29回理工学における同位元素研究発表会，1992年度質量分析連合討論会の共催を承認した。研究会プログラム1件，研究公募1件が回覧された。平成4年度科研費（学術定期刊行物）の申請を行った。

2－2　幹事会（野津評議員）

12月14日14時より東京大学教養学部において開催。出席者は，綿秋会長，脇田副会長，海老原，清水，高野，野津各幹事で，第4回評議員会の議題内容について議論した。

2－3　編集

(1)　Geochemical Journal（松久評議員からのメモ）

Vol. 25, No. 2は出版済，No. 4は印刷を完了しているが，No. 3が印刷中であるので，No. 3の印刷が済み次第，12月中旬に2冊一緒に配布の予定。No. 5は編集終了。No. 6は12月末までに編集終了予定。今年度の投稿件数は12月2日で52編。

(2)　地球化学（金森評議員からのメモ）

Vol. 25, No. 1は出版済。No. 2は特集号で，1992年2月出版予定。

(3)　ニュース（高野評議員）

No. 127は配布完了。No. 128は1992年2月に発行予定。

2－4　行事

(1)　1991年度愛媛年会（立川評議員）

決算報告が行われた。

(2)　1992年度春季シンポジウム（松田評議員）

講演募集のサーキュラーは配布済み。固有セッション，共通セッション共に申込締切が1992年1月25日。11月25日に1992年地球惑星科学関連学会合同大会の実行委員会が開かれた。

(3)　1992年度東京年会（小倉評議員）

1992年10月1－3日，東京農工大学農学部（府中市）で開催。課題討論を2件予定している。

(4)　その他（清水評議員）

1993年以降も合同大会は継続する見込みで，日本地球化学会の態度をきめる時期になった。11月中旬にAGUの代表と合同大会に参加した5学会代表との意見交換会がもたれた。

2－5　学術会議

(1)　地球化学・宇宙化学研連（石渡次期評議員）

10月28日，12月13日に委員会が開かれた。平成5年度に独立する科研費の細目「地球化学」の審査および審査委員に関連した問題が議論された。「地球化学」のキーワードに「大気海洋生物圏」を加えるように要望を出した。

(2)　陸水圏研連（安部次期評議員）

10月以降委員会が2度開かれ，1993年のIAHSの準備が話し合われている。

(3)　海洋科学研連（半田評議員）

10月30日委員会が開かれ，各種国際プロジェクトへの取り組みが話し合われた。

2－6　会員問題検討委員会（脇田副会長）

「日本地球化学会の会員構成について」と題した小冊子を配布し，2年間の活動のまとめとした。

3．審議事項

3－1　入退会承認

1991年8月1日から10月31日までの入会退会は，以下の通り承認された。

入会（19名－すべて正会員）：永井尚生，百島則幸，青田尚美，植田千秋，河田陽介，末野重穂，辻　正彦，梶原義照，高橋勝治，藤巻宏和，（以下学生）大浦泰嗣，田中宏明，宮崎明子，安藤隆丸，上村　仁，橋爪光，松田直子，野上健治，V.S. マンボ

退会（2名－すべて正会員）：今村哲史，池原義明

また，その他の異動は以下の通りである。

正会員→名誉会員（2名）西村雅吉，鳥居鉄也
学生→一般（1名）：志方比呂基

この結果，会員数は以下のようになった。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1991年8月1日	932	19	4	955
入　会	19	0	0	19
変　更	－2	0	2	0
退　会	－2	0	0	－2
1991年10月31日	947	19	6	972

学生69在外31を含む

3－2　科研費審査員候補者推薦について

平成5年度から科研費の分科細目が変更になり，地球化学は，分科「化学」の中の「分析・地球化学」から分

1992年度日本地球化学会年会

[A]　講演申込用紙　　＊＊6月20日（土）　必着＊＊

演題 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（発表者に○をつけて下さい）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

所属（略記）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

○課題講演を御希望の場合は，次の何れかを○で囲んで下さい。
課題講演（口頭発表）：課題1，　課題2，　課題3

○一般講演の御希望の場合は，次のそれぞれのいずれかを○で囲んで下さい。
発表形式：口頭，ポスター，どちらでもよい
発表分野：大気・降水，岩石・地殻，鉱床，有機物，生物，陸水，温泉，熱水，地球外物質，海洋，堆積物，火山，
その他（　　）

○プログラム編成のため，発表内容を簡単に記して下さい。

○例にならって英文で，氏名，所属機関名，演題を書いて下さい。
（必ずタイプもしくはワープロにしてください。）
例：T. Tokyo and J. Niigata（Fuji Univ., Niigata Univ.）Geochemical studies of hot springs.

○返送用（上記と同じものをお書き下さい）

演題

氏名（所属）

住所　〒

氏名　　様

1992年度日本地球化学会年会

[B] 参加申込用紙　　＊＊9月12日（土）　必着＊＊

ふりがな
氏　名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

所　属＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

連絡先（自宅・勤務先）

〒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

○参加登録（いずれかを○で囲んで下さい）

講　演：　有　　無

参加費：会員　1,000円　　非会員　2,000円　　学生　無料

要旨集：　要　　4,000円　　不要

懇親会：参加（一般　5,000円　　学生　3,000円）　　不参加

送金合計＿＿＿＿＿円

○送金先

郵便振替　東京3－605798　　日本地球化学会年会準備委員会

送 金 日＿＿＿月＿＿＿日

○要旨集送付先（必ず御記入下さい）

住所　〒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

氏名　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿様

○申込用紙送付先　〒183 東京都府中市幸町3－5－8

東京農工大学農学部内

1992年度日本地球化学会年会準備委員会

安　部　喜　也

講演要旨作成上の注意

1) ワープロで記入してして下さい。
2) 全体の記入枠は，A4の用紙に縦横それぞれ235×165mm内に設定して下さい。刷り上がりはB5版になります。
3) 枠内左上端に横40mm×4行サイズの講演番号記入用の空白を残して下さい（例参照）。番号は印刷に廻す時に委員会で挿入します。
4) 演題，所属，発表者（講演者の左側に○を付す）は例示に準じて記入し，本文は5行目から始めて下さい。
5) 下欄の2〜3行に英文で演題，所属，発表者（講演者の左側に○を付す）をお書き下さい(例参照)。
6) 図表が必要な場合は，本文欄内に直接記載もしくは貼りつけて下さい。
7) 用紙は，A4版のワープロ専用用紙か，それに相当する上質紙を縦型に使用して下さい。
8) 印字は鮮明にお願いします。そのためには24ドット以上であることが望ましいですが，24ドット以上でも，プリントの薄いものや不鮮明なものはご遠慮下さい。
9) 一般講演は1枚，課題講演は2枚の用紙にお書き下さい。

(例)

1A 01　　熱帯における化学物質の使用とその地球汚染への影響

○立川　涼・田辺信介・A. Ramesh・岩田久人（愛媛大農）

最近，北極圏における農薬汚染の実態が明らかにされ，およそ8,500トンにのぼる大量のBHCが海水に残存し，毎年500トンを越える量が海流によって南下していると報告された。人工化学物質による北極圏の汚染は急速に進行し，その原因は東欧やソビエトなど極域周辺の国々ばかりでなく，低緯度開発途上国における人間活動や産業活動の影響も……

Use of Chemicals in the Tropical Environment and Impact on Global Pollution

○R. Tatsukawa, S. Tanabe, A. Ramesh and H. Iwata

(Faculty of Agriculture, Ehime University)

科「地球科学」の中の細目「地球化学」として独立する。今回の変更により地球科学関連の審査員候補者の推薦を見直す必要があり，日本学術会議会員３名より関係学会へ12月16日に懇談会を開催する旨通知があった。本学会では，対応策を検討するため，現幹事，旧幹事，研連委員が12月13日に会合をもち，３名の一段審査委員はすべて本学会から推薦する。二段審査委員は化学系，地物系，地質系と持ち回りにする，との基本的な方針をまとめた。この方針に関して質疑応答があり，了承された。また，12月16日の懇談会へは，綿秋会長，脇田副会長，角皆研連委員長が出席することも了承された。

1992年度第１回評議員会議事録要旨

1992年度第１回評議員会は，２月15日15時より東京大学山上会館で開かれ，出席者は脇田会長を始め20名であった。正式の議事録は，次回評議員会で承認されたのち，ニュースに掲載の予定である。

1. 松久幸敬，綿秋邦彦の両会員を会長委嘱の評議員とすることが承認された。
2. 庶務，会計，編集，行事に関する報告があった。
3. 1991年11月１日から12月31日までの入会３名（すべて正会員），退会21名（すべて正会員）が承認された。この結果1991年12月31日現在，正会員929名（学生69名，在外30名を含む），賛助会員19名，名誉会員９名，合計954名となった。
4. 1992－1993年度の期間，会員問題検討委員会，将来計画委員会，名誉会員推薦委員会を設置することが承認された。
5. 地球惑星科学関連学会1993年合同大会に参加することが承認された。また，1992年10月下旬に三朝で開催予定のInternational Working Group on Crater Lakes（仮題）の共催が了承された。
6. 1993年度は本学会創立30周年にあたる。記念事業の取り組みについて意見交換を行った。
7. 平成５年度から科研費の分科細目が変更になり，地球化学は，分科「化学」の中の「分析・地球化学」から，分科「地球科学」の中の細目「地球化学」として独立する。

学術会議第四部会における，審査員候補者の依頼先についての討議の説明があった。地球化学関係では，(1)分科「地球科学」の第２段審査については，地球物理学，地質科学総合，地球化学・宇宙化学の研究連絡委員会において，(2)細目「地球化学」の第１段審査については地球化学・宇宙化学研究連絡委員会において討議する，その際には，関連する地球物理学，地質学総合，化学の３研究連絡委員会の意見を考慮すること，となった。また，地質科学関係の日本学術会議会員３名及び地質科学関連の14学協会でもたれた科研費懇談会（1991年12月16日，1992年２月３日）について脇田会長から説明があった。

研連から学会への審査員候補者の依頼に備えて，学会としての審査員候補者の選考方法について討論がなされた。その結果，今回は，審査員候補者を評議員が投票し，その上位20名の中から会長，副会長が専門分野も考慮して，一段審査，二段審査の審査員候補者を推薦することとなった。

新会員紹介

（1991年11月１日～1992年12月31日分）

正会員（３名）

柳瀬　信之　日本原子力研究所
海老沼孝郎　NHK 応用技術研究所
S梶塚　　泉　名古屋大学理学部地球科学教室
（S は学生）

和文誌「地球化学」の編集について

・編集には会のベテランと新世代が力を合わせます。

1992年４月から和文誌「地球化学」の編集委員が交代しました。委員長は名古屋大学理学部地球惑星科学教室の田中剛が務めます。新しい委員の方々はいずれも30才代，フレッシュな感覚を持った会員です。といってもレベルの高い論文を載せるには，多方面からの厳重な査読が必要と思われます。そこで地球化学分野の長所も短所も見ていただけるベテラン会員にも力添えをいただくことにしました。

＜編集委員会＞

田中　剛（名古屋大学理学部地球惑星科学教室）
赤木　右（東京農工大学一般教育部化学教室）
上岡　晃（地質調査所地殻化学部同位体地学課）
高橋和也（理化学研究所地球科学教室）
原田　晃（資源環境技術総合研究所環境影響予測部海洋環境予測研究室）
山本剛志（神戸大学理学部地球科学教室）
一國雅巳
金森　悟
松尾禎士（電気通信大学自然科学系）

・目標は……

大学に加え，通産省，科学技術庁，環境庁，農林水産省，運輸省などの研究機関で進められている経常研究，特別研究のうち，地球化学に関係した成果を発掘するなど，幅広い論文を取り上げたいと思います。

大学の重点領域研究や総合研究の成果は一部分が学会

誌に掲載されるものの，他の成果は報告書としてまとめられるだけの事があったようです。少し遅れても“地球化学”誌に特集号としてまとめられるのはいかがでしょうか。

・地球化学会の学生は“地球化学”誌でデビューを！

学会の講演では学生や院生のすぐれた発表がたくさん聞かれます。それらは指導の先生方のアドバイスですばらしい論文になります。国内研究機関や大学で広く読まれている“地球化学”誌は絶好の就職PRになります。

・基本は原著論文

学会誌のレベルは何といってもその原著論文で決まります。従来から“地球化学”誌の質は高く評価されてきましたが，これからも原著論文最優先で編集を進めます。優れた原著論文は何といっても一般会員からの投稿を待たねばなりません。ぜひご協力をお願い致します。

〒464－01 名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部地球惑星科学教室
田中　剛
電話　052－781－5111（内線2595）
FAX 052－782－7091

1992年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」の受賞候補者および研究助成候補者の推薦依頼について

下記の推薦依頼がありました。

三宅賞

1. 本賞は地球化学に顕著な研究業績をおさめた科学者に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし，副賞として賞牌および賞金（30万円）をそえます。
3. 本賞の贈呈は，1年1件（1名）とします。
4. 規定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目，推薦理由（400字程度）

主な論文10編程度に略歴をそえて，協会事務所までお送り下さい。

研究助成

1. 研究助成は地球化学の研究者で，海外のシンポジウム等に出席し論文を発表する者，ならびに海外における学術調査研究などに参加する者に対して行われます。
2. 助成金は1件10万円とし，年に3件とします。
3. 規定の用紙に推薦候補者（各締切日において満40才とする）のシンポジウム出席については略歴，研究業績，国際会議名（主催団体，開催場所，開催年月日），論文題目，推薦理由等を，海外学術調査に関しては，略歴，研究業績，調査地（国名，地域名），調査目的・計画，推薦理由，同行者などを記入して，協会事務所までお送り下さい。

三宅賞の贈呈および研究助成者の発表は，1992年12月5日（土），東京で行います。

申込締切日は，三宅賞は，1992年8月31日（月），研究助成は，第1回締切1992年8月31日（月），第2回締切1993年1月末日。

申込先

地球化学研究協会

〒166 東京都杉並区高円寺北 4－29－2－217
電話 03－3330－2455（FAX兼用）

トヨタ財団1992年度研究助成の公募について

トヨタ財団よりの研究公募の案内について要旨を掲載します。

トヨタ財団では，「新しい人間社会の探求」を基本テーマとして，研究助成を行います。特に，次の2つの課題に重点をおいて助成いたします。(1)高度技術社会への対応，(2)多文化社会への対応，斬新な発想による研究計画の応募をお待ちしております。

＜助成の対象＞

・上記の基本テーマに関する研究で，第Ⅰ種研究（個人奨励研究），第Ⅱ種研究（試行・準備研究），第Ⅲ種研究（総合研究）の三つの研究種別があります。詳しくは応募要項をご参照下さい。

＜助成の金額・期間＞

・助成金額は合計2億円程度です。
・助成期間は本年11月1日より1～2年間とします。

＜助成の決定＞

・研究助成選考委員会（委員長　飯島宗一）にて慎重厳正に選考の上，9月末の理事会にて決定いたします。

＜応募期間＞

・応募期間は本年4月1日から5月31日（当日消印有効）までとします

＜申請用紙の申込み＞

・送料分の切手（1部250円，速達分210円）を同封し，5月15日までに研究助成係宛，お申込み下さい。

＜申請用紙の申込み先＞

〒163 東京都新宿区西新宿2－1－1
新宿三井ビル37階私書箱236号
財団法人　トヨタ財団研究助成係
Tel. 03-3344-1701

1991年度地球化学若手会の報告および1992年度地球化学若手会の案内

地球化学若手会は，若手の地球化学者がともに議論し，情報を交換して，親睦を深めることを目的としており，今回で4回目となります。これまでは地球化学会年会終了後に行っていましたが，今回は趣向を変えて，8月17日から19日まで，静岡県榛原町静波の㈱培本塾会館で行いました。「地球温暖化問題（特にCO_2問題を中心に）へのアプローチ」および「海洋における物質循環（海洋フラックス）へのアプローチ」をテーマに，広い分野から多くの若手研究者の参加があり，白熱した議論が行われ，盛会裏のうちに終わりました。

以下の演題が発表された後，総合討論，巡検（静波海岸）が行われました。

【第1日目】(8月17日)

石井　雅男（気象研），大気中の二酸化炭素濃度の季節変動と二酸化炭素の大気－海洋間交換

[illegible]　宗興（農環研），湖，海洋，土壌でN_2Oがどのように生成されているか

渡辺　豊（北大水産），化学トレーサーによる水塊流動の解析

中塚　武（名大水圏研），高緯度表面混合層の栄養塩収支と物理・生物過程－窒素同位体比からの評価の可能性－

武田　重信（電中研），海洋性植物プランクトンによるCO_2の固定－鉄散布による南極植物プランクトンの増殖促進効果－

【第2日目】(8月18日)

村山　雅史（東大海洋研），最終氷期から後氷期にかけての深層水循環

[illegible]　憲和（電中研），CO_2の深海貯留について

小松　圭（近大理工），大気中の気体状あるいは超微粒子状金属化合物に関する一考察

下島　公紀（電中研），海洋における重金属の分布と挙動

三島　康史（中工試），沿岸海域における浮遊性大型粒子について

[illegible]尾　誠也（日本原研），分光学的手法による海底堆積物中の鉄，マンガンの存在形態同定の試み

[illegible]皆　潤（東大理），日本近海深海底堆積物中の微量元素に関する地球化学的研究

[illegible]田　誠（東大海洋研），深海底堆積物における帯磁率と酸素同位体比の関係

[illegible]藤　孝（筑波大地球科学），海洋底マンガン酸化物から読める海洋の化学環境

石橋純一郎（東大理），南太平洋縁海系の海底熱水系

【第3日目】(8月19日)

丸山　明彦（微工研），海底熱水噴出に伴う微生物活動と有機物生産

この会を開催するにあたっては，重点領域研究「オーシャンフラックス」総括班の諸先生にご助言頂きましたことをお礼申し上げます。また，今回の報告書を作製いたしましたので，ご希望の方はご連絡下さい。

1992年度の本会は，7月31日～8月2日に同じ場所での開催を予定しております。興味をお持ちの方は，是非とも御参加下さいますようお願いいたします。詳細については世話人までお問い合わせ下さい。

1991年度地球化学若手会世話人：中口　譲（近畿大学），石橋純一郎(東京大学)，下島公紀(電力中央研究所)

報告書請求先および1992年度同会の案内

〒270－11 千葉県我孫子市我孫子1646
㈱電力中央研究所，水理部，下島公紀
TEL　0471－82－1181
FAX　0741－83－2966

日本宇宙生物科学会第6回大会のお知らせ

日本地球化学会の協賛で上記学会が開催されます。

記

宇宙と生物科学の接点に関する広い研究分野の振興を目的とした日本宇宙生物学会も，発足以来6年目を迎えるに至りました。この間，宇宙生物科学が一つの学術分野として確立され，発展してゆくべく，努力を致してまいりました。宇宙生物科学は多岐にわたる学術分野との密なる連係を保ちつつ発展すべき分野であります。

日本宇宙生物学会の定例活動として，第6回大会を下記の要領で開催したします。

日　時　1992年10月24日（土）－25日（日）
場　所　仙台市片平市民センター
仙台市青葉区米ヶ袋1－1－35
連絡先　〒980 仙台市青葉区片平2－1－1
東北大学遺伝生態研究センター
日本宇宙生物学会第6回大会運営委員会
委員長　菅　　洋

「火口湖に関する三朝シンポジウム」開催のお知らせ

1992年10月19日～24日，標記の国際シンポジウムが鳥取県三朝町の温泉会館で開催される。同シンポジウムはニオス湖ガス災害の後で結成された火口研究国際ワーキンググループ（International Working Group on

Crater Lakes, IWGCL）の第2回研究集会を兼ねる。

火口湖は通常，火道の直上に位置しており，そこにはマグマから放出された揮発性物質や熱が補捉され得る。カメルーンの火口湖における大規模ガス災害は，火山性の二酸化炭素が過度に蓄積し，それが突如として大気に解放された結果であった。火山から放出される揮発性物質やエネルギーフラックスの正確な見積りは火山学上の重要な知見であり，またニオス湖型災害の発生予測や防災にとって基本的な情報である。本シンポジウムでは地球内部から火山および火口湖に供給される揮発性物質とエネルギーのフラックスの見積りに関する研究に焦点を当てるとともに，広く火山性の湖を深部気体－熱水－地下水の相互作用の場としてとらえ，その解析から火山湖の下部で起こっている現象の解明を目的とする。

本シンポジウムは下記の要領で行われる。関心のある方の積極的な参加を希望する。

日　　時　1992年10月19日(月)～22日(木)
場　　所　鳥取県三朝町　温泉会館(宿泊を兼ねる)
参加申込締切　1992年6月15日(月)
講演要旨締切　1992年8月15日(土)
講演要旨　英文，A4用紙にシングルもしくはダブルスペースで2枚まで
実行委員　日下部　実(岡山大・地球研，委員長)，水谷義彦(富山大・理)，高野穆一郎(東大・教養)および野尻幸宏(国立環境研)

なお，10月22日(木)～24日(土)には富山県立山火山の火口湖跡および地獄谷噴気孔地帯の巡検を予定している。またこのシンポジウムは文部省の平成4年度国際シンポジウムの援助を受けており，旅費の一部を支給することがある。詳細についてのお問い合わせとサーキュラーの請求は下記宛まで。

日下部　実（岡山大・地球内部研究センター）
Tel.　0858-43-1215 内線 700
Fax.　0858-43-2184

BIOSIS 基礎講習会開催の案内

主催　化学情報協会
共催　日本地球化学会ほか

BIOSIS は生命科学分野における最も広範な文献データベースです。講習会では，BIOSIS Previews のデータ内容，基本的な検索方法，補助資料 Search Guide の使い方を説明いたします。化学情報協会では，BIOSIS との契約により日本での BIOSIS の講習会を担当しています。下記の日程で開催いたしますので，ぜひご参加ください。

5月20日(水)　10:00～16:00
　会場：大阪　朝日ハイメディアセンター
6月11日(木)　10:00～16:00
　会場：東京　化学情報協会
参加費　10,000円（消費税は含まれておりません。）
申込先　TEL：03－3816－3462
　(社)化学情報協会
　　オンライン情報部　講習会係

IGC ニュース　No. 12

29th IGC 事務局（1992年3月）

＜参加登録中間集計＞

3月19日現在の登録総数は2368人（同伴者193人）となりました。上位10カ国の登録者数は以下の通りです。（　）内は2月17日現在。現在も毎日10件位の申込が続いております。

日　　本：	1048	(894)
米　　国：	232	(199)
旧　ソ　連：	183	(178)
中　　国：	175	(167)
ド　イ　ツ：	71	(67)
フ　ラ　ン　ス：	76	(66)
イ　ギ　リ　ス：	60	(51)
イ　　ン　ド：	47	(41)
オーストラリア：	37	(35)
イ　タ　リ　ア：	35	(25)

＜巡検申込状況＞

2月16日現在の登録状況は以下の通りです。
A（会議前，17コース，総定員525名）：169名
B（会議中，25コース，総定員973名）：284名
C（会議後，25コース，総定員720名）：237名

既に定員をオーバーしているものは，A07，C20およびC33の3コースで，いずれも鉱床関係（黒鉱や金鉱床など）である事が注目されます。一方，登録数が定員の20%に満たないものもあり，その一部を中止あるいは他コースと合体し，A14コース，B20コース，C19コースとなる見込みです。詳しくは下記の巡検小委員会にお問い合わせ下さい。

名古屋大学理学部地球科学教室内
29th IGC 巡検小委員会
Tel：052－781－5111（代）
Fax：052－782－7091
　ext. 2527（足立），3558（鈴木）

＜Geohost 選考結果＞

ユネスコと第29回 IGC 組織委員会からそれぞれ1万ドルを拠出して，旅費を支給する開発途上国からの招聘者が最終的に決定しました。内訳は以下の地域から合計11名です

アジア（5），中近東－東欧（2），中南米（2），アフリカ（2）

＜ジャパンファンドによる招聘者＞

ジャパンファンドは寄付金を基に設立された基金で，開発途上国からの参加者に滞在費と登録料を援助するものです。以下の地域の合計298名が選ばれました。

アジア（138），中近東－東欧（105），中南米（25），アフリカ（30）

＜プログラム案作成＞

3月19日の代表委員会でプログラム案が確定しました。4月上旬の組織委員会の審議を経て，印刷作業に入ります。

＜会場関係アルバイト募集中＞

会議場などで会の運営を助けるアルバイトを募集しています。国際会議の雰囲気を知るまたとないチャンスですから，学生・院生は積極的にお申込下さい。詳しくは下記の会場小委員会にお問い合わせ下さい。

〒606 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部地質学鉱物学教室内
29th IGC 会場小委員会
（委員長：西村　進教授）
Tel：075－753－7531
Fax：075－711－1377

＜皇太子殿下名誉総裁に＞

1月17日，皇太子殿下が IGC 組織委員会の名誉総裁に就任されました。

＜2月以降の主な予定＞

2月　Abstract 採否決定と通知
　巡検コースの最終案決定
3月1日　事前登録締切
　19日　プログラム全体委員会（日程確定）
　20日　3rd Circular 原稿締切
4月上旬　第8回組織委員会，3rd Circular 印刷へプログラムの詳細決定（時間，会場など）
　30日　科学展示申込締切
5月上旬　参加者へ，発表のセッション名・日程・オーラル／ポスターの区分などを通知
6月　3rd Circular 発送，第9回組織委員会 Program 完成
　30日　Registration Summary and Housing Directory 原稿締切，印刷へ
7月下旬　Abstract 集完成

地質調査所の「地質ニュース」には，IGC 事務局ニュースが毎号掲載されています。あわせてご覧下さい。また，ご質問ご意見は下記事務局まで。

〒305 筑波学園郵便局　私書箱65号
第29回万国地質学会議事務局
Tel.　0298－54－3627
Fax.　0298－54－3629

バイカル国際生態学研究センター（BICER）について

1990年12月，旧ソ連科学アカデミーの決定および旧ソ連政府の承認に基づいて，同科学アカデミー・シベリア支部傘下の陸水学研究所（Limnological Institute, イルクーツク市）を核にバイカル国際生態学研究センター（Baikal International Center for Ecological Research：略称 BICER）が開設され，現在ロシア科学アカデミーがそのまま引き継いで事業を進めている。このセンターは政府からは独立した組織で，各国から参加した研究者の代表で構成する設立運営委員会（Founding Members Council of BICER）によって全てが決定され，研究成果の発表も全く自由という画期的なものである。このセンターはその名の通りバイカル湖およびその流域に関わる国際的な共同研究を進めることを目的としており，目標として次の4つが掲げられた。

1. バイカル湖の生態系の学際的な基礎研究および世界の他の大水域生態系との比較研究。
2. 世界的な継承地域としてのバイカル湖の保全に対する科学的なサポート
3. 「グローバルチェンジ」研究計画への参加
4. 若手研究者の育成と生態学的知見の普及

バイカル湖は，バイカルリフト系の中心にあって「生まれつつある大洋」と言われており，今も毎年幅が2cm，深さが6mm ずつ増している生きた湖である。しかし，まわりの海から切り離されてから2億年，ほぼ現在の形になってから2400万年が経っていると言われる世界で最も古い湖の一つである。40m を越す世界有数の透明度は有名であるが，世界の液状の淡水の20% を占めると言われる世界最大の容積を持ち，1637m という世界最大の水深を持つ湖である。モンゴルにも深く入り込んだ最大の流入河川セレンガ河をはじめとする330にも及ぶ流入河川の流域面積は，日本の総面積の1.4倍強に及び，長さ640km，最大幅80km という海のような湖である。この巨大な湖の水は，しかし，驚くほど均一であることが最近明らかにされており，平均滞留時間400年といわれる湖水の混合のメカニズムに大きな関心が持たれている。湖底まで十分にある溶存酸素は，深さごとにいろいろな生物種のすみ分けを可能にしている。流域は非常に長い間海から隔絶されてきたため，2000種近く記載されている生物種の2/3は固有種で，この中

には世界唯一の淡水アザラシ，バイカルシールもいる。そして，これらの生物は人為的な絶滅を免れて今もそのまま生存を続けている。

日本の研究者に対する BICER への参加の呼び掛けは，1989年12月，旧ソ連外務省から外務省を経て環境庁に伝えられ，国立環境研究所を経て，直接話を聞いた研究員が所属していた日本陸水学会および日本生態学会に持ち込まれた。「研究者に関心が無ければ始まらない」と言うことで行ったアンケート調査の結果をもとに1991年3月，日本 BICER 協議会（奥田節夫会長。Japanese Association for Baikal International Research Program：略称 JABIRP＝ジャビラップ）が結成された。この協議会は日本の研究者が BICER での国際共同研究に参加する条件を整えることを主目的とし，学会の枠を考えない任意団体である。昨年8月には第1回バイカル湖予備調査（10名参加）を行い，同12月にはイギリスのロイヤルソサエティとともに研究計画や施設設備の運用計画の決定に議決権を持つ設立運営委員会メンバー資格（最低1口10万ドルの拠出金を払い，設立運営委員会の決定が必要）を獲得した。更に本年3月には，先行主要プロジェクトの1つであるバイカルドリリングプロジェクト（BDP）にロシア，アメリカのチームに次ぐ第3の共同研究者として受け入れられた。1992年度は，科研費も給付されいよいよ研究がはじまろうとしているところである。

日本 BICER 協議会は，バイカル湖での研究に興味を持つあらゆる分野の研究者の入会を歓迎します。問い合わせ，入会の申し込みは事務局まで。

日本 BICER 協議会
事務局（代表　河合崇欣）
国立環境研究所地球環境研究グループ内
〒305 つくば市小野川16－2
電話 0298－51－6111
Fax. 0298－51－4732

International Conference on Groundwater Quality Management GQM 93

6－9 September, 1993
Tallinn, Estonia

Extract from First Circular, January 1992

Objectives and Scope

Dealing with problems of groundwater quality requires knowledge of physical, chemical and biological processes in addition to site specific information regarding the aquifer system. It also requires knowledge of advanced simulation methods and techniques of engineering design. Many previously established concepts and engineering practises must be critically reexamined prior to taking any remedial action and regulatory measures. Such caution is necessary because:

1) significant uncertainty exists about various processes,
2) unexpected complexity is often found in actual field environments, and
3) limitations exist when using modern measurement and simulation methods.

The major objective of this conference is to discuss the full range of issues involved in groundwater quality management. The ultimate aim is to help participants determine critical factors that require attention for particular categories of contamination problems. The conference topics are:

- Problem Scales and Variability
- Chemical Process and Complexities
- Physical Processes
- Predictive Analysis
- Remedial Design Approaches
- Regulatory Issues

Call for Papers

Participants intending to present a paper are requested to send a 1-2 page abstract in English to the Conference Secretariat. The abstract should be received by 31 May 1992. Authors will be accepted contribution will be invited to submit the full paper, which will be prepublished in an IAHS Proceedings volume. A number of selected, extended and further elaborated conference related issue of the journal Advances in Water Resources (editors attending the conference). In addition to oral presentations, a number of poster sessions will be held.

Important Deadlines

May 31, 1992: Receipt of abstracts
September 30, 1992: Nitification of acceptance of abstract
February 28, 1993: Submission of papers

CONFERENCE SECRETARIAT ADDRESS

GQM 93
C／O Institute of Ecology and Marine Research
Paldiski Road 1, 200001 Tallinn, Estonia
telephone +7 (0142) 451634 or 453318
fax +7 (0142) 453748

International Mineralogical Association 16th General Meeting

4－8 September, 1994
Pisa, Italy

ANNOUNCEMENT

The 16th General Meeting of International Mineralogical Association will be held in Pisa, Italy, 4－8 September 1994. The meeting, sponsored by Societá Italiana di Mineralogia e Petrologia (SIMP), Consiglio Nazionale delle Ricerche (CNR) and European Mineralogical Union (EMU), will be organized by SIMP.

The scientific part of Meeting will consist of invited plenary lectures, symposia and poster sessions. Following a tradition of IMA, all IMA commissions and working groups are invited to propose topics for the symposia. The Organizing Committee will add complementary symposia so to achieve a comprehensive scientific program covering all fields of mineralogy. Emphasis will be placed on high quality poster sessions.

So far a number of field excursions of mineraligical, petrological and volcanological interest has already been proposed:

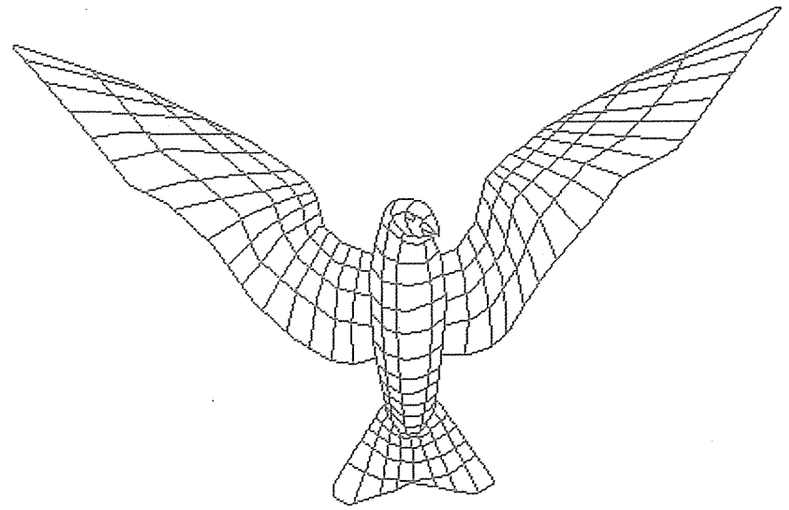
- High pressure metamorphism in the Western Alps
- Orogenic peridotites from the Western Alps and Northern Apennines
- Mineralogy, petrology and ore deposits of Sardinia
- Recent magmatic rocks and ore deposits of the Tuscan anatectic province
- Pegmatites of the central Alps and their minerals
- Volcanoes of the Neapolitan area: Vesuvius, Ischia and Phlegraean fields
- Active volcanoes of Sicily: Aeolian islands and Etna
- Minerals and ornamental stones of Tuscany
- Stones: from quarries to the monuments
- Archeological and natural heritage of the mineral resources of Tuscany

The First Circular will be sent to all national representatives in the first months of 1992. To receive a personal copy of the First Circular, please return the following form to prof. Stefano Merlino, General Chairman of the Organizing Committee:

Prof. Stefano, Merlino, Organizing Committee of IMA 1994
c／o Dipartimento di Scienze della Terra, University of Pisa
Via S. Maria 53, 56100 Pisa, ITALY
Fax: 0039－(0) 50－500932. E－mail: MERLINO
at ICNUCEVM

Please, send me a copy of the First Circular for the IMA General Meeting of 1994.

Title: (Prof., Dr., Mr., Mrs.)
Family name: _____
First name: _____
Institution: _____
_____
Address for correspondence: _____
_____
City (State): _____ Zip code: _____
Country: _____
Signature: _____ Date: _____



日本学術会議だより　No.24

第15期特別委員会の活動始まる

平成４年３月　日本学術会議広報委員会

日本学術会議では，昨年の10月の総会において設置された第15期の各特別委員会が活動を始めましたが，今回の日本学術会議だよりでは，これらの特別委員会に加えて，日本学術会議主催ＩＧＢＰシンポジウム等についてお知らせいたします。

第15期の特別委員会

昨年10月の第113回総会で決定された，日本学術会議の第15期活動計画では，活動の重点目標として，①人類の福祉・平和・地球環境の重視，②基礎研究の重視，③学術研究の国際貢献の重視，の３本の柱を掲げるとともに，これらの重点目標を踏まえて，多方面の科学者によって構成される日本学術会議にふさわしく各分野にわたって広く対応し，かつ第15期中に適切な形で報告・提言に取りまとめるべき具体的課題として14の課題を選定している。

具体的課題のうち，今期中に一応の結論を出すことが望ましい臨時的な７つの課題については，それぞれ特別委員会を設置し，審議を開始した。

各特別委員会の名称及び任務等は次のとおりである。

◆文化としての学術
　委員長：宅間　宏（第４部会員）
　（任務）学術は，人類発展の基礎である。学術研究の意義についての社会的認識を深めるため，文化としての学術の在り方を検討する。

◆平和と安全
　委員長：香西　茂（第２部会員）
　（任務）平和と安全の確保や国際摩擦の解消等に関する研究推進の在り方及び研究体制等について検討する。

◆死と医療
　委員長：小坂二度見（第７部会員）
　（任務）医療技術の急速な進展は，自然科学の分野だけでなく，人文・社会科学の領域にも種々の問題を提起している。終末医療における尊厳死，安楽死や医療経済の問題，さらに説明と同意などの社会的側面等人の死と医療の在り方について検討する。

◆生命科学と社会的諸問題
　委員長：山科郁男（第７部会員）
　（任務）生命科学とその応用の急速な進展に伴い，倫理的，社会的諸問題並びに規制の在り方等について検討する。その際，我が国における生命科学の研究体制の在り方にも留意する。

◆人口・食糧・土地利用
　委員長：梶井　功（第６部会員）
　（任務）世界人口の増加や地球環境変化による食糧需給の不安定化問題と，これらに伴う土地利用変化の諸影響等を総合的に検討して，人間活動の在り方を探る。また，一極集中の激しい我が国の現状を勘案し，今後の国土利用の在り方についても検討する。

◆資源・エネルギーと地球環境
　委員長：吉野正敏（第４部会員）
　（任務）資源・エネルギーの開発と利用に伴う自然及び人間社会への影響を研究し，「持続可能な発展」のための諸方策と環境教育の在り方等について検討する。

◆巨大システムと人間
　委員長：内山喜久雄（第１部会員）
　（任務）技術革新・システムの巨大化が人間に及ぼす影響について，安全性確保と人間性尊重の立場から検討する。

これらの各特別委員会は，発足以来現在までに各々２～３回の会議を開催して，それぞれの任務に添った具体的な審議課題や今後の審議計画等について熱心に審議を進めている。今後の審議の成果が大いに期待されているところであり，今後，審議成果が発表され次第紹介していく予定である。

公開講演会の開催状況

第15期に入って，初めて開催された日本学術会議主催公開講演会は，「文明の選択－都市と農業・農村の共存を目指して－」と題して，平成４年１月27日(月)13時30分～16時30分に，福岡明治生命ホール（福岡市）で開催され，水間会員(第６部)，北村会員(第６部)及び利谷会員(第２部)の講演が行われ，多数の聴講者があった。

つづいて，「子どもの人権を考える」と題して，平成４年３月７日(土)13時30分～16時30分に，日本学術会議講堂で開催され，堀尾会員(第１部)，永井会員(第２部)及び馬場会員(第７部)の講演の後、熱心な質問が続出した。

地球圏－生物圏国際協同研究計画（ＩＧＢＰ）シンポジウム

日本学術会議主催の地球圏－生物圏国際協同研究計画（ＩＧＢＰ）シンポジウム「日本のＩＧＢＰ研究の現状と将来」が去る２月４日(火)，５日(水)の両日，日本学術会議を会場として開催された。

日本学術会議においては，平成２年４月の総会において，「地球圏－生物圏国際協同研究計画（ＩＧＢＰ）の実施について(勧告)」を採択し，政府に対し研究の積極的な推進を求めたところであるが，ＩＧＢＰについて国内の各研究者，研究機関において実施される研究の促進を図るとともに，この研究が極めて多くの分野にわたり，また多数の研究機関が関与していることから，この研究の連絡，調整を図る場として，本シンポジウムを開催することとしたものである。また，我が国のＩＧＢＰの研究が，広義のモンスーン・アジア地域，西太平洋地域，極域を中心に行われることから，これらの地域の研究者を招きそれぞれの国の研究の状況の紹介，意見交換を行った。

本シンポジウムの内容は次のとおりである。

（１日目）
講　演　　ＩＧＢＰについて
第１領域～大気微量成分の変動と生物圏
(1) 地球大気化学国際協同研究計画（ＩＧＡＣ）
(2) ＩＧＡＣの東アジアにおける展開（ＡＰＡＲＥ）
第２領域～海洋における炭素循環
(3) 海洋における炭素循環
第３領域～地球変化に係わる生態系及び水循環
(4) 炭酸ガス変動が炭素循環に及ぼす影響
(5) 水循環と生態系（ＢＡＨＣ）
第４領域～地球圏－生物圏の相互作用を考慮したモデリング
(6) 気候モデルおよび大気化学モデル
(7) 局地気候・環境モデリングの立場から
(8) 生態系モデリングの立場から
第５領域～ＩＧＢＰにおける地球観測衛星の整合性と問題点
(9) 気象衛星データの現状と将来
(10) 地球観測衛星データの現状と将来
(11) ＮＡＳＡ ＥＯＳ と ＡＳＴＥＲ
第６領域～古環境変化の原因と応答
(12) ＰＡＧＥＳについて
(13) 南極氷床ドーム深層掘削観測計画
(14) 温暖化と沿岸環境
第７領域～農林水産活動の地球環境への影響
(15) 農業生態系に関する地球環境研究－メタンと温暖化－
(16) 森林・林業に関する地球環境研究－炭素収支と温暖化の抑制－
（２日目）
特別講演～ナショナルプロジェクト紹介～
オーストラリア，中国，フィリピン，タイ及び日本
領域別個別討議
第１領域から第７領域まで
各領域からの報告
総合討論

当日は２日間にわたるシンポジウムであったが300人を超える参加者があり，盛況のうちに終了した。

本シンポジウムの成果は，報告書として取りまとめ，今後の研究の参考資料として関係機関・研究者等に配布することとしている。

なお，平成４年度にも引き続き本シンポジウムを開催する予定である。

二国間学術交流事業

日本学術会議では，二国間学術交流事業として毎年代表団を海外に派遣し，訪問国の科学者等と学術上の諸問題について意見交換を行って，相互理解の促進を図る事業を行っている。

この事業は，昭和58年度から実施されており，これまでにアメリカ合衆国，連合王国，オーストラリア，中華人民共和国等19か国に代表団を派遣してきた。

平成３年度は，11月４日から14日までの11日間の日程で，ベルギー王国及びオーストリア共和国へ，川田侃副会長を団長とする計10名（うち随行事務官２名）から成る代表団を派遣した。

ベルギー王国では，科学技術担当省，科学、文学及び芸術に関する王立アカデミー，ブリュッセル自由大学，ＥＣ本部教育関係機関，ＥＣ本部環境総局などを，また，オーストリア共和国では，科学研究省，オーストリア科学アカデミー，ウィーン大学，ドナウ河畔の国連都市にある国際原子力機関（ＩＡＥＡ），国連工業開発機関（ＵＮＩＤＯ）などを訪問した。

各訪問先では，関係者との間で，それぞれの国の学術研究体制や科学技術政策などをめぐって活発な意見交換が行われた。

特に印象的だったものとして，まずベルギー王国では，ＥＣが推進しているERASMUS計画，これはＥＣ Action Scheme for the Mobility of University Students の略で，ＥＣ12か国の大学生を域内各国へ相互留学させて，専門課目や語学の能力向上あるいは風俗習慣の理解をはかろうとするもので，ＥＣの将来に大きく貢献するものと思われる。また，ベルギー王国は，長い歴史の流れの中で，フランス語とオランダ語の２か国語が話されてきたため，この言語間の対立が，政治・経済の発展はもとより，学問の分野にも非常に複雑な影響を与えていることであった。今回訪問した科学，文学及び芸術に関する王立アカデミーやブリュッセル自由大学もまったく同名のアカデミーと大学がフランス語系（ワロン系）とオランダ語系（フラマン系）とに分かれて存在しており，我々の代表団も，団編成を２班に分けてこれらの機関を訪問することになったことは，非常に印象的であった。

オーストリア共和国では，650年の伝統をほこるウィーン大学やオーストリア科学アカデミーの建物の重厚さに目を見はり，またドナウ河畔に作られた国連都市にＩＡＥＡとＵＮＩＤＯの２つの国連機関を訪問した際には、ＩＡＥＡのチェルノブイリ原発事故以後の核問題への積極的な取り組みやＵＮＩＤＯの開発途上諸国における工業発展に対する貢献度の大きさに団員一同大いに感激するとともに，Ｄ．Ｌ．Siason Jr. ＵＮＩＤＯ事務局長の流暢な日本語には，だれもがびっくりさせられた。

近年，学術，特に基礎研究における我が国の国際貢献の重要さがウェイトを増す中で，この種の学術交流事業は益々強化されるべきものであることを，派遣代表団員全員が強く認識させられた今回の渡欧であった。

御意見・お問い合わせ等がありましたら，下記までお寄せください。
〒106 東京都港区六本木７-22-34
日本学術会議広報委員会　電話03(3403)6291

1992年度質量分析連合討論会

主　催　日本質量分析学会
共　催　日本地球化学会ほか
後　援　工業技術院化学技術研究所
会　期　1992年5月13日（水）～15日（金）
会　場　工業技術院筑波研究センター共用講堂［茨城県つくば市東1－1－4］

プログラム

第1日（13日）

【シンポジウム】（9.00～12.00）
「バイオサイエンスにおける質量分析」

1-S-1　高性能質量分析計の性能（日立那珂・阪大名誉教授*）○田谷俊陸・松田　久*
1-S-2　生体関連物質の質量分析におけるイオン化法－FD及びFAB/SIMS－（名工大）奥山文雄
1-S-3　エレクトロスプレーLC/MS最前線（山梨大工）平岡賢三
1-S-4　高い流量を導入できるエレクトロスプレーイオン源の開発（日立中研）○高田安章・坂入　実・神原秀記
1-S-5　タンパク質，ペプチドの磁場型質量分析計による負エレクトロスプレー・マススペクトル（大阪府母子医療センター・阪大教養*・JEOL USA**）○和田芳直・松尾武清*・J. Tamura**・R. B. Cody**・B. B. Musselman**
1-S-6　タンパク質化学におけるエレクトロスプレー・マススペクトル（阪大蛋白研）○綱澤　進・宮城　大

【シンポジウム】（13.00～14.50）
「イオンの生成と反応（イオン分解）」

1-S-7　イオン分解の動力学と統計理論（アップジョン筑波総研・化技研*）○西村俊秀・丹羽吉夫*
1-S-8　MIKEスペクトル法による有機ケイ素化合物の分解機構の研究（群馬高専・信越化学リサーチセンター*）飛田成史・○田島　進・荻野和夫*・田部井栄一*・森　滋*・岡田文夫*
1-S-9　気相FAB法におけるイオン生成と内部エネルギーの起源（東邦大薬）高山光男
1-S-10　N-(置換フェニルアセチル）ラクタム類のEIMSで出現する二重水素転位イオン強度の定量的取扱いの試み（大阪女大・日立計測*・阪府大農**）○山岡寛史・大槻朋子・千田直人*・中山　充**
1-S-11　二重項クラスターイオンの構造と分子イオン種の生成について（星薬大）○鴨原　淳・市川　紘

【ポスター発表】（14.50～17.00）

1-P-1　磁場型質量分析計による高分解能ESIスペクトル（日本電子・JEOL USA*）○野嶋一哲・尾崎悦夫・貫名義裕・板垣又丞・R. B. Cody*・B. D. Musselman*
1-P-2　ESIの二重収束質量分析計への応用II（日本電子・JEOL USA*）○尾崎悦夫・大塚紀一郎・貫名義裕・野嶋一哲・B. D. Musselman*・R. B. Cody*・J. Tamura*
1-P-3　非水溶媒を用いた負イオンモードES/MS（山梨大工）○藤巻　奨・久高一郎・平岡賢三
1-P-4　ESIイオン化におけるMS/MS分析条件について（フィニガンマット）○馬　　丹・金井みち子
1-P-5　負イオンESI用標準物質の検討（東ソー高分子研・日立那珂*）○常藤透朗・永田公俊・加藤義昭*
1-P-6　ESI－LC/MSにおけるスプレー制御法の検討（化技研）○石川啓一郎・丹羽吉夫
1-P-7　溶媒スプリット方式を用いたLC/ESI－MSの開発（日立那珂）○松村和美・三村忠男・加藤義昭
1-P-8　エレクトロスプレーによる低分子量物質の定量測定の試み（阪大医療短大・阪大教養*）○荒川隆一・伊藤智行*・松尾武清*
1-P-9　酸化・還元法を用いた中性分子C_{60}およびC_{70}のエレクトロスプレーによる検出（山梨大工・三重大工*）○藤巻　奨・久高一郎・平岡賢三・篠原久典*
1-P-10　ESIによるTTXおよびPSPの測定（東薬大・東水大*・韓国海洋研**・東大農***）○志田保夫・長島裕二*・銭　重均**・野口玉雄***
1-P-11　FDMSにおけるポリスチレンのイオン化挙動（川崎製鉄）脇坂逸子・○志村　眞
1-P-12　化学イオン化法における付加イオンの特性（成蹊大工・ジャスコインタナショナル*）○代島茂樹・柴田明宏*・飯田芳男
1-P-13　大気圧スプレー（APS）イオン化法における疑似分子イオンの生成過程（日立中研・長岡技科大工*）○平林　集・高田安章・神原秀記・太田一司・伊藤治彦・朽津耕三*
1-P-14　FAB－MSのイオン化（VI）－M^+及びMH^+生成に対するアセチル化の効果－（東邦大薬）高山光男・○田中克明・野村太郎
1-P-15　Glycerol, D_3-glycerol (OD)$_3$, D_8-glycerolをマトリックスとする［$RuCl_2(bpy)_2$］(M）および［$Ru(CN)_2(bpy)_2$］(M）錯体のLSIMSスペクトル中で観測された(M）および(M+G）へのH^+およびD^+，あるいはH^+の付加（日医大化・立教大理*）○田中幹夫・永井俊・三木瑛一*・石森達二郎*
1-P-16　ジオールおよび関連化合物のアルカリ金属付加イオンについて（東大応微研）○森崎尚子・井上和彦・岩崎成夫
1-P-17　カチオン化分子の構造とCIDスペクトルーアルカリ金属カチオン化分子－（田辺製薬有機研）○椎名園子・岡村公生・絹巻明生
1-P-18　バリン系，アルギニン系ジペプタイドのCADスペクトルの研究（福井大教育・大日本製薬*）○平井香織・伊佐公男・藤巻　厳*
1-P-19　衝突励起（CID）された分解前分子イオンの内部エネルギー分布および励起機構（アップジョン筑波総研）○西村俊秀・R. H. Robins・W. K. Duholke
1-P-20　糖類とキラル有機カチオンとの1：1付加イオンージアステレオマーのFABMSとFABMS/MSスペクトルの検討（阪大産研・三共分析代謝研）澤田正實・○阪村泰男・高井嘉雄・山田　等・高橋成年・木下　武・渡邊てるみ
1-P-21　糖類ホストと有機カチオンゲストとの相関－FABMSにおける1：1付加イオン相対ピーク強度と溶液中における平衡定数との直線相関－（阪大産研）澤田正實・○奥村泰男・高井嘉雄・山田　等・日高元雄・高橋成年
1-P-22　N－メチルピリジニウムハライドのSIMSスペクトルーピリジニウムクラスターイオン内の反応を中心にして－（電通大）○米田道明・谷崎　顕・辻本和雄・大橋　守
1-P-23　EI条件下における2,5－ジアリール－1,5－ヘキサジエン類のラジカルカチオンCope転位（東北大教養・東北大理*）○池田　浩・高崎俊彦*・高橋康丈*・宮仕　勉*
1-P-24　複数のゲルマニウム原子を分子内に有する化合物のマススペクトルパターンの解析（浅井ゲルマニウム研・東薬大*・デュプロ**）柿本紀博・○佐藤克行・赤尾寛子・秋葉光雄・志田保夫*・矢羽田強**
1-P-25　二価正イオンの構造とフラグメンテーション(VI)。ジヒドロキシベンゼン類（愛知教育大）守田純代・○小西英之・中田尚男
1-P-26　ピリジノベンゾアントロン類および関連化合物のEIMSにおけるイオン化と初期開裂反応の機構（東邦大理・明星大理工*・都衛研**）○ゼベルアブリズ・青木淳治・竹川　実・岩島　聰*・上田豊甫*・観　照雄**
1-P-27　アセチルアセトン金属錯体の単核及び多核イオンの構造と開裂機構（愛知教育大）○南野　智・小西英之・尾嶋平次郎・倉知康史・呉　智仁
1-P-28　シクログリシルグリシンのフラグメンテーション機構についてのMO計算（5）（奈良女大理・阪市大理*）○竹内孝江・樋口紀子・飯田桂子・山本正夫・松下叔夫*・西本吉助*
1-P-29　シラシクロアルカン類のフラグメンテーション（1）シラシクロヘキサンのEIマススペクトル（奈良女大理）○米崎直美・竹内孝江・山本正夫
1-P-30　有機フッ素化合物のフラグメンテーション（II）トリフルオロメトキシベンゼンとα，α，α－トリフルオロクレゾール（群馬高専・日本油脂筑波研*）田島　進・飯塚政樹*・飛田成史・○三谷元宏*・沢田英夫*・松本竹男*
1-P-31　有機ケイ素化合物のメタステーブル分解（VIII）テトラプロポキシシランとテトライソプロポキシシラン（群馬高専・信越化学リサーチセンター*）飛田成史・渡木秀記*・田島　進・○田部井栄一*・岡田文夫*・森　滋*
1-P-32　多環芳香族炭化水素の1価および2価イオンのメタステーブル分解（群馬高専）○飛田成史・中沢光彦・中山貴弘・田島　進
1-P-33　クロロフルオロベンゼンのMPI-TOFマススペクトルとフラグメントイオン生成の特異性（日大工）○沼田靖・石井義人・鈴鹿　敢
1-P-34　高性能単収束質量分析計のイオン光学（阪大名誉教授）松田　久
1-P-35　Ray tracing法による減速レンズの設計II（日本電子・阪大教養*）○石原盛男・松尾武清*
1-P-36　FT-ICRにおける磁気容器トラップとダブルインパルス励起（電通大）○三浦健児・藤原　真・井上雅夫
1-P-37　磁場型質量分析計を用いたICP-MSの試作（第4報）－希土類の分析について－（国立環境研・日本電子*）○伊藤裕康・植弘宗嗣・森田昌敏・岩永光恭*・大塚紀一郎*
1-P-38　4セクタータンデム質量分析計によるプリカーサイオンスキャン（日本電子・JEOL USA*）○国広文夫・野嶋一哲・草井明彦・貫名義裕・B. D. Musselman*
1-P-39　4セクター・タンデム質量分析計におけるマルチプリカーサー自動捕捉システム（日本電子・阪大蛋白研*）○吉留浩三・高尾敏文*・堀　英明*・佐藤喜美雄・貫名義裕・下西康嗣*
1-P-40　バックドカラムSFC/API-MSシステムの開発と基礎条件の検討（名大工）○服部秀男・松本幸三・柘植　新
1-P-41　オートサンプラ/フローインジェクション/APCI-MSの開発（日立計測・日立那珂*）○谷川健一*・遠山和彦・加藤義昭*
1-P-42　二重水素転位イオンを指標イオンとする構造解析を志向したデータベース作成と利用上の問題点（大阪女大・阪府大農*）○山岡寛史・大平久美子・中山　充*
1-P-43　NIST-MSDBにおけるCAS化合物名の側鎖部分（その4）該当化合物高速抽出の試み（筑波研究学園専・DBS*・東京家政筑波短大**）○仲久保正人・和知孝宣*・前田浩五郎**
1-P-44　レーザ・プローブFTMSによる表面分析（ニュリー・インスツルメンツ）中川秀樹
1-P-45　卓上型四重極質量分析計benchmark（ニュリー・インスツルメンツ）中川秀樹
1-P-46　質量分析によるプロセス・モニタリング（ニューリー・インスツルメンツ）中川秀樹
1-P-47　レーザー加熱法を用いた隕石の希ガス分析（岡山大地球研）長尾敬介
1-P-48　Li_2ZrO_3の蒸発挙動（京大原子エネルギー研）○加藤嘉成・浅野　満・原田敏夫・水谷保男

第2日（14日）

【シンポジウム】（9.00～10.20）
「イオンの生成と反応（イオン化）」

2-S-1　金属内包フラーレンの生成と質量分析（三重大工・名城大理工*）○篠原久典・佐藤博保・斉藤弥八・大河内正人*・安藤義則*
2-S-2　エレクトロスプレーによるイオンの抽出機構（山梨大工）○村田亘之介・久高一郎・藤巻　奨・平岡賢三
2-S-3　液体イオン化質量分析法におけるイオン化過程およびイオン反応（横浜国大工）○土屋正彦・手島志帆・横山幸男・金子竹男
2-S-4　電荷移動錯体のマススペクトロメトリー（電通大）○黒野　定・谷　　猛・辻本和雄・大橋　守

【シンポジウム】（10.30～12.10）
「イオンの生成と反応（放射光利用）」

2-S-5　光イオン化質量分析法の展開－放射光の利用を中心として－（姫工大理）小谷野猪之助
2-S-6　軌道放射光によるベンゼンとその異性体の2価イオンの生成と分解（群馬高専・CEA Saclay・オックスフォード大・パリ南大）○飛田成史・O. Braitbart・P. Rey・I. Nenner・J. H. D Eland・S. Leach

2-S-7　二原子分子のK殻励起による分解の異方性（電総研）○鈴木　功・齋藤則生

2-S-8　Ols内殻励起によるH_2O／Si（100）からのイオン脱離過程（東大理・東工大理*・高エ研**・姫工大理***・千葉大工****）池浦広美・関口哲弘*・○田中健一郎**・小尾欣一*・本間健二***・上野信雄****

【日本質量分析学会総会】（12.10～12.35）

【奨励賞受賞講演】（13.30～14.20）

MIKEスペクトル法および重水素標識法による有機化合物のメタステーブルイオンの分解機構の研究（群馬高専）飛田成史

衝突スペクトロスコピー法による電子移動およびイオン反応の研究（阪府大総科）早川滋雄

【特別講演】（14.30～15.30）

脳の神経活性物質探索のストラテジー（東大医）金澤一郎

【ポスター発表】（15.30～17.00）

2-P-1　Ne（K殻）およびXe（M殻）の多価イオン生成（電総研）○齋藤則生・鈴木　功

2-P-2　軟X線励起によるD_2Oの表面光化学反応の研究（東工大理・東大理*・高エ研**・姫工大理***）○関口哲弘・池浦広美*・小尾欣一・田中健一郎**・本間健二***

2-P-3　電子衝撃により生成した各種正イオンへのアルカリ金属からの2電子移動による負イオン生成（阪府大総科）○早川滋雄・門村和徳・半田美穂・杉浦俊男

2-P-4　高速有機化合物分子の表面電離（小山高専・国立環境研*）○岸　浩・藤井敏博*

2-P-5　メタンのマイクロ波放電プラズマ中のラジカルの同定（国立環境研）○藤井敏博・荘司健一

2-P-6　FT-ICRによるイオン－電子再結合の実験（電通大）○片倉久雄・山崎　尚・阿部誠一・井上雅夫

2-P-7　MEM（最大エントロピー法）によるFT-ICRスペクトルの解析（電通大）○内藤康秀・岩永敏秀・井上雅夫

2-P-8　分裂パターンから見た共有結合から金属結合クラスターの遷移（阪大教養・阪大理*）伊藤啓行・○交久瀬五雄*・松尾武清

2-P-9　質量域300,000の水銀・セシウムクラスターの質量スペクトルースーパーシェル構造の研究－（阪大教養・阪大理*）○伊藤啓行・交久瀬五雄*・桜井　達・松尾武清・松田　久

2-P-10　染織品文化財に使用された天然色素のサーモスプレーLC／MSによる分析（京都工繊大・島津分析センター*）○柴山伸子・山岡亮平・佐藤昌憲・大西正三*

2-P-11　カーボン・フラーレンのLC／MS分析（阪大教養・三重大工*・日本電子**）○松尾武清・伊藤啓行・篠原久典*・斎藤弥八*・松浦健二**・野嶋一哲**

2-P-12　光学異性体のLC／APCIマススペクトル（京薬大・田辺製薬*）○橋本圭二・隅田芳男・寺田俊二・岡村公夫*

2-P-13　ポストカラムアデションによるLC／APCI-MSの高感度測定（日立計測・日立那珂*）○遠山和彦・加藤義昭*

2-P-14　放電型イオン化によるFRIT-CI LC／MS分析の評価（日本電子）○高橋　豊・松浦健二・野嶋一哲

2-P-15　カラムスイッチングシステムを接続したFRIT-FAB LC／MSによる微量分析（日本電子）○松浦健二・高橋　豊・野嶋一哲・板垣又丞

2-P-16　LC／MS法によるゴルフ場使用農薬の測定（ジャスコインタナショナル・成蹊大工*）○柴田明宏・河内早苗・代島茂樹*・飯田芳男*

2-P-17　Mass Peak Profile法を用いたHRGC／HRMSによるダイオキシン分析（島津テクノリサーチ・KRATOS ANALYTICAL*・島津製作所**）○高菅卓三・Philip Ireland*・久保はるみ**・竹田武弘**

2-P-18　イオントラップ型質量分析計ITS40による飲料水中の低沸点有機化合物分析（フィニガンマット）○徐　紅・妻師　智・Wayne V. Rimkus

2-P-19　液体イオン化質量分析法による環境中有機スズ化合物の分析（横浜国大工）○小林利武・永原英知・金子竹男・横山幸男・小林憲正・土屋正彦

2-P-20　液体イオン化質量分析法による模擬原始大気実験生成物の分析（第4報）アミノ酸分析法の検討（横浜国大工）○小原雅典・小林憲正・小林利武・金子竹男・土屋正彦

2-P-21　液体イオン化質量分析法によるオリゴペプチドの分析－マトリックスの検討－（横浜国大工）○橋本雅樹・横山幸男・土屋正彦

2-P-22　各種高分子関連物質のFD-MSスペクトル（アイ・シー・アイ・ジャパン・ICI WMRC*）○原　律子・K. Rollins*・J. H. Scrivens*・M. J. Taylor*

2-P-23　GC-MS-SIMによる生体試料中コリンの定量分析（名城大薬）吉住秀夫・○米田智子・立松　晃

2-P-24　GC-MSによるクロクサアリの化学情報伝達物質の解明（京都工繊大）○秋野順治・山岡亮平

2-P-25　LC／MSによる血清有機成分の同位体希釈分析（化技研）高津章子

2-P-26　LC／MSによる酸素加水分解魚油の組成解明（日東技術情報センター・日東電工機能研*・旭電化食油研**）○堀　正典・佐橋裕子*・小池誠治**

2-P-27　LC-TSP-MSによるヒドロキシ又はヒドロペルオキシ不飽和脂肪酸アセチル誘導体の全分析（東医大生化学・東邦大医*）○山根基輝・阿部晃久・山根小夜子*・石川文雄*

2-P-28　LC／MSによる血中メラトニンの定量（東医歯大）笠間健嗣

2-P-29　TSP-LC／MSを用いた新規合成ステロイド（TS-410）の代謝物分析（大正製薬総研）○松岡陽子・小勝　順・長部　亘・荻野敦子・福島清美・諏訪俊男

2-P-30　LC／APCI-MSを用いた房水中のピロカルピンの定量（参天製薬中研）○岑浦憲司・桑野光明・高階秀男

2-P-31　新規脳血管障害性精神症状改善剤，塩酸イソデロキナゾン分解物のLC／MS（山之内製薬）○西川寿昭・清水稔・鈴木正純・鹿庭秀悦

2-P-32　新規ベンゾチアゾール系抗リウマチ薬の代謝物のLC／APCI-MSによる同定（鐘紡薬品開発研）○石井俊朗・能海和宣・浜田　司・栗田則男

2-P-33　ペルフェナジンによるアミトリプチリンの代謝抑制（日立計測・日立那珂*）○高橋利明・板東智美・加藤睦子*

千田直人・雫石賢一・加藤義昭*

2-P-34　血清アミロイドA蛋白酵素消化物のLC／MSによる分析（東大医・東医歯大*・浜松医大**）○高橋利枝・笠間健嗣*・馬場　聡**

2-P-35　LC／MSを用いたペプチドマッピング法による正常，異常ヘモグロビンの解析（日立中研）○坂入　実・高田安章・神原秀記

2-P-36　Sequencing of Synthetic Peptides using FAB／MS and CAPS（化技研・三菱油化筑波総研*）○J. Tuominen・丹羽吉夫・小山敏夫*・小澤雅富*・酒井稔夫*

2-P-37　Sequential Analysis of Peptides over 4 kDa by Tandem Mass Spectrometry（サントリー生物研）Ron Orlando

2-P-38　微量誘導体化反応とタンデム質量分析法を用いた脂肪族不飽和アルコール類の二重結合位置決定法（三共分析代謝研）○中村健道・高澤智子・大木康子・名垣秀実・大下　武

2-P-39　フォルボールエステル立体異性体のFABMSによる識別（名城大薬・京大農*）○武田直仁・立松　晃・大東肇*・小清水弘一*

2-P-40　FAB-MSによるフェノール酸－オリゴ糖複合体の構造解析（森林総研）石井　忠

2-P-41　フラノステロール配糖体のLSIMS（塩野義）○池西裕二・吉松信也・中川有造

2-P-42　FAB／MSによるジシアロガングリオシドの糖鎖構造解析（東京都臨床医学総研）○鈴木　實・中村京子・橋本康弘・鈴木明身

【懇親会】（18.00～20.30）

第3日（15日）

【シンポジウム】（9.00～11.45）

「バイオサイエンスにおける質量分析」

3-S-1　GTP結合蛋白質の脂質修飾－その構造と機能－（神戸大医）高井義美

3-S-2　Tandem Mass Spectrometric Analysis of Peptides at the Femtomole Level（サントリー生物研）Ron Orlando

3-S-3　改変型tPA，YM-22866の質量分析による構造決定（山之内製薬）○清水　稔・西川寿昭・峯岸弘子・森永哲夫・鹿庭秀悦

3-S-4　FABマススペクトルによる合成エンドセリンアナログ異性体のジスルフィド結合位置の決定（武田薬品筑波研）○石橋祥弘・菊池　崇・脇舛光廣・水田栄治・藤野政彦

3-S-5　救急患者の呼気成分モニターによる手術制御（浜松医大医）○三条芳光・森田耕司

【シンポジウム】（13.00～15.10）

「バイオサイエンスにおける質量分析」

3-S-6　医薬品開発におけるLC／MSの役割（エーザイ筑波研）浅川直樹

3-S-7　FAB-MSによる糖タンパク質糖鎖の高感度解析（東理大薬・ミシガン大*）○池北雅彦・吉岡美典・柴辻正喜・木付和幸・（故）守屋　寛・Charles C. Sweeley*

3-S-8　糖鎖とタンパクの相互作用に対するESIからのアプローチ（理研フロティンア・フィニガンマット*）○大橋陽子・金井みち子*・平林義雄・永井克孝

3-S-9　（生体関連化合物の微量分析へのLC／MSの適用（名城大薬）○鈴木眞言・原田健一

【ワークショップ】

下記のテーマのワークショップを予定しています。

①エレクトロスプレー（世話人：平岡賢三）

②イオンの電子状態とフラグメンテーション（世話人：鳴原淳）

③コンピューターの利用とスペクトルデータベース（世話人：前田浩五郎）

④タンデムマススペクトロメトリー（世話人：笠間健嗣）

懇　親　会　5月14日（木），会費　5,000円

参加登録費　主催・共催・協賛学協会員　5,000円，学生　3,000円，非会員　6,000円（要旨集代を含む）。

連 絡 先　〒305 茨城県つくば市東1-1
化学技術研究所基礎部　丹羽吉夫
電話：0298－54－4526
FAX：0298－54－4487

2 15-314

日本地球化学会ニュース

No. 130
1992. Ⅶ. 20

1992年度日本地球化学会年会

主　催　日本地球化学会　　共　催　日本化学会

日　　時：10月１日（木）～３日（土）
会　　場：東京農工大学農学部（東京都府中市幸町3-5-8）
会場への交通：本紙２ページをご覧下さい。
プログラム：本紙３－11ページ，時間割が28ページにあります。
参　加　費：会員　1,000円，非会員　2,000円，学生　無料
講演要旨集代：一冊　4,000円
申し込み〆切：発表申込は〆切ました。
　参加，懇親会，小集会の申込は，９月12日（土）までに，参加申込用紙（本ニュース129号で配付）を，年会準備委員会まで郵送のこと。
送金要領：９月12日（土）までに，郵便振替でご送金下さい。
　郵便振替　東京 3-605798　日本地球化学会年会準備委員会
懇　親　会：10月２日（金）18時より
　東京農工大学生協食堂にて
　会費　一般　5,000円　　学生　3,000円
問い合わせ先：〒183　東京都府中市幸町3-5-8
　東京農工大学農学部内
　1992年度日本地球化学会年会準備委員会
　安部喜也　tel.　0423-64-3311（内線466）
　小倉紀雄　tel.　0423-34-6906（直通）
　　fax.　0423-60-8264

4.8.4

科研費細目に「地球化学」が新設されます

科学研究費（科研費）の分科細目の大幅な見直しの結果，分科「地球科学」が新設され，その中に細目「地球化学」が誕生します。これは，この秋の応募から適用されます。当学会の対応の経緯は評議員会議事録をご覧下さい。関連して脇田会長から会員の皆様に対し，今後の地球化学の発展を期する一文が寄稿されました（15ページ）。

▶編 集 よ り◀

ニュースへ情報・原稿をお寄せ下さい！

本号から編集担当を引き継ぎました。最初ということもあって準備不足で，これはという記事をのせることができませんでした。次号からは役に立つ情報，読んでためになる記事を掲載しようと思っています。

会員と学会をつなぐ重要な糸となるべき地球化学会ニュースです。皆様の情報・原稿をお待ちしています。関連の研究集会やシンポジウムの案内を，会員に届けることができます。学会への苦言でも結構，海外の学会の情報，めずらしい体験やフィールド調査の話ならなお結構です。人材の募集，新刊書の紹介，研究機関の紹介といった現実的に役に立つ情報もどんどん掲載したいと思っています。

堅い話でも柔らかい話でも，形式自由。奮ってお寄せ下さい。

（編集担当　野尻幸宏）

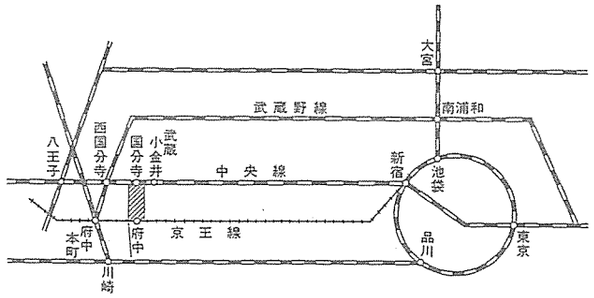
勤務先等の変更はすみやかにご連絡下さい！

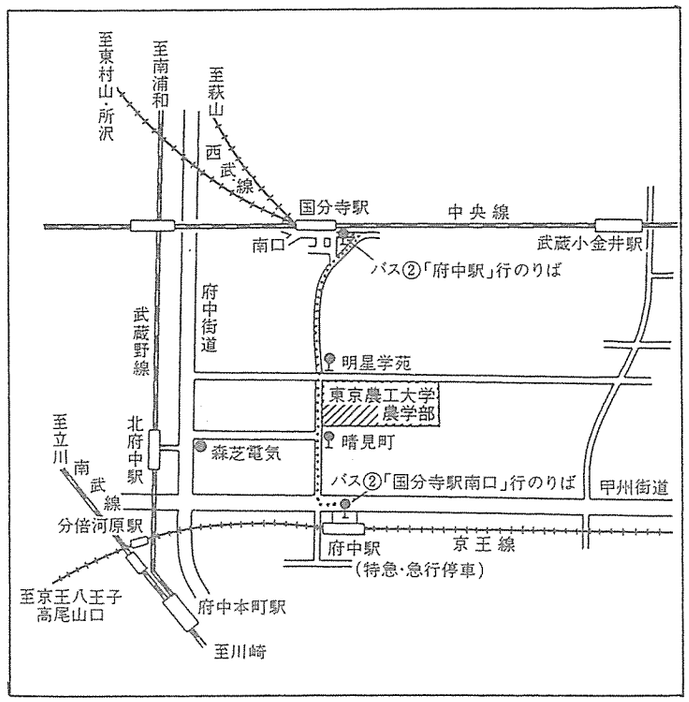
勤務先の変更。自宅住所の変更など名簿記載事項に変更が生じた会員は，忘れずに下記の事務局へご連絡下さい。学生の会員が就職した場合もご連絡下さい。

なお，変更届用紙は会員名簿に挟み込まれています。

編集者　野尻幸宏　　〒305 つくば市小野川16-2　国立環境研究所，地球環境研究グループ
　電話　0298－51－6111，ファックス　0298－51－4732
発行者　日本地球化学会　〒113 文京区本駒込５－16－９　学会センター　C21
　日本学会事務センター内　電話　03－5814－5801

東京農工大学農学部所在地





中 央 線　国分寺駅（新宿から約30分）
　　南口から府中駅行バス約10分　晴見町
京 王 線　府中駅（新宿から約30分）
　　北口から国分寺駅南行バス約５分　晴見町
　　北口から徒歩約20分，
武蔵野線　北府中駅から徒歩約15分

東京農工大学農学部
〒183　東京都府中市幸町３－５－８
tel.　0423－64－3311(代)

1992年度日本地球化学会年会
プログラム

第1日（10月１日）
A会場
一般講演［陸水］
（9：30～10：45）座長：今橋正征
1A09-3　日本の広域変性帯の河川水質－酸性化予測のために－（国立環境研）○田中敦・多田満・河合崇欣
1A09-4　富山県砺波平野地下水中の溶存炭酸の起源（富山大理）○水谷義彦・山本晃一
1A10-1　霞ケ浦湖水のメタン濃度とメタン生成・放出量について（国立環境研・東水大）○野尻幸宏・中村岳史・大槻晃
1A10-2　湛水土壌中におけるメタン生成経路と水素同位体比（京大生態研セ）○杉本敦子・和田英太郎
1A10-3　植物プランクトンの増殖と微量金属元素の濃度分布（近畿大理工）○小池祐一・中口譲・青野辰雄・北村将・平木敬三
（10：45～12：00）座長：野尻幸宏
1A10-4　天然水中の溶存高分子錯体の研究（名大工）○伊藤彰英・猿渡英之・原口紘炁
1A11-1　地下水，河川水など陸水中の溶存有機化合物と発蛍光性物質について（Ⅱ）（近畿大理工・近畿大環境研）○平山宏・青野辰雄・小池祐一・中口譲・村上和広・平木敬三
1A11-2　Tangential Flow 限外濾過法による水中高分子量有機物の濃縮・分離（信州大理・都立大理）○福島和夫・寺口智美・鵜崎実
1A11-3　降水と地下水中のフッ化物イオン濃度（農工大農）○高春心・小倉紀雄
1A11-4　印旛沼およびその周辺の湧水の臭素含量およびBr/Cl比（東邦大理）○今橋正征・高松信樹・上村京子
一般講演［堆積物］
（13：00～15：00）座長：大隅多加志
1A13-1　霞ケ浦底質中のカロチノイド鉛直分布（国立環境研）○相馬悠子・田中敦
1A13-2　湖沼堆積有機物の環境指標性Ⅱ田沢湖柱状試料の脂質成分（都立大理・信州大理・国立環境研）○上村仁・福島和夫・河合崇欣・野尻幸宏・石渡良志
1A13-3　放射性核種による琵琶湖表層堆積物の堆積機構の解析（名大年代セ・愛知医科大核医学セ・京大理）○中村俊夫・小島貞男・池田晃子・志岐常正
1A13-4　背面トンネル重金属堆積物の性状と間隙水組成（函館高専）○水上正勝・加藤晃一・大森幸子
1A14-1　茨城地域における堆積物中の主成分と堆積環境（地調）狛武
1A14-2　希土類元素化合物・錯体の熱力学的性質とテトラド効果（愛媛大理）川辺岩夫
1A14-3　続成過程における海水硫酸の無機的還元機構について（名大理・カナダ Calgary Univ.）○清棲保弘・H. R. Krouse
1A14-4　日本およびハワイの風成塵堆積物の Sr-Nd 同位体組成（農林水産省構造改善局・九大理・岩手大農）○窪田正和・柳哮・下山正一・溝田智俊
（15：00～16：45）座長：川辺岩夫
1A15-1　グリーンランド，イスア地方の先カンブリア紀堆積岩の化学組成（都立大理・国立環境研・静岡大理・東大教養）内野智功・○海老原充・日高洋・中原弘道・古田直紀・大浦坂勝利・増田俊明・丸山茂徳
1A15-2　四万十帯の頁岩中に産する泥灰岩の化学組成と同位体組成（名大教養・名大理）○杉谷健一郎・杉崎隆一・足立守
1A15-3　酸素・水素同位体比からみた地すべり面に含まれるスメクタイトの生成環境について（秋田大鉱山）○川原谷浩・松葉谷治
1A15-4　炭酸塩岩の生成過程におけるフッ素の挙動（群馬大工）○相沢省一・赤岩英夫
1A16-1　現世炭酸塩堆積物の年代測定について－アミノ酸年代法の検討－（名大水圏研）○原田尚美・半田暢彦
1A16-2　愛知・静岡県下秩父帯炭酸塩岩中の微量成分（地調）岡井貴司
1A16-3　多量の CO_2 を溶解させた海水中での炭酸塩堆積物の溶解実験（電力中研）大隅多加志

B会場
課題講演［東京湾およびその集水域内の物質循環］
コンビーナー：安部喜也・小倉紀雄
（9：30～10：50）座長：福島和夫
1B09-1　多摩川流域の大気，土壌，淡水における Cl と Br の行動（東工大総合理工）鶴見実
1B09-2　都市域における大気降下物中の多環芳香族炭化水素類（桐蔭横浜大工・農工大農）○森永茂生・小林隆男・紅野美保・高田秀重・原田守・小倉紀雄
1B10-1　野川流域における路面堆積物中の重金属とそ

れらの河川に及ぼす影響（農工大農）○欧陽通・岡崎正規・小倉紀雄

1 B10-2　河口域混合パターンから見積もった微量金属の東京湾への河川フラックス（東水大・Skidaway Institute of Oceanography）○前田勝・H. L. Windom・鎌谷明善

（10：50～12：10）座長：安部喜也

1 B10-3　東京湾海水中の溶存有機物の化学的特徴（農工大農）○小川浩史・小倉紀雄

1 B11-1　陸起源有機化合物の東京湾への流入・堆積と湾外への排出（農工大農・東大海洋研・愛媛大工）○高田秀重・才野敏郎・柳哲雄

1 B11-2　東京湾海水中のメタン濃度とその変動（東水大・国立環境研）○中村岳史・野尻幸宏・橋本伸哉・大槻晃

1 B11-3　東京湾域における海水中の地球温暖化物質（一酸化二窒素）の鉛直分布について（東水大・国立環境研）○橋本伸哉・梶川信夫・大槻晃・野尻幸宏

課題講演［地球環境の変動と地球化学］

コンビーナー：角皆静男・松本英二・半田暢彦

（13：00～15：30）座長：松本英二

1 B13-1　太平洋における大気・表面海水間の CO_2 交換について（気象研）○井上久幸・石井雅男・松枝秀和

1 B13-2　熱帯雨林生産－大気 CO_2 の濃度と $\delta^{13}C$ の関連性（II）（名大水圏研・東大生産研）○加藤喜久雄・本多嘉明・村井俊治

1 B14-1　海洋表面水の二酸化炭素分圧の高密度連続観測（海洋化学研・国立環境研）○紀本岳志・原島省

1 B14-2　富山における大気降下物中硫酸塩のイオウ・酸素同位体比（富山大理）○佐竹洋・山根隆章・市川哲也

1 B14-3　クウェート油井火災によるペルシャ湾の大気汚染の実態調査（慶応大理工・気象大・国立環境研）○田中茂・益子治・渡辺和章・柳沢健司・橋本芳一・土器屋由紀子・向井人史

1 B15-1　海洋における二酸化炭素問題（北大水産）角皆静男・渡辺修一・川端一史・○小埜恒夫・中村純也

（15：30～17：30）座長：井上久幸

1 B15-2　熱帯太平洋域における植物色素の分布と変動（名大水圏研）鈴木光次・○半田暢彦・早川和秀

1 B15-3　太平洋深層水の循環速度の変化（名大水圏研・東大海洋研）○松本英二・岩倉央和・中村俊夫・平朝彦・村山雅史

1 B16-1　海底熱水系と海洋組成（慶応大理工）鹿園直健

1 B16-2　青森県大沼の湖沼堆積に記録された環境変動について（弘前大理・東北大理）○中谷周・箕浦幸治・内田昌男

1 B16-3　新生代海洋マンガン酸化物の時空分布とその地球化学的意義（筑波大地球科学・地調）○伊藤孝・中野孝教・白井朗・梶原良道

1 B17-1　中部中新統以降日本海に好気的底層水が発達した：ODP Legs 127/128堆積物コアのMn, REE地球化学から（東大理・地調）○松本良・薬袋佳孝・渡部芳夫

C会場

一般講演［有機物］

（9：30～10：30）座長：石渡良志

1 C09-3　レジナイトのコハク化に伴う有機成分の変化（九大理）村江達士・○下川修司・相原安津夫

1 C09-4　下部二畳系高有機質石灰岩（岐阜県船伏山）の有機成分（九大理）村江達士・○田内信也・相原安津夫・佐野弘好

1 C10-1　石灰化材の地質的変化と有機成分の比較（九大理）村江達士・○倉橋稔幸・相原安津夫

1 C10-2　変成岩中の炭質物のラマンスペクトル（静岡大理・筑波大物質・理研）○上村奈央・和田秀樹・鍵裕之・高橋和也

一般講演［土壌・生物］

（10：30～12：00）座長：狛　武

1 C10-3　琵琶湖周辺の花コウ岩質土および岩石の地域差について（京都科捜研）平岡義博

1 C10-4　比叡山および比良山周辺の花コウ岩質岩石の地域差について（京都科捜研）平岡義博

1 C11-1　土壌に吸着された硫酸イオンの硫黄同位体比（岩手大農・茨城大教育）○溝田智俊・佐藤隆之・佐々木昭

1 C11-2　合成アロフェンへの亜鉛イオンの吸着に対する重炭酸イオンの効果（東工大総合理工）○宮崎あかね・鶴見実・秋鹿研一・小林孝彰

1 C11-3　ヨウ素の土壌への蓄積（放医研）村松康行・吉田聡

1 C11-4　キノコ（担子菌類）への放射性セシウムの蓄積（放医研）○吉田聡・村松康行

一般講演［地球外物質］

（13：00～14：15）座長：海老原充

1 C13-1　SIMSによるMg同位体線分析の試み（阪大教養）○植田千秋・土山明

1 C13-2　平衡普通コンドライト隕石金属相中の窒素同位体比異常（東大理）○橋爪光・杉浦直治

1 C13-3　コンドライト隕石中の窒素とアルゴンについて（東大理）○清田馨・杉浦直治・橋爪光

1 C13-4　^{40}Ar-^{39}Ar 年代と希ガスからみた衝撃による隕石からの脱ガス（東大地震研）兼岡一郎

1 C14-1　月隕石 Asuka-31の^{81}Kr 落下年代（岡山大地球研・東大理）○長尾敬介・三浦弥生

（14：15～15：30）座長：長尾敬介

1 C14-2　衝突における希ガスと水の脱ガス（東大理）○吾妻瞬一・比屋根肇

1 C14-3　Muong-Nong Type テクタイト中の希ガス（阪大理・ウィーン大）○松原佳代・松田准一・C. Koeberl

1 C14-4　インプランテーションによる希ガスの取り込み実験（山形大理）福永一哉

1 C15-1　金属鉄－水蒸気反応によるマグネタイトの合成と希ガスの取り込み機構(2)（神戸大理・阪大教養・阪大理）○松本拓也・丸尾和幸・土山明・松田准一

1 C15-2　高圧下における金属鉄・シリケイト間の希ガス分配（神戸大理・阪大教養・阪大理）○周藤正史・大高理・松田准一・小嶋稔

（15：30～17：00）座長：杉浦直治

1 C15-3　酸分解残渣からみた鉄隕石の進化過程（地調）平田岳史

1 C15-4　南極やまと月隕石の化学(2)（学習院大理）福岡孝昭

1 C16-1　非平衡オーディナリ・コンドライト中の銅・亜鉛・インジウム（都立大理）○海老原充・尾崎大真・深津聡

1 C16-2　コンドライト隕石中の難揮発性親鉄元素（都立大理）○尾崎大真・海老原充・中原弘道

1 C16-3　アエンデ ferromagnesian コンドリュール中の Pt-group metal ナゲット（極地研・京大理）○三澤啓司・藤田隆・北村雅夫

1 C16-4　希土類元素存在度がCMコンドリュール生成過程に与える制約（神戸大自然科学・神戸大理）○井上睦夫・中村昇

D会場

一般講演［鉱床］

（9：30～10：45）座長：日高洋

1 D09-3　金属鉱床中の流体含有物の組成：主に CO_2 と CH_4 について（名大理・常葉学園浜松大）○飯田洋・杉崎隆一・長沢敬之助

1 D09-4　菱刈金鉱床の鉱脈形成過程における鉱化溶液の温度と同位体組成の変化（地調）○松久幸敬・青木正博

1 D10-1　白鉄鉱の黄鉄鉱への転移に関する実験的研究（岡山大地球研・広島大理）○木島宣明・渡辺洵

1 D10-2　硼素鉱物の生成と，それに伴う硼素同位体分別（上智大理工・東工大原子炉）○服部章子・大井隆夫・小坂知子・向田政男・野村雅夫・岡本真実

1 D10-3　モリブデナイトの Re-Os 年代；信頼度の高い分析法とその天然試料への応用結果（東大理・電通大自然科学・熊本大理）○鈴木勝彦・其魯・清水洋・増田彰正

（10：45～12：00）座長：松久幸敬

1 D10-4　Ba 同位体比異常からみたオクロ鉱床内での ^{135}Cs, ^{137}Cs の挙動（都立大理・フランス原子力庁・電通大自然科学）○日高洋・P. Holliger・増田彰正

1 D11-1　豪州クンガラウラン鉱床の地下水化学（I），－ウランの移行に関して－（原研・オーストラリア原子力科学技術機構）○柳瀬信之・T. Payne・関根敬一・小林義威

1 D11-2　豪州クンガラウラン鉱床の地下水化学（II），－ウラン系列核種の分布－（原研，オーストラリア原子力科学技術機構）○柳瀬信之・関根敬一・T. Payne・小林義威

［火山］

1 D11-3　ケイ酸塩溶融体－熱水流体間の HCl の分配（地調）篠原宏志

1 D11-4　火山ガスから推定する熱水の性質（草津白根山）（東工大草津白根火山観測所）○大場武・平林順一

（13：00～15：00）座長：平林順一

1 D13-1　FT 赤外分光放射計を用いた火山ガス遠隔観測の試み（東大理）○野津憲治・森俊哉・遠嶋康徳・五十嵐丈二・脇田宏

1 D13-2　FT 赤外分光放射計による火山ガス中の SO_2, HCl の遠隔測定（東大理）○森俊哉・野津憲治・遠嶋康徳・脇田宏

1 D13-3　低温噴気帯における火山ガスの測定（武蔵高日私研・少工校・桐朋女高）○高江洲盛・原久雄・椚野正

1 D13-4　日本の地熱系気体の窒素同位体比（秋田大鉱山・三菱マテリアル）○長谷川英尚・北逸郎・上田晃

1 D14-1　メタンの無機的酸化における炭素と水素の同位体分別（名大理）今泉茂己・○清棲保弘

1 D14-2　雲仙岳の火山活動と火山ガス組成（東工大草

津白根火山観測所・玉川大・岡山大地球研）
○平林順一・大場武・吉田稔・小坂丈予・日下部実

1 D14-3　雲仙火山ガスおよび温泉ガスの希ガス同位体分析（九大理・岡山大地球研）○徳永光美・高岡宣雄・長尾敬介

1 D14-4　MORB 中の窒素と希ガス測定－マントル中の N/Ar の推定－（東大理）○宮崎明子・比屋根肇・杉浦直治

（15：00～16：45）座長：野津憲治

1 D15-1　ガラス含有物の分析に基づく火山噴火時のイオウおよびハロゲン放出量の推定（岡山大地球研・信州大理・都立大理）○河野美香・日下部実・山口佳昭・町田洋

1 D15-2　雲仙火山地域のマグマ性気体の挙動と地熱系脱ガス現象（秋田大鉱山・岡山大地球研・福岡大理）○北逸郎・滝沢英夫・長尾敬介・田口幸洋

1 D15-3　火山岩からのリンとヒ素の揮発（東工大理）○榎康村・V.S.Mambo・吉田稔

1 D15-4　炭化水素による火山地域の地下構造の推定（名大理）○浅田憲子・清棲保弘

1 D16-1　アルカリ岩の Y の挙動（地調）富樫茂子

1 D16-2　角閃石の加熱実験－色・含水量・水素同位体比の変化－（東工大理・秋田大鉱山）○宮城磯治・松葉谷治・中嶋悟

1 D16-3　韓国ウツリョウ島火山岩類の Sr,Nd 同位体組成（東北大理・韓国動力資源研）○藤巻宏和・金允圭・青木謙一郎

第２日（10月２日）

A会場

一般講演［堆積物］

（９：00～10：30）座長：佐野有司

2 A09-1　原子炉中性子を用いた即発γ線分析による深海底堆積物中の微量元素の定量（東大理・原研東海・東大原総セ）○薬袋佳孝・米沢仲四郎・星三千男・伊藤泰男・富永健

2 A09-2　海底堆積物における金の地球化学的挙動（地調）○寺島滋・中尾征三・三田直樹・西村昭

2 A09-3　鉄・マンガン水酸化物と NaCl 水溶液間の希土類元素の分配（愛媛大理）○川辺岩夫・石井尭・徳村牧・宮内一恵

2 A09-4　Cd/Ca比から明らかにされる西太平洋域第四紀後期の深層栄養塩量の変化（東大海洋研・地調）○大河内直彦・川幡穂高・岡田誠・村山雅史・平朝彦

2 A10-1　深海底における粘土鉱物の形成と主成分組成の変動（大阪市大理）益田晴恵

2 A10-2　海底堆積物中の火山灰層の続成変質作用に伴う Sr と H の同位体変動－ODP site 808（大阪市大理・地調・東大海洋研）○田中宏明・益田晴恵・川幡穂高・蒲生俊敬

（10：30～12：00）座長：薬袋佳孝

2 A10-3　海洋底におけるヘリウム同位体比の分布とシミュレーション（広島大理・東大理）○高畑直人・佐野有司・佐々木晶

2 A10-4　日本海の環境変化に伴う堆積有機物の変動Ⅰ．炭化水素（都立大理）○平川善行・石渡良志

2 A11-1　日本海の環境変化に伴う堆積有機物の変動Ⅱ．アルコール，ケトン（都立大理）○石渡良志・平川善行

2 A11-2　GC/炭素同位体分析法の地球化学への応用Ⅱ－東京湾堆積物中の *n*-アルカン－（都立大理）○山田桂太・鵜崎実・石渡良志

2 A11-3　沿岸堆積物中の有機態金属成分の溶出挙動（近畿大理工）中口譲・○梅内一芳・青野辰雄・小池祐一・村上和弘・平木敬三

2 A11-4　河口域における堆積物間隙水中の硫黄化合物（東大教養）○符岩・高野穆一郎・綿穢邦彦

B会場

課題講演［地球環境の変動と地球化学］

コンビーナー：角皆静男・松本英二・半田暢彦

（９:00～10：50）座長：加藤喜久雄

2 B09-1　対流圏オゾンとその変動（国立環境研）秋元肇

2 B09-2　北極域における大気中ブロモカーボン，クロロカーボン類の測定（国立環境研・カナダ Atmospheric Environment Service）○横内陽子・秋元肇・L.A.Barrie・J.W.Bottenheim

2 B09-3　大気メタンの発生源と吸収源（農環研）陽捷行

2 B10-1　安定同位体比の変動から見た各種陸域水界におけるガス代謝（京大生態研セ）和田英太郎

（10：50～12：10）座長：和田英太郎

2 B10-2　都市大気中の炭酸ガス及びメタンの連続モニタリング（名大工・岐阜大工）○藍川昌秀・青塚冬樹・芳川一宏・竹内豊英・原口紘炁

2 B11-1　中国，タクラマカン砂漠域の河川水および降水試料の地球化学的研究（理研・東大・電通大・新疆生物土壌沙漠研）○張勁・矢吹貞代・高橋和也・増田彰正・牛木久雄・黄子蔚・熊建民

2 B11-2　中国，新疆砂漠域におけるストロンチウム同位体組成について（理研・東大・新疆生物土壌砂漠研）○矢吹貞代・岡田昭彦・劉叢強・張勁・樊自立・田長彦・常青

2 B11-3　土壌－植物－大気連続系におけるトレーサーとしての Sr 同位体（筑波大地球科学）○中野孝教・田中正・辻村真貴・松谷順

C会場

一般講演［有機物］

（9:00～10：30）座長：片瀬隆雄

2 C09-1　南極の湖沼に分布するシアノバクテリアルマット中の炭化水素（大妻女大環境・島根大教育・湘南工大化学）○松本源喜・大谷修司・廣田幸逸

2 C09-2　汽水湖（中海）極表層堆積物有機物の溶存酸素による分解実験（その１）－分解速度（島根大理・名大水圏研）○三瓶良和・鈴木徳行・松本英二

2 C09-3　酸性湖（田沢湖）堆積物中の長鎖炭化水素類の炭素安定同位体比（都立大理）○鵜崎実・福島和夫・上村仁・山田佳太・石渡良志

2 C09-4　化学分解/GC-MS法による堆積物中の陸起源有機物の解析Ⅰ．河川堆積物（創価大教育・都立大理・長崎大教育）○山本修一・谷本和彦・石渡良志・上村仁・近藤寛

2 C10-1　東京湾表層堆積物中のアミノ酸と核酸塩基（筑波大化学・都立大理）○平野聡伺・下山晃・矢田隆・石渡良志

2 C10-2　沿岸堆積物中の脂質成分の分布について（5）中城湾の炭酸塩堆積物（長崎大教育・都立大理・創価大教育）○近藤寛・石渡良志・山本修一

（10：30～12：00）座長：松本源喜

2 C10-3　メチル芳香族化合物の異性化と有機続成変化への応用（筑波大化学）○中野善信・下山晃・野本信也

2 C10-4　堆積物中のクロロフィル類とその分解生成物について（地調）○寺島美南子・井内美郎

2 C11-1　フィンランドの泥炭土壌のフェノール成分（日大農獣医）○片瀬隆雄・直井美穂

2 C11-2　圧密熱分解による石油生成実験－熟成の進行に伴う生成物組成変化－（石油資源技研・石油公団技術セ）○武田信従・鈴木優・町原勉

2 C11-3　日本天然ガス中のネオペンタンについて（地調）猪狩俊一郎

2 C11-4　堆積物有機物のコーキングとそのカイネティクス（島根大理）○鈴木徳行・島田昌英・三瓶良和

D会場

一般講演［陸水］

（９：00～10：30）座長：松葉谷治

2 D09-1　山地小流域における渇水期の渓流水の化学的性質（九大教養・九大農）○吉村和久・井倉洋二

2 D09-2　地下水の水質形成に関するモデリング（動燃，現コンピュータソフト開発）○油井三和・瀬尾俊弘・梅木博之・根山敦

2 D09-3　神奈川県の地下水の主要化学成分の分布（神奈川県温地研）○石坂信之・粟屋徹

2 D09-4　草津白根山地域陸水中のハロゲン化物イオン（上智大理工・玉川大農）○山野眞由美・大井隆夫・向田政男・小坂知子・小坂丈予

2 D10-1　ウラン同位体法を用いた河川水・地下水の循環（青学大理工・原研・横河電機・東芝）○矢坂毅・栗林藤子・宮本由美・斉藤裕子・木村幹

2 D10-2　同位体を用いた火山体の地下水流動系の研究：Ⅰ．八ツ岳の湧水（学習院大理・地調・筑波大地球科学）○垣内正久・風早康平・安原正也・丸井敦尚・鈴木裕一

一般講演［温泉］

（10：30～12：00）座長：水谷義彦

2 D10-3　秋田県玉川温泉の溶存成分の経年変化（東邦大理）○吉池雄蔵・岡村忍

2 D10-4　玉川温泉の最近の泉質変動について（秋田県衛科研・秋田大鉱山）○武藤倫子・松葉谷治

2 D11-1　中性及び酸性泉中の希土類元素パターンの比較（上智大理工・武蔵工大原研）○荻原康司・木川田喜一・小坂知子・大井隆夫・向田政男・本多照幸

2 D11-2　有馬を中心とした温泉水中の水銀（青学大理工）○金子健司・斉藤裕子・木村幹

2 D11-3　地熱地帯地表付近での気体水銀の挙動（地調・NIC）○野田徹郎・谷田幸次・内海衛・高橋正明

2 D11-4　南石の合成（岡山大理）○小谷裕司・山本雅弘

P会場

ポスターセッション

（13：00～15：00）

2 P01　バイオマス燃焼実験で発生する CH_4，CO の炭素安定同位体比（国立環境研・富山大理・広島大理・資環研）○曽毅強・向井人史・坂東博・野尻幸宏・吉田尚弘・佐野有司・守富

寛・鈴木善三

2 P02 湿原ガスのガス組成－特に N_2/Ar 比から示される窒素固定の可能性について（農環研・名大）○楊宗興・寺井久慈・坂本充・竹内誠

2 P03 山形市の降雨・降雪の化学的特徴（山形大理・大手開発・新庄農高・酒田商高・大船渡高）柳沢文孝・○松浦隆一・渡辺智・菅原吉利・菅沢宏昭・千葉弘一

2 P04 東北南部地域の降雨・降雪の化学的特徴（山形大理・三菱マテリアル・大手開発・新庄農高・酒田商高・大船渡高）○柳沢文孝・松浦隆一・上田晃・渡辺智・菅原吉利・菅沢宏昭・千葉弘一・大日方裕

2 P05 半導体レーザーによる大気二酸化炭素濃度の連続測定（東京ガスIT研・慶応大理工）○鳥海良一・田井秀男・上原喜代治

2 P06 日本海岸における陸源エアロゾルの除去効率の測定（山形大理）鈴木利孝

2 P07 二酸化炭素循環に果たす炭酸塩岩の化学風化の役割（九大教養）吉村和久

2 P08 メタン水和物の生成および分解の温度・圧力条件（地調）○伊藤司郎・坂田将・猪狩俊一郎

2 P09 食物連鎖からみた潮間帯生物中の有機スズ濃度（国立環境研・東大農）○白石寛明・堀口敏宏・相馬悠子

2 P10 琉球石灰岩地域地下水中のラドン濃度について（琉球大理）○武村盛久・棚原朗・平良初男

2 P11 日本海産マンガンクラストの化学組成と^{10}Be濃度（北里大衛生・都立大理・東大核研・東大原総セ）○小林貴之・海老原充・今村峯雄・小林紘一

2 P12 日本海溝における沈降粒子化学組成の経年変化（国立環境研・東大海洋研）斉藤千鶴・○野尻幸宏・児玉幸雄・野崎義行

2 P13 サンゴ礁域における海水中の二酸化炭素濃度の測定（琉球大理）○藤村弘行・大森保・金原五月・平良初男

2 P14 希土類元素による海水中炭酸イオンの除去（農工大）○河野雄飛・鈴木良宏・清武俊博・赤木右

2 P15 黄海および東シナ海の海底堆積物の化学成分(1) 分別溶解法・ICP 発光分析法による11元素の定量（東大海洋研・気象大・気象庁）○児玉幸雄・新垣忠則・土器屋由紀子・大山準一・小川完・鷺猛

2 P16 黄海および東シナ海の海底堆積物の化学成分(2) (1)で得られた11元素の濃度に対する解析と研究（気象大）高橋邦明

2 P17 海底堆積物のX線光電子分光（国立環境研）○相馬光之・田中敦・瀬山春彦・斉藤千鶴・野尻幸宏

2 P18 湖底堆積物の^{14}Cによる年代測定に関わるリビッドの有効性（都立大・名大）○小椋和子・中村俊夫

2 P19 琉球列島産鍾乳石の成長速度について（琉球大理）○安里博子・棚原朗・平良初男

2 P20 中国タクラマカン砂漠における砂質試料の化学組成（第2報）（地調・中国科学院新疆生物土壌砂漠研）○金井豊・寺島滋・石井武政・磯部一洋・水野清秀・宮田雄一郎・銭亦兵

2 P21 福島県東部における湧水中のU・Ra・Rnと花崗岩から溶出するUについて（地調）金井豊

2 P22 EPMAによる西表島産鉄鉱石（すず石）の分析（八重山高・首里高・武蔵高日私研）○奥間朝春・東田盛善・上間均・高江洲登

2 P23 沖縄トラフ熱水域における1992年度潜水調査報告（東大海洋研・九大理・山形大理・東大理）蒲生俊敬・○千葉仁・中島和夫・石橋純一郎・角皆潤・酒井均

2 P24 沖縄トラフ海底熱水鉱床試料中における金属元素の不均一分布（琉球大理）○大森保・平良初男・棚原朗

2 P25 地熱熱水から生成したケイ酸質沈殿物中の金（九大教養）横山拓史

2 P26 熱水中での蛍石の溶解度（兵庫教育大地学・アイダホ大）○澁江靖弘・S. A. Wood

2 P27 群発地震に関連した竹富海底温泉調査（琉球大理・富山大理・東大海洋研・名大理）○小泉宝之・大森保・棚原朗・平良初男・熊本明・藤村行弘・武村盛久・永淵敬大・上江川朝秀・鈴木和輝・道祖啓介・松永義一・柳義之・木谷義彦・蒲生俊敬・清棲保弘

2 P28 Search for micro-diamonds in uranium-rich coals. 1. TEM study（阪大理・阪大教養・京大理・U. S. Geological Survey Denver）○望月圭子・小嶋稔・土山明・北村雅夫・下林典正・J. S. Leventhal

2 P29 GSJ岩石標準試料のREE, Sc, Y, Zr, Hfの分析データ編集（地調・JAROS）○伊藤司郎・今井登・寺島滋・上岡晃・三田直樹・安藤厚

2 P30 $MgSiO_3$-$(Co,Mg)SiO_3$の2層構造をもつ斜方輝石の合成（学習院大理・東大RIセ・東大理）○長沢宏・盛岡正名・永原裕子

2 P31 模擬彗星環境下での有機物生成の検証－予備実験－（横国大工・東大宇宙線研・東工大生命理工）○笠松隆志・小池惇平・斉藤進・金子竹男・土屋正彦・大島泰郎・小林憲正

2 P32 グロー放電質量分析法による鉄隕石中の多元素分析（北里大衛生・日大文理・丸文）○島村匡・本田雅健・永井尚生・高橋隆子

2 P33 鉱物への窒素のimplantation（東大理・原研高崎）○杉浦直治・二神常爾・座主繁男・永井士郎

2 P34 月隕石 Asuka-31(-881757)に関する化学的，年代学的研究（理研・電通大）○高橋和也・増田彰正

2 P35 通常型純正Ge検出器の低バックグランド型への改良（琉球大理）○棚原朗・平良初男

第3日目（10月3日）

A会場

一般講演［海洋］

（9：00～10：30）座長：藤原祺多夫

3 A09-1 浜名湖過去一万年における有機態炭素の変動（東海大海洋）○加藤義久・南秀樹

3 A09-2 Strontium isotope stratigraphy of Kita-daito-jima Atoll, Okinawa（琉球大・Univ. of Cambridge）○大出茂・H. Elderfield

3 A09-3 日高舟状海盆，北部日本海溝堆積物中の^{137}Cs及び$^{239+240}Pu$（原研・北大）○長尾誠也・神山秀雄・角皆静男

3 A09-4 東西太平洋における銅の鉛直分布（北大水産）○乗木新一郎・新子谷悦宏・皆川昌幸・角皆静男

3 A10-1 大陸棚域から外洋へのマンガンの輸送（北大水産）○皆川昌幸・乗木新一郎・角皆静男

3 A10-2 北太平洋における海水中のCe，Nd同位体比（熊本大理・東大理・東大海洋研・電通大）○清水洋・立川和代・野崎義行・増田彰正

（10：30～12：00）座長：加藤義久

3 A10-3 海溝域における粒状有機物の輸送の特徴について（名大水圏研）○杉本多津宏・半田暢彦

3 A10-4 植物プランクトンブルームにおける脂肪酸組成の変動（名大水圏研）○早川和秀・半田暢彦

3 A11-1 熱帯太平洋域における有機物の鉛直フラックス（名大水圏研）今泉茂巳・○中塚武・半田暢彦

3 A11-2 中部北太平洋における表層水中の溶存有機態窒素 NOPACCS'91（広島大総合・関総環境セ）○熊本雄一郎・藤原祺多夫・坪田博行・太田秀和

3 A11-3 白鳳丸KH90-2，3航海で観測された中部熱帯太平洋表面海水中のpCO_2（気象研）○石井雅男・井上久幸

3 A11-4 サンゴ礁における石灰化と二酸化炭素濃度－サンゴ飼育水槽実験について（琉球大理）○大森保・金原五月・藤村弘行・平良初男

（13：00～14：30）座長：大出　茂

3 A13-1 伊勢湾から大気へのメタンフラックス（名大水圏研）○伊原礼二・松本英二

3 A13-2 Nutrient Fluxes in Riverine Mangrove Forest（琉球大）○A. J. Mmochi・渡久山章

3 A13-3 有機塩素化合物による海洋汚染の最近の推移（愛媛大農）○立川涼・田辺信介

3 A13-4 水圏における光化学反応素過程の検討－瀬戸内海における硫化カルボニルの発生－（広島大総合）藤原祺多夫・○加島敏之

3 A14-1 閉鎖性海域(瀬戸内海)における海水中の有機ヒ素の濃度分布（慶応大理工）○田中茂・和田敏・佐藤憲行・橋本芳一

3 A14-2 水圏における光化学反応素過程の検討－瀬戸内海海水における過酸化水素の発生とその機構－（広島大総合）○藤原祺多夫・後田俊直

B会場

課題講演［炭素を中心とした宇宙・地球の化学ダイナミクス］

コンビーナー　田中　剛・赤木　右

（9：00～10：40）座長：小林憲正

3 B09-1 カルボナドの物性とその起源について（筑波大物質・理研・都立大理・電通大・熊本大理）○鍵裕之・高橋和也・日高洋・清水洋・増田彰正

3 B09-2 希土類元素存在度パターンからみたカルボナードの成因（地調）○上岡晃・柴田賢

3 B09-3 ダイヤモンドから見た地球内部の炭素循環（農工大工・電通大自然科学）○赤木右・増田彰正

3 B10-1 地球内部の炭化水素(1)：火成岩中の炭化水素と二酸化炭素（名大理・INAX・名大工）○杉崎隆一・荒木雅巳・永峰耕一郎

3 B10-2 地球内部の炭化水素(2)：マントル炭化水素

（名大理・名大水圏研）○三村耕一・杉崎隆一・半田暢彦

（10：40～12：00）座長：赤木　右

3 B10-3　陽子線照射による原始地球及び地球圏外環境下での生体有機化合物の生成．Ⅲ．種々の模擬惑星大気からのアミノ酸の生成（横国大工・東大宇宙線研・東工大生命理工）○小林憲正・笠松隆志・小原雅典・金子竹男・土屋正彦・斉藤威・小池惇平・大島泰郎

3 B11-1　われわれの銀河とマゼラン星雲の炭素質星間塵（電通大）○坂田朗・和田節子・成澤孝敏・小野洋

3 B11-2　炭素質コンドライト中の炭素質物質からみた宇宙における炭素の挙動（九大理）村江達士

3 B11-3　隕石中の高分子炭素質物質（東大理）○北島富美雄・増田彰正

一般講演［温泉］

（13：00～14：45）座長：未定

3 B13-1　群発地震に関連した竹富海底温泉の地球化学的研究（琉球大理・富山大理・東大海洋研）○大森保・棚原朗・小泉宝之・熊本明・平良初男・水谷義彦・蒲生俊敬

3 B13-2　奥道後自噴井における地下水湧出量・地下ガス組成の地震による変化（愛媛大理）○大和田淳子・川辺岩夫

3 B13-3　地震に関係した深井戸湧水量変化（名工大・川崎製鉄・名大理）○永峰康一郎・樽原淳一・滝清子・杉崎隆一

3 B13-4　地球潮汐による奥道後自噴井の地下水湧出量変化（愛媛大理）○大和田淳子・川辺岩夫

3 B14-1　秋田県玉川温泉のトリチウム濃度（岡山大理）○古川孝文・山本雅弘

3 B14-2　アフリカ・キブ湖溶存ガスのヘリウム同位体比（東大理・北大理）○前川竜男・中井俊一・脇田宏・中尾欣四郎

3 B14-3　伊豆下賀茂温泉水中の硼素同位体組成（上智大理工・東工大原子炉）○大井隆夫・小川順子・小坂知子・向田政男・野村雅夫・岡本真実

C会場

一般講演［大気］

（9：00～10：30）座長：田中　茂

3 C09-1　わが国における降水の化学組成（電力中研）○高橋章・藤田慎一

3 C09-2　西南北海道重工業地帯における降雨・雪中のタリウム存在度と起源（室蘭工大）○尹松・白幡浩志

3 C09-3　新潟市における環境トリチウムレベル（新潟県衛公研）○殿内重政・渡辺直子・諏訪成雄

3 C09-4　九州山岳地帯の樹氷に含まれる酸性物質の起源（福岡県保環研）○永淵修・下原孝章・須田隆一・石橋哲也・村上光一・田上四郎

3 C10-1　ゴミ埋立処分場から発生する CH_4，CO_2 の炭素安定同位体比（国立環境研・農工大工・福岡大）○向井人史・曽毅強・細見正明・松藤康司・坂東博・野尻幸宏

3 C10-2　世界の水田からのメタン発生量の推定（農環研）○陽捷行・八木一行・鶴田治雄

（10：30～12：00）座長：河村公隆

3 C10-3　1988年から1992年にかけての筑波における大気中メタン濃度について（気象研）○松枝秀和・井上久幸

3 C10-4　大気中のメタン濃度の地域分布（東大理）○遠嶋康徳・脇田宏

3 C11-1　気象研鉄塔で観測された大気中の CO_2（気象研）○井上久幸・松枝秀和

3 C11-2　沿岸域大気のジメチルサルファイドと二硫化炭素（北大水産）角皆静男・○渡辺修一・杉山清泉

3 C11-3　安定同位体比による N_2O の循環の解析（富山大理）○岩月輝希・吉田尚弘

3 C11-4　大気中メタンの炭素同位体比測定（名大工）○森泉純・永峰康一郎・飯田孝夫・池辺幸正

（13：00～15：00）座長：渡辺修一

3 C13-1　世界各海洋における大気エアロゾル中の炭化水素の分布（都立大理）田中毅一郎・○河村公隆

3 C13-2　赤道域太平洋大気エアロゾル中の低分子ジカルボン酸の組成変化（日鉱分析研セ・都立大理）○坂口太・河村公隆

3 C13-3　Distributions of organic acids and carbonyls in snow and rain from Tokyo area（都立大理）○Sempéré・河村公隆

3 C13-4　大気試料中の ω-オキソ酸の同定と地球化学的意義（都立大理）○河村公隆・安井治・坂口太

3 C14-1　グリーンランド氷床コア中の脂肪酸の深度分布（都立大理・極地研）○鈴木郁子・河村公隆・藤井理行

3 C14-2　A geochemical study on atmospheric aerosols observed on Ryukyu Islands and mainland China（琉球大理）○彭金輝・平良初男・棚原朗

3 C14-3　南極大陸（昭和基地）におけるエアロゾルの化学組成（慶応大理工・名大太陽地球環境研）○田中茂・益子治・小林真実・石川恒・渡辺和章・毛塚真基・柳沢健司・橋本芳一・林政彦

3 C14-4　府中市における大気エアロゾルの化学組成及びその挙動（名大水圏研・農工大農）○松本潔・小倉紀雄

D会場

一般講演［熱水］

（9：00～10：30）座長：中井俊一

3 D09-1　沖縄トラフ海底熱水性堆積物の化学組成と同位体組成－［3］（琉球大理）○大森保・小泉宝之・道祖啓介・棚原朗・平良初男

3 D09-2　熱水中の溶存気体成分から見た沖縄トラフの地球化学的研究（東大理・東大海洋研・九大理・山形大理）○角皆潤・石橋純一郎・脇田宏・蒲生俊敬・千葉仁・中島和夫・金山晋司・酒井均

3 D09-3　化学平衡と同位体平衡：硫化物－硫酸塩平衡に関する実験的アプローチ（東北大理）○林謙一郎・大本洋

3 D09-4　酸性火成岩類の熱水変質過程における希土類元素，バリウムなどの挙動（神戸大教養・海技研・京大原子炉）○寺門靖高・藤谷達也・高田実弥

一般講演［岩石・地殻］

3 D10-1　歴史溶岩のアルゴン同位体比組成－なぜ大気の同位体分別直線上に分布するのか？－（地調）○松本哲一・宇都浩三

3 D10-2　アーケアンのチャート中の炭素及び希ガス同位体（広島大理・岡山大地球研・Open Univ.）○佐野有司・長尾敬介・C. T. Pillinger

（10：30～12：00）座長：高橋和也

3 D10-3　グリーンタフ地域の天然ガス中の希ガス（東大理・岡山大地球研）○中井俊一・脇田宏・長尾敬介

3 D10-4　カーボナタイト中の始源的な He と過剰 ^{129}Xe（東大理）○佐々田俊夫・比屋根肇

3 D11-1　西オーストラリア Pilbara の始生代岩石の REE パターン及び Ce，Nd 同位体比（電通大自然科学・熊本大理・名大理）○南雅代・清水洋・足立守・増田彰生

3 D11-2　岐阜県上麻生産燐酸塩チャートの希土類元素組成（神戸大理・名大理）○山本鋼志・足立守

3 D11-3　北部北上山地の花崗岩質岩体の Rb－Sr 年代と Sr 同位体組成（東北大理・琉球大理）○藤巻宏和・王成玉・加藤祐三・青木謙一郎

3 D11-4　酸素及びストロンチウム同位体比からみた八幡平火山群の火山岩の生成過程（秋田大鉱山）○山崎充・松葉谷治・山元正継

（13：00～14：00）座長：松田准一

3 D13-1　北フィージー海盆における Backarc Basin Basalt の起源（地調・東大理・ORSTOM）○野原昌人・広瀬敬・J. P. Eissen・浦辺徹郎・上嶋正人

3 D13-2　シャッキー海膨より採取した変質した玄武岩の Ce，Nd，Sr 同位体比（電通大自然科学・熊本大理）○天川裕史・清水洋・増田彰正

3 D13-3　同位体希釈質量分析法による岩石試料中のリチウムの定量（防衛大地球科学）○細江守一・前田泉

3 D13-4　線型加速器の ^{15}N イオン照射による火山ガラス中の水素の表面分析（理研）○岡田昭彦・荒谷美智・矢野倉実・秋山浩

（14：00～15：15）座長：清水　洋

3 D14-1　新潟県内における自然放射線分布状況調査（新潟県衛公研）○米田和広・殿内重政

3 D14-2　変成ドロマイト岩の安定同位体比微量測定法と微細同位体平衡領域（静岡大理）○長井洋一・和田秀樹

3 D14-3　CO_2 レーザーを用いた造岩鉱物の酸素同位体比測定用試料の調整（岡山大地球研・九大理）○塩田敦士・千葉仁・日下部実

3 D14-4　レーザープローブ法による希ガス溶解度および拡散係数の決定（Ⅰ）（阪大理）○松田准一・渡辺保之・小嶋稔

3 D15-1　琉球石灰岩の熱蛍光年代測定に関する基礎的研究その1（日本商事医業研・琉球大理・琉球大工）○岩元和正・平良初男・棚原朗・山本哲彦・玉城史朗

日本地球化学会1992年度
第１回評議員会議事録

日　時：1992年２月15日　15：00－19：00
場　所：東京大学山上会議所
出席者：脇田宏会長，半田暢彦副会長，一國雅巳監事，安部喜也，石渡良志，海老原充，大隅多加志，日下部実，佐野有司，清水　洋，杉崎隆一，鈴木徳行，富樫茂子，中井俊一，長尾敬介，野崎義行，野尻幸宏，松田准一，松久幸敬，綿抜邦彦（以上評議員）

１．松久幸敬（Geochemical Journal 編集長），綿抜邦彦（1992年度学会賞等受賞者選考委員会委員長）両会員を会長委嘱の評議員にする件が承認された。但し，綿抜評議員の任期は１年とする。

２．前回議事録を了承した。

３．報告事項

３－１　幹事会（清水評議員）

２月８日15時より東京大学理学部において開催。出席者は脇田会長，半田副会長，海老原，清水，中井，野尻各幹事，松久 GJ 編集長で第１回評議員会の議題内容について議論した。

３－２　庶務（清水評議員）

第２回 WPGM の地球惑星科学関連学会連絡会としての共催を承認した。研究公募１件，助成金募集１件が回覧された。献本が１冊あった。1992年度の年間スケジュールを決めた。学会事務センターが４月13日に移転する。

３－３　会計（中井評議員）

前会計期間中に黒田和夫氏より100万円の寄付があった。今後，有意義に活用することとした。

３－４　編集

(1) Geochemical Journal（松久評議員）

Vol. 25，№４は出版済，№５は印刷中，№６は編集中で３月発行予定。昨年度の投稿件数は53編。

(2) 地球化学（田中編集長からのメモ）

Vol. 25，№２は編集終了，まもなく印刷予定。次期編集委員は，赤木　右，上岡　晃，高橋和也，原田　晃，山本鋼志，金森　悟，松尾禎士，一國雅巳会員とする。

(3) ニュース（野尻評議員）

№128は印刷中。

３－５　行事

(1) 1992年度春季シンポジウム（松田評議員）

２月１日にプログラム委員会が開かれた。地球化学会の固有セッションには合計28件の申込があり，４月9―10日に行う。プログラムをニュース№128にはさむ。

(2) 1992年度東京年会（安部評議員）

1992年10月１－３日，東京農工大学農学部（府中市）で開催。１月10日に第１回準備委員会を開いた。日本化学会へ共催の申込をした。

３－６　学術会議

(1) 陸水研連（綿抜評議員）

委員会が開催され，1993年の IAHS の組織委員会原案が作成された。

(2) 鉱物研連鉱床学専門委員会（松久評議員）

委員の構成見直しが検討された。地球化学会から引き続き，委員が１名参加することが了承された。

(3) 海洋研連（半田評議員）

１月31日に委員会が開催された。国際プロジェクトへの取り組みが討論された。

(4) 地質科学総合研連（脇田会長）

２月17日に委員会が開催される。

３－７　その他

（綿抜評議員）１月の末に今年度の学会賞の推薦を締め切った。

４．審議事項

４－１　入退会承認

1991年11月１日から12月31日までの入会退会は，以下の通り承認された。

入会　（３名－すべて正会員）：柳瀬信之，海老沼孝郎，（以下学生）梶塚　泉

退会　（21名－すべて正会員）：阿部　宏，針谷宥，市原優子，杉村行勇（逝去），尾崎邦雄（逝去），藤永太一郎，早川正己，本多朔郎，黒田六郎，小林節子，室住正世，仁藤　修，大西　寛，岡部賢二，佐藤満雄，吉羽興一，若月利之，岡本康成，田口　勇，竹下　徹，STOIBER，Richard E.

また，その他の異動は，以下の通りである。

学生→一般（１名）：斎藤千鶴

この結果，会員数は以下のようになった。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1991年10月31日	947	19	6	972
入　会	3	0	0	3
退　会	－21	0	0	－21
1991年12月31日	929	19	6	954

学生69在外30を含む

４－２　委員会の設置

1992－1993年度の期間，以下の委員会を設置することが承認された。

会員問題検討委員会
　委員長　半田暢彦
　委　員　佐野有司，清水　洋，長尾敬介
　　野尻幸宏，藤原祺多夫

将来計画委員会
　委員長　半田暢彦
　委　員　(学会) 海老原充，北逸郎，野崎義行
　　松田准一
　　(研連) 石渡良志，野津憲治

名誉会員推薦委員会
　委員長　半田暢彦
　委　員　一國雅巳，日下部実，佐野有司
　　清水　洋，綿抜邦彦

但し，各委員会には適宜委員を追加する。

４－３　科研費審査員候補者推薦について

平成５年度から科研費の分科細目が変更になり，地球化学は，分科「化学」の中の「分析・地球化学」から分科「地球科学」の中の細目「地球化学」として独立する。

２月14日に開催された学術会議第４部会において，審査員候補者の依頼先について討議がなされた。その結果，(1) 細目「地球化学」の１段審査については地球化学・宇宙化学研究連絡委員会において討議する，その際には，関連する地球物理学，地質科学総合，化学の３研究連絡委員会の意見を考慮すること，(2) 分科「地球科学」の２段審査については，地球物理学，地質科学総合，地球化学・宇宙化学の研究連絡委員会において討議すること，となった。また，地質学関係の日本学術会議会員３名及び地質学関連の14学協会でもたれた科研費懇談会（1991年12月16日，1992年２月３日）について脇田会長から説明があった。

今後，研連から学会へ審査員候補者の依頼があった場合の，学会としての審査員候補者の選出方法について討論がなされた。その結果，今回は審査員候補者を評議員が投票し，その上位20名の中から会長，副会長が専門分野も考慮して，１段審査，２段審査の審査員候補者を決定することとなった。上位20名のリストは，評議員会で発表する。

４－４　地球化学会創立30周年記念事業

来年度は本学会の創立30周年に当たるため，記念事業について，学会としての取り組みを検討することになった。

４－５　学会共催に関して

(1) 地球惑星科学関連学会合同大会

1993年合同大会に参加することが承認された。従来行われていた例会，春季シンポジウムとの関連についての意見交換があった。

(2) 1992年度10月下旬に三朝で開催予定の International Working Group on Crater Lakes（仮題）の地球化学会としての共催が了承された。

1992年度第２回評議員会議事録要旨

1992年度第２回評議員会は，６月20日15時より東京大学山上会館で開かれ，出席者は脇田会長を始め22名であった。正式の議事録は，次回評議員会で承認されたのち，ニュースに掲載の予定である。

１．庶務，会計，編集，行事に関する報告があった。1993年春季シンポジウムは，地球惑星科学関連学会1993年合同大会に参加する形で，３月19日～22日の期間中に東京都立大学で開催される。

２．名誉会員推薦委員会，学会賞等受賞者選考委員会の報告があった。学会賞等受賞者選考委員会の選考結果に対する承認は，７月に評議員の郵送による投票で行なうことが了承された。

３．学術会議の地球化学・宇宙化学研究連絡委員会から，平成５年度科研費の分科「地球科学」の細目「地球化学」の１段審査委員候補者は，関連する学協会からの審査委員候補者の推薦をもとに，地球化学・宇宙化学研究連絡委員会で調整し，地球化学・宇宙化学研連から学術会議第４常置委員会に推薦するとの報告があった。その他，陸水研連，海洋研連，鉱物研連鉱床学専門委員会から報告があった。

４．地球化学・宇宙化学研究連絡委員会委員長からの，科研費の細目「地球化学」の１段審査委員候補者及び分科「地球科学」の２段審査委員候補者の推薦依頼に対応して，審査委員候補者の投票を行った。研連へ推薦する審査委員候補者は，投票結果の上位20名の中から，専門分野も考慮して，会長，副会長が決定するとの，前回の決定事項を確認した。

５．1992年１月１日から４月30日までの入会10名（すべて正会員），退会６名（正会員５名，賛助会員１名）が承認された。この結果1992年４月30日現在，正会員934名（学生72名，在外31名を含む），賛助会員18名，名誉会員６名，合計958名となった。

６．鳥居監事の監査を受けた1991年度会計決算報告案が提出され，審議の上，了承された。

７．会員問題検討委員会（半田委員長）から，永年にわたり本学会に貢献されてきた会員に対して，特別措置をとることが提案された。委員会からの原案に基づいて，資格や措置の形態及び財政的な問題等についての討論の結果，なんらかの措置の導入に関しては了承されたが，細部については，今後継続して検討すること

となった。会則検討委員会を設置し，会則の面からもこの問題を検討することとした。

訃　報

本会元会長松尾禎士先生が逝去されました

1984・85年度本会会長松尾禎士先生（電通大教授，東工大名誉教授）は，去る5月8日心筋梗塞のため急逝されました。11日の告別式では，本会から生花を献じました。

先生は，火山ガスの化学組成に関する世界的業績をはじめ，同位体地球化学の分野で多くの成果をあげられました。東京教育大，東工大での研究活動を通じ，わが国の地球化学の第一線で活躍する多くの研究者を育てました。また，本会の前身である地球化学研究会当時から永年にわたり，本会の運営に尽力いただきました。深く哀悼の意を表し，謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

新会員紹介

（1992年1月1日～4月30日分）

正会員

小松崎光男	小松崎クリーニング
山根　幹生	ジオサイエンス㈱
渡辺　一樹	海上保安庁水路部
石井　雅男	気象研究所地球化学部
岩崎　　廉	㈶神奈川高度技術支援財団
S大河内直彦	東京大学海洋研究所
S田中　里志	新潟大学自然科学研究所
S天川　裕史	東京大学理学部化学科
S高橋　尚毅	山形大学理学部地球科学科
S狩野　直樹	東京大学宇宙線研究所

（Sは学生）

1992年度学会賞等受賞者

1992年度の受賞者が以下の通り決定しました。

日本地球化学会賞：松田准一博士
（大阪大学理学部助教授）
受賞題目「ユレライト中のダイヤモンドの新成因説とその実験的検証」

日本地球化学会奨励賞：坂田　将博士
（工業技術院地質調査所主任研究官）
受賞題目「火山岩を貯留岩とする石油・天然ガス鉱床の炭化水素の起源」

日本地球化学会奨励賞：高橋和也博士
（理化学研究所研究員）
受賞題目「分化した隕石の年代学的及び化学的研究」

日本地球化学会功労賞：安藤　厚博士
（資源探査用観測システム研究開発機構）
受賞題目「地球化学標準試料の作成とその国際標準化」

地球惑星科学関連学会1992年合同大会，1992年度日本地球化学会春季シンポジウム報　告

日本地球化学会実行委員　松田　准一（神戸大理）

1992年度合同大会は，4月7－10日の4日間，京大教養学部において，開催されました。セッション参加学会は，地震学会，日本火山学会，日本測地学会，日本地球化学会，地球電磁気・地球惑星圏学会の5学会で，シンポジウム共催学会として，日本気象学会，日本鉱物学会，日本岩石鉱物鉱床学会が参加しました。昨年の共立女子大の美しいキャンパスに比べて，京大教養キャンパスの対照的な汚さ（最近の国立大学の荒廃ぶりを見るようでしたが，これが京大の特徴であると自慢する人もいます）が印象的でしたが，大会はたいへん盛会でした。10会場が4日間にわたり使われました。共通セッションが371件，5学会の固有セッションが442件，シンポジウムが40件の合計853件の講演発表で，昨年（781件）に比べて，大幅な増加でした。固有セッションの数がむしろ減少しているのに対して，共通セッションの数が昨年（282件）に比べて大幅に増えているのが特徴です。せっかく合同大会をやるのだからできるだけ学会の壁を取り払おう，という気持ちが反映されているようです。1,100部の共通セッションの予稿集は2日で売り切れ，欲しくても手に入らない人が続出しました。大会参加者は登録した人が1,599名で，一昨年（約1,200人），昨年（約1,400人）と比べて順調に伸びてきているようです。共通セッションの中では，惑星科学がもっとも発表件数が多かった（72件）のですが，これは本合同大会中に日本惑星科学会の設立総会がもたれ，正式に新学会が発足したことによるものと思います。

日本地球化学会春季シンポジウムは，合同大会中の固有セッションとして4月9－10日に1日半の日程で行われました。口頭発表は27件，ポスター発表は1件の計28件（講演数は5学会中4番目）でした。昨年の発表件数（30件）より少なかったのですが，今年は共通セッションに惑星科学や雲仙火山などがあり，そちらで発表された人も多かったものと思われます。昨年同様，冊子状の「講演要旨集」を作成しました。英語名が必要ということで，Geochemical Journal の編集長である松久氏（地調）と相談し，「1992年度日本地球化学会春季シンポジウム」を“The 1992 Spring Meeting of the Geochemical Society of Japan”とすることにしました。日本語はシンポジウムですが，英語はmeetingの方が良かろうということになりました。講演要旨集は96部販売しましたが，まだ100部ほど残部があり，今年の秋の年会の際に希望者には無料で配付することになりました。

来年の地球惑星科学関連学会は3月19日(金)－22日(月)に東京都立大学で開催される予定です。来年以降も積極的なご参加をいただき，春季シンポジウムを盛り上げていただきたいと思います。次回については，本会行事担当の海老原充氏（都立大理）にお問い合わせ下さい。

科研費細目「地球化学」の誕生

日本地球化学会会長　脇田　宏

このほど，文部省科学研究費（科研費）の分科細目の大幅な見直しが行われ，部「理学」は，9分科27細目から7分科30細目に改正されました。この中で，一番注目すべき改正点は，地球関係の分科が統合されて，分科「地球科学」がつくられ，その中に細目「地球化学」が新設されたことです。

従来，別々の分科を構成していた「地球物理学」，「地質学」，「鉱物学（含岩石・鉱床学）」と，「化学」の細目にあった「分析・地球化学」が移行，最編成されて，新しい分科「地球科学」が新設されました。そして，その中に細目「地球化学」がつくられたのであります。この改正によって，「地球科学」は7つの細目からなる「理学」で一番大きな分科となりました。

今度の改正で重要な点は2つあります。第1は，地球科学が，数学，物理学，化学，生物学などと並ぶ基礎科学のひとつに位置付けられたことです。第2は，地球科学の健全な発展に物理，化学，地質の3つの分野の均整のとれた育成が不可欠であるという理念が示され，これに基づき「地球化学」が新設されたことです。

科研費の配分は学問分野の発展に重要な関わりをもっています。「分析・地球化学」から分離・独立して，「地球化学」となったことは，地球化学が地球科学の一員となることを内外に示したことであり，今後大きく発展する可能性が開けたことを意味します。周辺の学問領域と融合して，地球化学は大きく変容することが期待されていて，その実現に努力することが必要です。

ふりかえってみると，地球化学はいかにも弱体でした。いくつかの大学に地球化学の講座は設置されてはいたものの，地球化学の対象範囲は広く，とうてい1つの講座などではカバーできるものではなく，複数の講座による教育がはじめて効果を発揮します。

この改正にみられるように，基礎学問分野の再編成が行われようとしています。大きな歯車がまわりはじめたのです。この時代のうねりに耳をかたむけ，地球化学，そして地球科学の発展に努力しようではありませんか。

ここで，私たちにとって現在，最も重要なことは，科研費の申請件数を増加することです。従来の「分析・地球化学」の中の地球化学分を越える申請数を「地球化学」に実現することが必要です。

どうか会員諸氏，奮って応募していただきたいとお願いする次第です。科研費を申請することは，研究目標，研究動向の整理と新たなテーマへの着想に結びつくよい機会でもあります。

講演会開催

題　目：『科学研究費の配分システムについて』
講演者：飯田　益雄

来たる10月1日，年会第1日目，講演終了後に地球化学の将来計画を話し合う夜間集会が開かれます。

この集会の前半には，松尾学術振興財団常務理事をしておられる飯田益雄氏に上記のテーマで講演をお願いしてあります。飯田氏は多年，学術行政とくに，科研費関係に携わってこられた方であります。きっと面白く，役に立つお話が伺えると期待しています。皆様のご参加お待ちしております。

1993年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者及び研究助成候補者の推薦依頼について

「女性科学者に明るい未来をの会」から下記の推薦依頼がありましたので，お知らせします。

記

猿橋賞

1　本賞は自然科学の分野で，顕著な研究業績を収めた女性科学者（ただし，下記の推薦締切日で50才未満）に贈呈します。
2　本賞は賞状とし，副賞として賞金（30万円）をそえます。
3　本賞の贈呈は1年1件（1名）です。
4　所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目，推薦理由（400字程度），略歴，主な業績文献リスト，及び，主な論文別刷10編程度をそえて，本会事務所までお送り下さい。
5　締切は1992年11月末日（必着）。
6　第13回の賞贈呈式は，1993年5月，東京において行う予定です。

研究助成

1　海外のシンポジウム等に出席し，論文を発表する女性研究者に対し，研究助成をいたします。

2　助成金は1件10万円とし，年に数件とします。

3　所定の用紙に推薦対象者（各締切日において満40才未満）の略歴，研究業績，国際会議名（主催団体，開催場所，年月日），発表論文題目，推薦理由等を記入して，本会事務所までお送りください。

4　締切は1992年11月末日と，1993年4月末日の2回。

女性科学者に明るい未来をの会
〒166　東京都杉並区高円寺北4-29-2-217
tel. 03-3330-2455（fax. 兼用）

「朝日賞」候補者推薦のお願い

朝日新聞社より1992年度「朝日賞」候補者推薦依頼が本会に届きましたので以下に要旨を掲載します。

記

「朝日賞」は1929年に朝日新聞創刊50周年を記念して創設し，わが国のさまざまな分野で傑出した業績をあげた，文化・芸術・文学・科学技術・社会福祉・スポーツなどあらゆる分野の方々を対象としています。毎年，広く各界のご専門の皆様に受賞候補者の推薦をお願いし，さらに他のいろいろな方のご意見を伺ったうえ，朝日賞選考委員会で慎重に審議し，受賞者を決定しております。受賞者は1993年元旦の朝日新聞紙面で発表し，1月下旬，朝日新聞東京本社で贈呈式を行います。

問い合わせ　推薦票要旨の請求は以下まで
朝日新聞社文化企画局企画第二部「朝日賞」係
〒104-11　東京都中央区築地5-3-2
tel. 03-3545-0131（内線5477）fax. 03-3543-3280

X線マイクロアナライザー（EPMA）講習会

下記の協賛行事が行われますのでお知らせします。

記

本講習会では，機器の基礎知識，各種機器による分析法の実際と応用，物質各種についての分析法の特徴と分析結果の評価などの講習と，希望者には機器を使用しての実習が行われます。組成分析を進めようとしておられる方々，電子線機器を導入しようとしておられる方々を主な対象としています。

詳しい内容等は事務局までお問い合わせ下さい。

主　　催：日本鉱物学会
協　　賛：日本地球化学会，その他
講習会期日：1992年10月5日（月），6日（火）
講習会会場：新橋住友ビル
　東京都港区新橋5-11-3
実習期日：1992年10月22日（木），23日（金）
　同じ内容で2回行います。
　実習は講習を受講した方に限ります。
実習会場：日本電子㈱開発館
　東京都昭島市武蔵野3-1-2
申込先：日本鉱物学会事務局
　〒107　東京都港区赤坂9-6-41　乃木坂ビル
　tel. 03-3475-5287　fax. 03-3475-0824
定　　員：講習会　120名，実習　各回20名
　定員に達し次第締め切ります。
申込方法：郵送あるいはfaxにてお申込下さい。
　参加申込用紙をお送りいたします。
申込期限：9月30日
参加費：テキスト代，交流会費を含む。
　括弧内は実習を希望の場合

日本鉱物学会会員	20,000円（30,000円）
協賛学会会員	40,000円（50,000円）
一般	50,000円（60,000円）

第4回IAHS－第6回IAMAP連合科学会議の開催について

1993年7月11日－23日に，表記の国際学会が横浜で開催されます。IAHS（International Association of Hydrological Sciences: 国際水文科学会）はIUGG（International Union Geodesy and Geophysics: 国際地学・地球物理学連合）傘下の水文科学の国際協会であり，2年毎に国際会議を行っています。今回は，アジアで初めて開かれることと，同じIUGG傘下のIAMAP（International Association of Meteorology and Atmospheric Physics: 国際気象学大気物理学協会）と初めて合同で開かれることに，大きな特徴があります。

本会議は，IAHSの側からは日本学術会議と日本地球化学会を含む下記13学会が主催者となって準備を進めています。最近の地球環境問題研究には水文学，気象学相互の協力がぜひ必要との立場から，IAHSとIAMAPのジョイントシンポジウムが13件持たれる他，単独のシンポジウム，ワークショップが開かれます。セカンドサーキュラーが今年8月発行の予定です。希望される方は，下記事務局に至急ご請求下さい。

講演発表申込は，一部のジョイントシンポジウムとIAHS単独のシンポジウムについては，本年4月末日のアブストラクト提出で原則として〆切られています。これ以外のIAHS関連のシンポジウムおよびワークショップの〆切は本年9月末日，また残りのジョイントシンポジウムおよびIAMAP関連のシンポジウム，ワークショップの〆切は，1993年1月となっています。細かい日程・内容などについては，下記の事務局かもしくはそこでローカルコンビナーを確認され，お問い合わせ下さい。

（信州大学理学部　福島和夫）

名　　称：第4回国際水文科学協会科学会議
　（The 4th Scientific Assembly of IAHS）
会　　場：横浜市，パシフィコ横浜
期　　間：1993年7月11日－23日
主　　催：日本学術会議，日本陸水学会，日本地下水学会，日本雪氷学会，日本地球化学会，土木学会，農業土木学会，日本林学会，日本地形学連合，砂防学会，水文・水資源学会，日本水文科学会，陸水物理研究会，日本地熱学会
照会先：〒100 千代田区大手町1-7-2 サンケイビル10階
　サンケイコンベンション内IAMAP-IAHS'93事務局
　tel. 03-3273-2084　fax. 03-3273-2439

ジョイントシンポジウム

J1. Global monitoring and advanced observing techniques in the atmosphere and hydrosphere.
J1.1 Remote sensing applications to large-scale hydrological modeling.
J1.2 GEWEX continental scale international project (GCIP).
J2. Snow cover and its interactions with climate and ecosystems.
J3. Process understanding of atmosphere/land interaction : Contribution of the hydrological and atmospheric sciences to the IGBP core project BAHC.
J3.1 Exchange processes at the land surface for a range of space and time scales.
J3.2 Coupling of trace gas exchange at the surface and hydrological cycle.
J3.3 Organic acids and their role in aqueous atmospheric chemistry.
J4. Precipitation
J4.1 Large scale effects of cloud systems.
J4.2 Extreme hydrological events : precipitation, floods and droughts.
J4.3 Clouds and precipitation chemistry and deposition.
J5. Processes of mass and energy exchange between the atmosphere and polar surfaces.

IAMAPシンポジウム

M1. IAMAP-IAPSO symposium on atmosphere/ocean interaction.
M2. IAMAP-WMO sysmposium on monsoons and tropical cyclones.
M3. IAMAP-IAPSO symposium on global climate models.
M4. Atmospheric predictability.
M5. Mesoscale weather systems.
M6. IAMAP-IAGA symposium on middle atmosphere sciences.
M7. Middle atmosphere aerosols and Mt. Pinatubo.
M8. Stratosphere-troposphere interactions with the biosphere and climate.
M9. The international global atmosphere chemistry project.
M10. Atmospheric electricity.
M11. Revent advances in the Mars and Venus atmopheric research.

IAMAPワークショップ

MW1. Intercomparison of 3-D models of the middle atmosphere.
MW2. First look at CADRE.
MW3. Middle atmosphere effects of extraordinary strong particle events of 1989-92.

IAHSシンポジウム

H1. Macroscale modelling of the hydrosphere.
H2. Tracers in hydrology.
H3. Hrdrology of warm humid regions.
H4. Sediment problems : strategies for monitoring, prediction and control.

IAHSワークショップ

HW1. Testing of hydrological models for water resources assessment.
HW2. Concepts and methodology in hydrogeomorphology.
HW3. Role of snow and ice in the water cycle in high mountainous（IHP-IV）.
HW4. Use of old hydrometeological data to study global changes.
HW5. Management of acidified fresh waters.
HW6. Non-linearities, fractals and chaos in hydrology.

IGC地球化学関連プログラム

8月24日より京都国際会議場で開催される万国地質学会（IGC）の，地球化学セクション5つのプログラムを本号21から25ページに掲載します。他のセクションや共通セクションのうち，地球化学関連のものについては，シンポジウムのタイトルとコンビナー名を掲載します。

学会登録料は一般50,000円，学生17,000円，同伴者20,000円です。3rd. Circularをご希望の方は，下記の事務局へ申込下さい。

問い合わせ先：〒305　研究学園都市郵便局私書箱65号
第29回万国地質学会事務局
tel. 0298-54-3627，fax. 0298-54-3629

［書　評］

地球システム科学入門

著者　鹿園　直健

定価2,884円，228頁，東京大学出版会

地球環境汚染や資源枯渇といった問題が近年クローズアップされるようになり，これまで人間活動との関わりにあまり重きを置くことがなかった地球科学の研究のあり方に，変革が求められるようになって来ている。地球システム科学は，そのような背景から，1988年にNASAの諮問会議によって提唱されたきわめて新しい学問であり，本書はその入門書としてわが国ではじめて出版されたものである。

著者は地球科学，鉱床学における第一線の研究者であり，本書もこの分野の内容が大きなウェイトを占めている。本書の構成は全7章からなり，まず第1章「序論」では，地球システム科学という学問の概念について，従来の地球科学との比較のもとに説明が行われている。第2章以降から本論に入り，第2章「地球システムの構成要素」では大気圏，水圏，岩石圏，生物圏等の個々の物理・化学的性質とその間の相互作用（すなわち物質とエネルギーの流れ）について，第3章「地球システムの構成物質」では岩石・鉱物の区分や成因について，それぞれ解説がなされている。これらは，従来の地球科学が成し遂げてきた，地球の構成に関する成果の要約ということができよう。

第4，5章では自然システムと人間社会システムの相互作用の重要な事例として，「資源」と「地球環境問題」が取り上げられている。資源に関しては，その定義や区分，問題点などの総論に続いて，鉱物資源（金属，非金属，水など），エネルギー資源（化石燃料，地熱など）に関する各論へと議論が展開している。金属鉱床，とりわけ熱水性鉱床についての解説が詳しく，専門家にも十分役立つ資料となっている。また地球環境問題に関しては，地球温暖化やオゾン層破壊，酸性雨，土壌汚染，水質汚濁等の原因や現況が個々にコンパクトにまとめられており，これらの問題は相互に密接に関係していることから，トータルに環境保全対策を考えることの重要性が強調されている。

第6章では，地質年代測定法の解説に続いて，地球の起源と進化に関する近年の研究成果が紹介されている。「地球の起源物質が何であったか」，「地球の海と大気がどのようにして造られ，どのような進化をたどったのか」というような興味深い問題が，比較惑星学，数値シュミレーション，同位体地球化学等の研究アプローチによって謎解かれるプロセスが簡潔に記述されており，専門外の人にも地球科学の面白さが理解できる内容となっている。

第7章では，本書の結びとして，現代の様々な地球観と，その中での本書の位置づけが示されている。また各章の終わりには，その章のまとめと，関係する設問が用意されており，これらは読者が学習内容を整理し，さらに思考を発展させる上で，役立つものと思われる。

資源や地球環境といった，人間社会との関係が密接な部分の記述が多く，専門外の読者にとっても親しみやすい内容になっている。また全般にわたって，地球の諸現象が人間社会も含むさまざまなサブシステムの相互作用としてダイナミックに捉えられ，専門家にとってもこれまでの地球科学の成書とは違った新鮮な理解を得るところがあり，一読を勧めたい本である。

（地質調査所　坂田　将）

［書　評］

地球化学

著者　西村　雅吉

1991年，定価1,800円，裳華房

本書は，元北海道大学理学部，水産学部で教鞭をとられていた本学会の大先輩によって書かれたものである。

環境化学と題する著者には大きく分けると2つのタイプがあるように思う。一つは，工学系の著者が書いたもので，その基本はエネルギー問題，公害問題，保全技術に重点を置いて書かれている。他は，理学系の地球化学に専門を持つ著者によって書かれたもので，環境化学を地球化学の延長線上にとらえて書かれたものである。本書は著者が述べているように後者に属するものである。

地球化学的な基礎に7章のうち4章をさき，「太陽系・地球」，「大気圏・水圏・生物圏」，「分析値の意味するもの」，「物質の動き」について簡潔にわかり易く述べてある。特に，4章「物質の動き」の中で南極やグリーンランドにおける積雪氷柱状サンプル中の鉛，水銀濃度分析と人間活動との関係を取り上げ，水銀に関しては近年における汚染を積極的に証明できなかったことを述べている。他方，大気圏を通しての物質移動の重要性を指摘している。5章での「化学物質による汚染」では，各汚染物質濃度の経年変化等を簡単に述べるに留めている。6章で地球規模の環境問題を取り上げ，地球温暖化問題を中心に述べ，地球化学的基礎がこの章で生かされている。まえがきではワープロの変換ミスがあり気になった。

地球環境問題がクローズアップされている今日，この問題に興味を持つ学生に本書の一読を勧めたい。

（東京水産大　大槻　晃）

［書　評］

地球環境変動の科学，かけがえのない地球を守るために

第5回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編

クバプロ，1991年，214ページ，3,000円

本書は，文部省科学研究費補助金等による研究成果の発表として行われている「大学と科学」公開シンポジウムの講演を収録したものである。西アジア文明，エネルギー，材料科学，医学などをテーマとするシンポジウムに続いて，昨年は環境問題が取り上げられた。

セッションAは［環境科学の新たな展開に向けて］と題し，田村三郎氏（東大名誉教授）による基調講演である。その中では，環境の問題に取り組む態度として，「疑わしきは地球の未来のために……不確実性を隠れ蓑にしてはならない」と述べられている言葉の重さが印象的である。セッションBでは「人間－環境系の変化と制御－国内の諸問題を中心に－」と題して，科研費重点領域研究で行われた研究のうち，主に国内での研究活動が発表された。この重点領域では，いわゆる環境での物質循環研究の他，都市環境を扱う小領域が取り上げられた。沖野外輝夫氏（信大）が実際にいくつかの都市でのゴミの流れのデータを集めて解析した研究内容は，演者の専門分野（湖沼生態学）から縁遠い問題に取り組んでいるだけに，比較的近い研究分野の私からみて興味深かった。また，戸塚績氏（東京農工大），富永健氏（東大），須藤隆一氏（東北大）の酸性雨，フロン，水環境の講演は，手堅くまとめられていて，他分野の読者が問題の概要を知るのに便利であろう。セッションCでは「環境問題の変遷と環境研究」と題して鈴木基之氏（東大）が，上記重点領域の全体の概要を講演した。環境問題の歴史，現在の大学の研究体制とその関連が要領よくまとめられ，その後，演者の専門である環境管理モデルの重要性が述べられた。セッションDは「中国における環境変動との闘い」として，日中共同研究が主に紹介された。この中では，砂漠緑化に取り組む意欲的活動が印象的である。セッションEは「西太平洋領域における地球環境変動」であり，開始された“新プロ”研究の中心課題の気候変動関連研究が4人の演者から発表された。

現在の環境問題研究の第一線の研究者の講演がそのまま収められており，当日の講演を聞かなくとも，全体の動向が把握でき，有用な書である。特に，周辺分野の読者には勧められるものである。

（国立環境研　野尻　幸宏）

研究機関紹介

生態学研究センターと地球化学

京都大学生態学研究センター

杉　本　敦　子

京都大学生態学研究センターは，全国共同利用研究センターとして，また地球圏－生物圏国際共同研究計画（IGBP）の生物関連分野の共同研究の受け皿として昨年4月に発足した。旧理学部付属大津臨湖実験所と植物生態研究施設の2つの組織が母体となった。建物も新しいものはまだないので，大津（琵琶湖のほとり）と分室（京都）にわかれて仮住まいしている。現在5つの研究部門（生態構造，生態進化，水域生態，温帯生態，熱帯生態）があり，近々決まるであろう教官1名と技官1名を加えれば教官13名，技官3名とセンター長という小さな所帯である。

生態学の目ざすところは，簡単に言えば生態系の構造と維持機構の改名，環境の変動に対応した生物あるいは生物群集の応答であろう。センターでは現在，安定同位体を利用した生態系の構造の解析，環境に対応した生物の生活史や周期現象の制御，シロアリー微生物共生系の研究，湖沼の生物群集の種間関係，物質循環における微生物の役割，アジアモンスーン地域の植物群集の動態，熱帯雨林の更新過程の解明，植物と動物の共生関係の解明など，様々な研究が行われている。

このような研究は地球化学から見ても興味深くまた重要な問題を含んでいる。例えば生態系の動態が，N，Pといった無機栄養塩の動態と密接にかかわっていること。あるいは陸上植物が作り出す“材”はC/Nが高く生物のえさとしては適さないが，シロアリは微生物との共生によりこれを克服していることなど。C，Nといった生元素の環境は生物なしでは完結しない。また手法の面でも，最近では植物網の解析に安定同位体比の利用が普及しつつある。

全国共同利用機関としてはセンターではいくつかの共同利用事業を行っている。1991年度にセンターが関係した共同研究は，科研費等の研究費の裏づけのあるものだけでも28件もあった。またセンターでは協力研究員を公募しており，現在約100名が任命されている。他にも研究会，セミナー，実習の企画を公募，主催し，公開講演会を開催するなど様々である。全国共同利用機関としてセンターの運営，大学院の受け入れ，教育等に関しても広く開かれた状態となっている。このようなセンターの活動は隔月に発行されるニュースレターで広く紹介しているので，下記までご請求頂きたい。

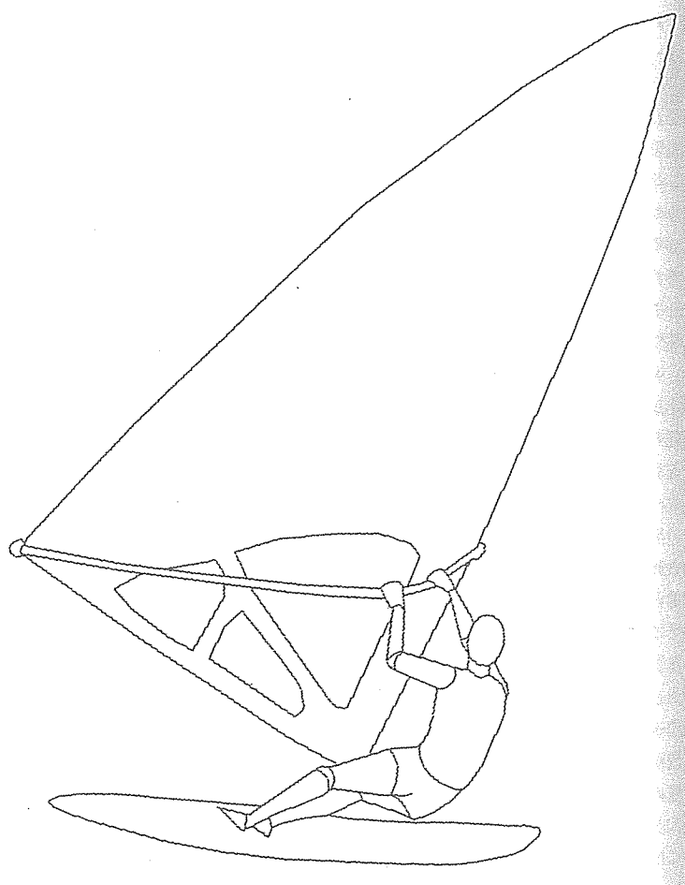
また，センターでは共同利用施設の拡充もはかってい

るところである。大型分析機器の１つとして，C，N，O，H 安定同位体質量分析計が導入された。さらにパソコン通信でアクセスできる生態情報アクセスシステムのホスト局をセンターに開設し，現在どちらも公開のための準備を進めているところである。もう１つセンターでは琵琶湖に調査船（8t）を現有しており，琵琶湖の調査に威力を発揮している。

というように文章で書けばすばらしい研究施設のように聞こえるが，現在のところ場所も狭く設備としては不十分である。私の知る限り，質量分析計の置かれている部屋で，ここほど狭い部屋はないだろうし，センターの調査船は琵琶湖で１番遅い船であるらしい。場所の狭さでは現在かなり危機的な状態にあるが，とにかく今はやるしかないというのが実感である。

地球表面近くでおこっている様々な現象は生態系ぬきでは考えられない。現在のところセンター員のうち地球化学会員は２名だけである。地球化学が化学の手法を用いて地球を理解する学問であり，生物圏を地球に含めて考えれば，生態学と地球化学の距離はもっと狭くなるべきであろう。生態学と地球化学の共生系の学問分野が生まれることを期待している。

生態学研究センターニュースレター問い合わせ先
〒520-01　大津市下阪本4-1-23
京都大学生態学研究センターニュース編集係



The 29th International Geological Congress (IGC)

The Kyoto International Conference Hall, August 24 to September 3, 1992

The Program of the Geochemistry Section

1.Oral Sessions

August 25 (Tue) Afternoon

Symposium: Gas emission & fluid migration associated with seismic & volcanic activities.

Conveners: M.Sato & H.Wakita

1. G.Igarashi, H.Wakita & K.Notsu: Radon emission associated with earthquake swarms off east coast of the Izu Peninsula, Japan.
2. N.Koizumi: Analysis of groundwater temperature variation of artesian well fluctuated by the earth tides – a case of the Nishiawakura well in Okayama Prefecture –.
3. H.J.Kumpel: Pore fluid invasion in poroelastic crust: the cause of hydrologic precursors to earthquakes?
4. N.Segovia, M.Mena & E.Tamez: Radon monitoring related to a subduction zone in Mexico.
5. X.Feng, L.Wang & W.Lin: Anomalous variation in hydrochemistry prior earthquakes (M>5.0) in and around Guangdong Province of China.
6. X.B.Wang, S.Xu, Y.F.Li & M.L.Sun: The isotopic character of mantle-derived primary gases and volcanic activity in Tengchong area.
7. S.N.Williams, Y.Sano & H.Wakita: $^{3}He/^{4}He$ variations at erupting volcanoes.
8. P.M.Nuccio & M.Valenza: Modification of the geochemical parameters during the ascent of magma.
9. M.Martini: Forecasting the awakening of dormant volcanoes: concepts, examples, and the case history of Vulcano (Italy).
10. P.Allard, J.Carbonnelle & N.Metrich: Volatile flux and magma degassing budget at Stromboli and other volcanoes: evidence of intrusive magma degassing.

August 27 (Thu) Morning

Symposium: Noble gas isotopes in magmatic processes.

Conveners: J.E.Lupton, B.Marty & M.Ozima

1. M.Honda, I.McDougall & D.Patterson: Solar noble gases in the Earth.
2. T.Staudacher, P.Sarda & C.J.Allegre: Noble gas signature and isotopic excesses in MORB.
3. H.Hiyagon: Origin of high $^{20}Ne/^{22}Ne$ ratios in submarine glasses.
4. F.Stuart, G.Turner & J.Maynard: The isotopic composition of the noble gases and sulphur in hydrothermal fluids trapped in modern and ancient rocks and minerals.
5. I.Tolstikhin & I.Kamensky: Juvenile helium in ancient rocks and minerals.
6. J.Lupton: Variation in ^{3}He/heat ratios in mid-ocean ridge hydrothermal systems.
7. B.Marty: C, N, He and Ar in volcanic emanations and oceanic basalts: implications for the origin and evolution of terrestrial volatiles.
8. E.Griesshaber, R.K.O'Nions & E.R.Oxburgh: Mantle-derived fluids in the continental crust of Germany.
9. D.R.Hilton, Hammerschmidt, K.Teufel & H.Friedrichsen: Helium isotopes in subduction zones: results from the Sunda and Banda arcs, Indonesia.
10. M.W.Caffee, G.B.Hudson, C.Velsco, E.C.Alexander,Jr., G.R.Huss & A.R.Chivas: Xe and Ne in CO_2 well gases: A meteoritic component in the mantle?

August 27 (Thu) Afternoon

Symposium: Isotopic signatures of ocean water and marine deposits.

Conveners: H.Elderfield, S.Krishnaswami & Y.Nozaki

1. H.Shimizu, K.Tachikawa, A.Masuda & Y.Nozaki: Cerium and neodymium isotopic variations in seawater from the North Pacific.
2. H.Elderfield, M.Rundnicki, R.Mills & A.Mitra: A chemical model for submarine hydrothermal plumes: Isotopic evidence.
3. G.Ravizza: The Re-Os systematics of marine sediments.
4. T.Ito & T.Nakano: Age determination of two-generation marine manganese crusts with Sr isotopes.
5. S.Krishnaswami, J.R.Trivedi, K.Pande, M.M.Sarim, R.Ramesh & K.K.Sharma: Sr isotopes, U and Rb budgets in the ocean: Role of Himalayan rivers.
6. J.K.Cochran: Particle cycling rates in the upper ocean determined from Th.isotope measurements.
7. T.L.Ku: Be isotope systematics in seawater.

8. M.M.Sarin: The water column distributions of ^{238}U series nuclides in the Arabian sea and Bay of Bengal.
9. Y.Zhao, F.Li, R.Jlang, Y.Chen, C.A.Nittroue, D.J.Demaster & J.D.Milliman: Isotopic records of sedimentation in the South Yellow Sea.
10. Y.Nozaki: Radionuclide and elemental fluxes measured by sediment trap experiments in the deepest part of the Japan Trench.

August 28 (Fri) Morning

Symposium: Reaction mechanisms of water–rock interaction.

Conveners: A.C.Lasaga, Y.Matsuhisa & T.Paces

1. L.Sjoberg & P.Schweda: Effects of solution composition on feldspar weathering.
2. R.Hellmann, R.Coratger, J.Beauvillain & F.Ajustron: Surface structure and reactivity: An atomic force microscopy (AFM) study of the albite (010) surface.
3. T.E.Burch & A.C.Lasaga: A surface chemical model for the dissolution kinetics of feldspar in aqueous solutions at low temperature.
4. K.Fujimoto: Characterization of olivine–water interface and reaction mechanism.
5. S.Nakashima, H.Hayashi & T.Nagano: Spectroscopic reaction path modelling of water–rock interaction. – Kinetics of iron oxyhydroxides formation –.
6. I.N.MacInnis, D.E.Voigt, S.L.Brantley & D.M.Kerrick: The effect of saturation state on the dissolution rate of andalusite at 600°C and 200MPa.
7. D.Schenk, R.Palmer & P.Hirsch: Microbial influence on silicate weathering. – Laboratory and field studies in a Quaternary sandy aquifer.
8. H.Wada & T.Ando: Metamorphic fluid process from stable isotopic evidence in two different types of contact metamorphism.
9. E.N.Bastrakov & M.Y.Spasennykh: Mechanisms of the formation of the oxygen isotopic zoning of greisen–vein bodies (Results of the computer simulation).
10. D.Elsenheimer & J.W.Valley: Laser microprobe analysis of oxygen isotope zonation in hydrothermally altered granites: implications for modelling water–rock interaction.

August 28 (Fri) Afternoon

Symposium: Oxygen fugacities recorded in rocks and minerals.

Conveners: N.Kishima, M.Sato & G.C.Ulmer

1. I.Abs–Wurbach: Experimental investigation of the system Mn–Al–Si–O under controlled oxygen fugacities.
2. J.T.Iiyama, N.Furukawa & T.Mitsuki: Influence of oxygen fugacities on the iron partition between coexisting ferromagnesian silicates.
3. F.Lungelhofer, E.Dachs, F.Finger & G.Amthauer: The influence of varying Fe^{2+}/Fe^{3+} ratios in coexisting garnets and biotites on the garnet–biotite–geothermometer.
4. M.Gobbls, H.Idink, A.Kaiser & E.Woermann: An EMF–investigation of the Fe–Ti–O system.
5. D.J.M.Burkhard & G.C.Ulmer: Intrinsic oxygen fugacity experiments on biotite between 300–1100°C – Implications for geology?
6. G.Ottonbllo: From interionic potentials to oxygen fugacity: examples of calculation in silicates and multiple oxides.
7. C.Sclar: Subsolidus precipitates in calcic plagioclase of deep–seated igneous rocks as indicators of fO_2 in the plutonic environment.
8. C.Ballhaus: Oxidation states of lithospheric and asthenospheric upper mantle: fO_2 relationships between basaltic magmas and their mantle sources.
9. D.E.Grandstaff & G.C.Ulmer: Fluid inclusions and equations of state: Implications from diamonds for the redox stability of the mantle.
10. A.A.Kadik & H.V.Zharkova: The redox state and fluid regimes of the Earth's lithosphere and asthenosphere.

2.Poster Sessions

August 26 (Wed) Morning

Symposium: Gas emission and fluid migration associated with seismic and volcanic activities.

1. P.Allard & J.C.Baubron: Volcanic soil gas emanations: results and general implications.
2. M.A.Armienta, S.de la Cruz–Reyna & N.Segovia: Geochemical observations in active volcanic zones of Mexico.
3. M.S.Bayraktutan, J.Merefield, P.Grainger & B.Evans: Regional gas geochemistry in an active tectonic zone, the Erzurum Faults, Eastern Turkey.
4. A.Belyaev & V.Barsukov: Geochemical frequency–modulated predict signals of earthquakes
5. L.Bolognesi & F.D'amore: Temporal evolution of the isotopic composition of fumarolic steam in Vulcano Island (Italy).
6. E.U.De Luna, P.L.Roberts, R.P.Yabut, A.F.Ramos, N.Bugaoisan & Z.Amante: Radon Level measurements as monitoring tool in active volcanoes and active faults.
7. S.M.Fazlullin & G.A.Karpov: Volcanic lakes of the Uzon Caldera: hydrology, hydrochemistry, sedimentation and genesis.
8. H.Friedmann & L.Mossbauer: Radon emission under loading – in situ experiments.
9. G.M.Gavrilenko, Y.A.Taran, S.M.Fazlullin & V.N.Dvigalo: Factors controlling the state of the Malyi Semyachik Crater Lake (Kamchatka).
10. F.Italiano, P.M.Nuccio & G.Pecoraino: Gaseous release from fumaroles during the evolution of the volcanic activity at Vulcano Island, Italy.
11. G.N.Kopylova, V.M.Sugrobov & Y.M.Khatkevich: Study of hydrochemical regime of thermal and mineral waters in Kamchatka for searching for precursors of seismic activity.
12. S.Lombardi: 1984–1991 soil–gas surveys at Vulcano Island (North Sicily, Italy).
13. Z.J.Qiang & L.C.Kong, X.D.Xu & C.G.Dian: Terrestrial degassing, satellite infrared anomaly and impending earthquake prediction.
14. Y.Sano, T.Gamo, K.Notsu & H.Wakita: Secular variation of helium and carbon isotopes at active volcano.
15. D.Tedesco: The Campi Flegrei caldera: a new interpretation of chemical and isotope data.
16. D.Tedesco & G.Miele: Chemical and isotope temporal fluctuations of fumarolic fluids at Vulcano Island (Aeolian Islands, southern Italy).
17. S.N.Williams, R.Dick & C.Cumming: CO_2 GASPEC: Development of a gas correlation spectrometer for remote measurements of CO_2 in volcanic plumes.

August 27 (Thu) Morning

Symposium: Isotopic signatures of water and marine deposits.

1. H.Amakawa, G.Ingri, A.Masuda & H.Shimizu: Isotopic compositions of Ce, Nd and Sr in ferromanganese nodules from various oceanic regions.
2. H.J.Brumsack & E.Zuleger: Boron and boron isotopes in pore waters from Leg 127 (Japan Sea).
3. J.S.Chen, H.Zhong & C.F.Wen: Carbon isotope variation of Paleozoic marine carbonate sequences.
4. A.Danielson: Early proterozoic carbonates and seawater composition: A case study on the South African Campbellrand and Smitsdrft Subgroups.
5. T.Ding, S.Jiang & T.Song: A study on silicon isotope compositions of sedimentary siliceous rocks.
6. T.Hamor, E.Hertelendi & L.Kavacs: Sulphur isotopic composition of sedimentary sulphides and sulphates of the Pannonian Basin, Hungary.
7. R.E.Prilutsky: Method of reconstruction of the elements initial isotopic composition of the sedimentary rocks.
8. R.E.Prilutsky: Reconstruction of the sedimentary conditions in the history of the earth according to isotopic data.

August 27 (Thu) Afternoon

Symposium: Noble gas isotopes in magmatic processes.

1. I.Kaneoka: How noble gas signature reflect magmatic processes.
2. M.J.Saxton, G.Turner & F.M.Stuart: Noble gas and halogen geochemistry of mantle xenoliths and diamonds.
3. A.B.Verkchousky, F.Begemann, U.Ott & E.Jagoutz: Noble gases in microdiamonds from the Kokchetav massif, northern Kazakhstan: evidence for noble gas implantation.
4. P.Sheng, J.Chen & Y.Xu: Study on nonhydrocarbon and noble gas in north Jiangsu Basin, China
5. J.Matsuda, M.Sudo & M.Ozima: Noble gas partition between metal and silicates under high pressures.
6. D.Tedesco & H.Wakita: Chemistry, helium and carbon isotope ratios of fumarolic fluids in Vulcano island (southern Italy): Temporal variations, surfacial mixing and deep magmatic supply.
7. D.M.Patterson, M.Honda & I.McDougall: Noble gas geochemistry of mafic phenocrysts in arc–related lavas.

August 28 (Fri) Morning

Symposium: Oxygen fugacities recorded in recorded in rocks and minerals.

1. H.V.Zharkova & A.A.Kadix: Redox condition of formation of diamond–bearing kianite eclogites (Kimberlite pipe "Udachnay", Yakutia).
2. O.A.Lukanin & A.O.Lukanin: The influence of degassing on magma redox state under its uprising to the surface and crystallization.
3. L.N.Kogarko & I.D.Ryabchikov: Variable redox conditions in subcontinental mantle.
4. S.Amini: Crystallization conditions of cumulate xenoliths in alkali basalts from oceanic islands.

5. G.J.Redhammer, G.Amathuer, E.Dachs & W.Lottermoser: Mössbauer investigation of annite $KFe_3^{2+}AlSi_3O_{10}(OH)_2$ synthesized at different pressures, temperatures and oxygen fugacities.
6. N.Shimada & Y.Ohyama: Evidence for oxygen fugacity buffers during the emplacement of granitic magma – as an example of the Miocene Uchiyama pluton, Tsushima, Japan.
7. M.Sato: Critical factors in the solid-electrolite method intrinsic oxygen fugacity determination.

August 28 (Fri) Afternoon

Symposium: Reaction mechanisms of water-rock interaction.

1. V.M.Belyi: Dynamic, models of sulfur isotope fractionation in biogeochemical cycles of sulfur and carbon.
2. A.Papaxenopoulos & A.A.Prashnowsky: Biogeochemical and isotope-geochemical-$^{13}C/^{12}C$ and $^{18}O/^{16}O$-study on sediments from southwestern Cyprus.
3. A.A.Prashnowsky: Biogeochemical study of enhydros (Brazil).
4. S.Kumar, K.P.Singh & A.K.Prasad: Mineralogical controls on groundwater chemistry of Rohtak District, Haryana State, India.
5. J.Weng: On the forming mechanism of the tower karst from lithology.
6. A.A.Ievlev: Secondary mineralization at water-rock interaction: Arctic zone of weathering of phosphorite-bearing shales of Pai-Khoy, Yugorsky Peninsula, USSR.
7. T.N.Mai: The mineralogy and geochemistry of the weathering crust on granitoids in Vietnam.
8. G.C.Amstutz: Isotopic fractionation and trace element pratitioning in sulfides diagenetic generations in near-shore basins or on-lapping sediment wedges of the Cambrian of south-east Missouri and in eastern Peru.
9. N.Fang & W.Yang: A study of the oxygen and carbon isotope records from the Upper Carboniferous to the Lower Permian in western Yunnan, China.
10. R.Jakobsen, M.O.Jedrysek, S.Halas & H.R.Krouse: Early diagenetic processes in a rhodochrosite-organic matter system: $\delta^{13}C$ and $\delta^{18}O$ study of marine muds from the Baltic's Gotland deep.
11. J.Guo & Y.Qian: Study of hydrogen isotope equilibrium and kinetic fractionation in ilvaite and water system and its geologic application.
12. V.Lukashev: Experimental study of water-rock interaction with artificial sorbents.
13. S.N.Lvov & S.A.Bushmin: A theoretical method of prediction of the mineral solubility at metamorphic and metasomatic processes.
14. A.Vakulenko: Solubility of the hematite in neutral and weak-acidic aqueous solutions.
15. S.Wand: Self-organization and geochemical feedback in metasomatic system.
16. R.Zhang, S.Hu, M.Borcsik & D.Crerar: The mineral-water interfacial kinetics and new experimental results on chemical oscillations in: CaF_2-HCl-H_2O system.
17. S.A.Bushmin & A.L.Skvirsky: Theoretical studies of fluid-rock interaction during ore-forming metasomatic processes in metamorphic belts.
18. A.Mironov, N.Zhatnuev & J.Nimaev: Behaviour of gold and silver under water-rock interaction (on the experimental data).
19. W.Shi, W.Zhou & X.Yuan: Reaction index and critical condition and their applications to the study of mineralization of Xiangshan uranium deposits.
20. Z.Sun: Hydrogeochemistry of paleothermal water in Xiangshan area, southeastern China.
21. H.Tabata: Isotopic evidence of different fluid flow concerning contact metamorphism at Kiura mining area, Central Kyushu, Japan.
22. S.G.Lee, A.Masuda & H.S.Kim: REE tetrad phenomenon observed in leuco-granitic gneiss from Samcheok of the eastern part in Korea.
23. N.Matsuda, H.Shimizu & A.Masuda: Experimental study on REE dissolution in water-rock interaction at room temperature.
24. H.Qing & E.Mountjoy: Rare-earth element geochemistry of dolomites in the Middle Devonian Presqu'ile barrier, Northwest Territories (Canada): Implications for water/rock ratios during dolomitization.

Selected Symposia of Other Sections

August 25 (Tue)
1. Early history of the Solar system and origin of the Earth (Conveners: K.Nakazawa & H.Wanke)
2. Ocean Drilling Program (ODP) (Conveners: J.A.Austin,Jr. & A.Taira)
3. Accretion of the Earth and evolution of the crust-mantle-core system (Conveners: M.J.Drake & H.Mizutani)
4. Radiometric dating of the stratigraphic sequence (Conveners: G.S.Odin & K.Shibata)
5. Themochronology using the fission-track technique (Conveners: A.J.Hurford & S.Nishimura)

August 26 (Wed)
1. Early history of the Earth: Birth of continents, oceans and the atmosphere (Conveners: K.C.Condie, J.F.Kasting & T.Matsui)
2. Volatiles and metals in magmatic systems (Conveners: P.A.Candela, I.D.Ryabchikov & T.Urabe)
3. Applications of geochronological methods to geological processes (Conveners: I.Kaneoka & R.E.Zartman)
4. Methods of dating geologically very young materials (Conveners: R.E.Drake & N.Takaoka)

August 27 (Thu)
1. Dynamics and evolution of the mantle and core (Conveners: R.Jeanloz & E.Ohtani)
2. Physical properties, chemical compositions, and dynamics of the mantle and core (Conveners: E.Itoh & H.K.Mao)
3. Chemical evolution of the atmosphere, ocean and sedimentary rocks (Conveners: H.D.Holland & H.Ohmoto)
4. Geochemical evolution of igneous rocks through the Earth's history (Conveners: A.W.Hoffman, M.T.McCulloch & E.Nakamura)
5. Metal deposits associated with mafic igneous rocks (Conveners: A.d.Genkin, H.T.Papunen, E.M.Ripley & H.Shimazaki)

August 28 (Fri)
1. Evolution of oceanic and continental crust (Conveners: R.K.O'Nions & E.Takahashi)
2. Global climatic change and future environment (Conveners: E.J.Barron, F.Masuda & K.Ohshima)
3. Igneous and metamorphic processes in the oceanic and continental crust (Conveners: B.W.Chappell & T.Fujii)
4. Global carbon cycle and climatic change (Conveners: V.Ittekkot, H.Kawahata & L.R.Kump)
5. Geochemical evolution of ore deposits through the Earth's history (Conveners: K.Hattori, D.Rickard & C.S.So)

August 31 (Mon)
1. Evolution of island arcs and active continental margins (Conveners: A.J.Barber, X.le Pichon & Y.Tatsumi)
2. International Geosphere-Biosphere Programme: A study of global change (IGBP) (Conveners: K.Konishi, E.Matsumoto, H.Okada, S.Shu & H.R.Thierstein)
3. Tectonics, metamorphism and magmatism in island arcs (Conveners: R.J.Arculus, S.Banno, J.Charvet & I.Kushiro)
4. Magmatic hydrothermal systems: Magmatic evolution, geothermal energy and mineralization (Conveners: M.T.Einaudi & M.Kusakabe)

September 1 (Tue)
1. Origin of life and evolution of the biosphere (Conveners: M.Akiyama & A.H.Knoll)
2. Global mass extinctions: Biotic or abiotic? (Conveners: M.J.Benton & T.Saito)
3. Geochemistry and petrology of the upper mantle (Conveners: S.Arai & F.A.Frey)
4. Organic geochemical processes in ore mineralization (Conveners: A.P.Gize, P.Landais & S.Nakashima)
5. Ore-forming processes in intra-continental regions (Conveners: M.B.Goldhaber, A.Tsusue & N.Williams)
6. Present and past seafloor hydrothermal mineralization (Conveners: K.Marumo, P.A.Rona & W.C.Shanks)
7. Experimental and theoretical studies of ore-forming and alteration processes (Conveners: D.Crerar, K.Hayashi & T.M.Seward)

September 2 (Wed)
1. Geothermal systems in relation to volcanism and tectonic environments (Conveners: W.F.Giggenbach, M.Hayashi & K.Saemundsson)
2. Ore-forming processes in island arcs and active continental margins (Conveners: P.R.L.Browne, S.E.Kesler & H.Matsueda)

September 3 (Thu)
1. Epithermal gold deposits in island arcs (Conveners: E.G.Domingo, R.A.Foster & E.Izawa)

日本学術会議だより　No.25

学術国際貢献特別委員会設置される

平成４年５月　日本学術会議広報委員会

日本学術会議は，去る４月15日から17日まで第114回総会（第15期３回目の総会）を開催し，新たに「学術国際貢献特別委員会」を設置しました。今回の日本学術会議だよりでは，同総会の議事内容及び３月に開催されたＡＡＳＳＲＥＣ執行委員会等についてお知らせいたします。

旧ソ連邦の科学者に対する緊急の支援措置について（会長談話）

平成４年２月25日
日本学術会議
会長　近藤次郎

ソ連邦が解体したことに伴い、旧ソ連邦における多くの科学者は，研究の継続が困難となり，研究組織も崩壊の危機に直面していると伝えられており，これが事実とすれば，世界に与えるその影響は計り知れないものがあると思われる。

いうまでもなく，人類の進歩にとって科学の向上発展は不可欠のものであり，その意味で，今日の旧ソ連邦の実情は憂慮に堪えないところである。

この際，我々日本の科学者は，学協会等を通じる等の方法で，旧ソ連邦の科学者に対し，能う限りの支援を行う必要があると考える。

なお，旧ソ連邦の科学者と我が国の科学者との間の一般的な国際学術交流・協力をより一層充実するための方策等については，我が国の学術の分野における国際貢献の一環として，日本学術会議において引き続き検討することといたしたい。

（注）
本談話は，日本学術会議において国際交流・協力問題について調査・審議を行っている第６常置委員会から２月14日㈮の連合部会に問題提起され，各部会で検討され審議を経た後，２月25日㈫の第785回運営審議会に提案され審議されたものである。

日本学術会議第114回総会報告

日本学術会議第114回総会（第15期３回目の総会）は，４月15日～17日の３日間開催された。

第１日（４月15日）の午前。まず，会長からの前回総会以後の経過報告及び各部・各委員会等の報告が行われた。次いで，今回総会に提案されている２案件について，それぞれ提案説明がなされた後，質疑応答が行われた。

第１日の午後。各部会が開催され，午前中に提案説明された総会提案案件の審議が行われた。

第２日（４月16日）の午前。前日提案された案件の審議・採決が順次行われた。

まず，「副会長世話担当研究連絡委員会の運営について（申合せ）の一部改正」が採択された。これは，「副会長世話担当研究連絡委員会運営協議会」という名称を「複合領域研究連絡委員会運営協議会」に改めるとともに，運営協議会のより円滑な運営を図るために，必要な措置を講じたものである。

次いで，「学術国際貢献特別委員会の設置について（申合せ）」が採択された。これは，学術の分野における我が国の国際貢献の在り方について検討するための特別委員会を設置したものである。

なお，審議・採決の終了後，さきに会長談話として発表した「旧ソ連邦の科学者に対する緊急の支援措置について（平成４年２月25日）」に関連して，旧ソ連邦の科学者の実情調査のために，当会議からロシアに派遣された第６常置委員会幹事の宅間会員から，その調査結果について報告が行われた。

第２日の午後。各部会が開催され，各部における懸案事項について審議が行われた。

第３日（４月17日）午前には，各常置委員会が，午後には，各特別委員会がそれぞれ開催された。

学術国際貢献特別委員会の設置

本会議は，昨年10月に開催した第113回総会における内閣官房長官からの学術の分野における我が国の国際貢献の在り方についての検討依頼を踏まえ，今回の第114回総会において学術国際貢献特別委員会を設置した。

AASSREC執行委員会の開催

去る３月23日から26日にかけて４日間，ＡＡＳＳＲＥＣ（Association of Asian Social Science Research Councils）執行委員会が日本学術会議の会議室で開催された。外国代表団は前ＡＡＳＳＲＥＣ会長で現副会長のＲ・トリニダード教授（フィリピン社会科学協議会），同じく副会長代行のＪ・Ｊ・スモリッツ教授（オーストラリア社会科学アカデミー），ＡＡＳＳＲＥＣ事務局長のＤ・Ｎ・グナガーレ教授（インド社会科学研究協議会），同じく事務幹事のＶ・Ｋ・メータ博士（同上）のＡＡＳＳＲＥＣ側４理事と，タイ国バンコック駐在のＵＮＥＳＣＯ人間社会科学地域アドヴァイザーのＹ・アクール博士の５名。

日本側は，現ＡＡＳＳＲＥＣ会長の川田侃日本学術会議副会長のほか，来年９月に川崎市のＫＳＰ（神奈川サイエンス・パーク）で日本学術会議が共催して開く予定の「ＡＡＳＳＲＥＣ第10回日本総会」の組織運営委員会委員長山田辰雄教授（慶応義塾大学，アジア政経学会理事長），同事務局長・平野健一郎教授（東京大学，アジア政経学会前理事長），及び日本学術会議ＡＡＳＳＲＥＣ専門委員会幹事浦田賢治会員（第２部）の３名がオブザーヴァーの資格で参加，連日，時間を措しむかのように，ＡＡＳＳＲＥＣの運営や来たるべき第10回総会の打合せなどについて，熱心な討議が続けられた。

また討議の合間を縫うようにして，外国代表団は近藤次郎日本学術会議会長表敬訪問，日本学術会議運営審議会における挨拶などのほか，川崎市にも赴き市長表敬訪問，ＫＳＰ視察などを精力的に行った。日本学術会議も，近藤会長主宰のレセプションを催し，関係諸国の東京駐在大使館スタッフなどを招いて，アジア・太平洋地域における学術交流と発展のための意見交換の場を設け，友好的な雰囲気のなかで談論が風発，至るところで談笑の花が開いた。

ＡＡＳＳＲＥＣはアジア・太平洋地域の社会科学領域における国際学術上部組織で，いわゆるアンブレラ・オーガニゼイションである。1973年にインドのシムラで「社会科学の教育・研究に関するアジア会議」が開かれた際に設立が合意され，それ以来ＵＮＥＳＣＯの協力のもとに発展を遂げてきた。ＡＡＳＳＲＥＣは加盟各国それぞれの文化的伝統を尊重しつつ，社会科学の研究，教育，知識の普及などを促進することを通して，この地域における社会科学の発達を図ることを目的に，加盟諸国の社会科学協議会，またはこれに類する団体（１国１会員）により構成されている。

加盟国はオーストラリア，インド，中国，ニュージーランド，フィリピンなど，1991年８月現在，15ヵ国であるが，国（くに）会員のほかに，準会員の制度もあり，将来この地域の各国の学協会や研究所等が準会員としてＡＡＳＳＲＥＣの活動に参加する道も開かれている。出版活動としては，隔年に開催される総会における諸報告やシンポジウムなどの出版のほか，定期刊行物「aassrec panorama」が年２回出されている。

ＡＡＳＳＲＥＣには最高決定機関である総会のほかに，会長，副会長（２名制），事務局長の４名で構成される理事会が置かれているが，これにさらにＵＮＥＳＣＯの地域アドヴァイザーが加わって開かれる執行委員会に事実上の運営権限があるようにみえる。今回，日本学術会議で開かれた会議はＡＡＳＳＲＥＣとしては極めて重要な会議であったといえる。ＡＡＳＳＲＥＣはＵＮＥＳＣＯによって承認された「非政府機関（ＮＧＯ）」の地位をもち，絶えずＵＮＥＳＣＯと緊密な関係を保っているが，同じくＵＮＥＳＣＯによって承認されたＮＧＯの地位をもつＩＦＳＳＯ（国際社会科学団体連盟）とも相互協力関係にある。

平成４年（1992年）度共同主催国際会議

日本学術会議では，我が国において開催される学術関係国際会議のうち毎年おおむね６件について，学・協会と共同主催している。

本年もまた，６件の国際会議を共同主催することとしており，その概要は，次のとおりである。

◆第５回世界臨床薬理学会議（７月26日～31日）
この会議は，臨床薬理学に関する研究を発展させるため討論を行い，最新の研究情報を交換することを目的として横浜市（横浜国際平和会議場）において開催される。
参加予定人数は3,000人（国外1,500人，国内1,500人），参加予定国数は49か国。

◆第14回国際平和研究学会総会（７月27日～31日）
この会議は，平和学に関する研究を発展させるため討論を行い，最新の研究情報を交換することを目的として京都市（国立京都国際会館及び立命館大学）において開催される。
参加予定人数は450人（国外250人，国内200人），参加予定国数は45か国。

◆第８回国際バイオレオロジー会議（８月３日～８日）
この会議は，バイオレオロジー学に関する研究を発展させるため討論を行い，最新の研究情報を交換することを目的として横浜市（横浜国際平和会議場）において開催される。
参加予定人数は500人（国外150人，国内350人），参加予定国数は26か国。

◆国際地質科学連合評議会及び第29回万国地質学会議（８月24日～９月３日）
国際地質科学連合評議会は，同連合の最高決定機関であり，運営事項を協議，決定することを目的とするものである。また，万国地質学会議は，地質学に関する研究を発展させるため討論を行い，最新の研究情報を交換することを目的として京都市（国立京都国際会館）において開催される。
参加予定人数は5,300人（国外3,200人，国内2,100人），参加予定国数は94か国。

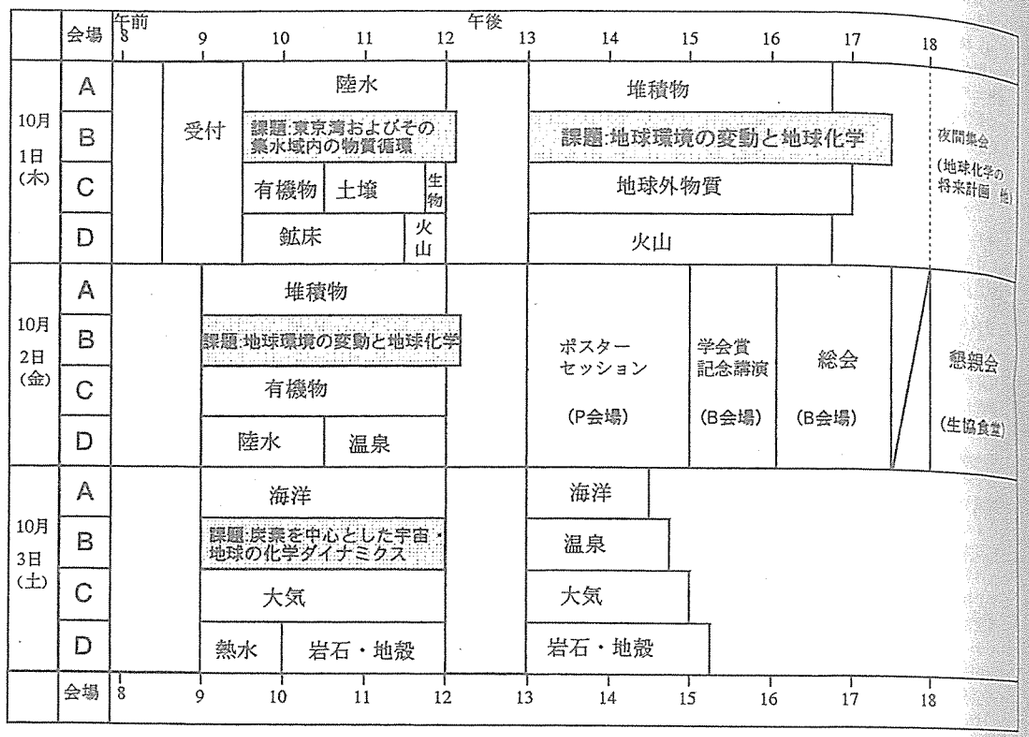
◆第９回国際光合成会議（８月30日～９月５日）
この会議は，光合成に関する研究を発展させるため討論を行い，最新の研究情報を交換することを目的として名古屋市（名古屋国際会議場）において開催される。
参加予定人数は1,000人（国外500人，国内500人），参加予定国数は41か国。

◆第11回国際光生物学会議（９月７日～12日）
この会議は，光生物学に関する研究を発展させるため討論を行い，最新の研究情報を交換することを目的として京都市（国立京都国際会館）において開催される。
参加予定人数は1,000人（国外600人，国内400人），参加予定国数は52か国。

御意見・お問い合わせ等がありましたら，下記までお寄せください。
〒106 東京都港区六本木７-22-34
日本学術会議広報委員会　電話03(3403)6291

1992年度日本地球化学会年会

於：東京農工大学農学部



講演時間（討論時間を含む）　一般講演 15分，課題講演 20～30分

下記で投稿原稿を受付けています。
会員諸氏よりの情報をお待ちしています。

編集者　野尻幸宏　〒305 つくば市小野川16-2　国立環境研究所，地球環境研究グループ
電話　0298－51－6111，ファックス　0298－51－4732
発行者　日本地球化学会　〒113 文京区本駒込5－16－9　学会センター　C21
日本学会事務センター内　電話　03－5814－5801

15-314

日本地球化学会ニュース

No. 131
1992. X. 28

日本地球化学会「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」1992年度受賞候補者推薦の募集

応募期限　1993年1月31日（日）

日本地球化学会受賞規程により，柴田賞規程により，柴田賞，学会賞，奨励賞，功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。

つきましては，下記ご参照のうえ，会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を，自薦他薦を問わずご推薦下さるようお願いいたします。

候補者の資格：

(柴田賞)　地球化学の発展に関し，学術上顕著な功績のあった者。

(学会賞)　地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。

(奨励賞)　1958年4月2日以降に生まれた本会正会員(学生会員を含む)で，地球化学の進歩に寄与する秀れた研究をなし，なお将来の発展を期待しうる者。

(功労賞)　我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦書を，1月31日（日）までに学会事務局へ（当日消印有効）。

提　出　先：〒113 文京区本駒込5－16－9
日本学会事務センター内
日本地球化学会授賞者選考委員会

推薦書は本号添付の用紙，もしくはこれを複写したものをご使用下さい。なお，この件についてのお問い合わせは本会庶務担当幹事（下記）まで。

〒860 熊本市黒髪2－39－1
熊本大学理学部地学教室
清　水　　洋
tel. 096－344－2111
fax. 096－345－4196

日本地球化学会春季シンポジウム開催のお知らせ

標記シンポジウムが，1993年地球惑星科学関連学会合同大会の会期中に開催されます。最終的な日程はプログラム編成が終了する1月中旬にならなければ確定しませんが，3月20～21日の2日間を予定しています。地球化学会の春季シンポジウムは，例年通り一般講演を中心に構成されます。日本地球化学会ではこの固有セッション（春季シンポジウム）における講演を広く募集いたします。固有セッションの講演申し込み，及び問い合わせ先は以下の通りです。

〒192-03 東京都八王子市南大沢1－1
東京都立大学理学部化学科
海老原　充
tel. 0426-77-2553,
fax. 0426-77-2525

講演申し込みの締切りは93年1月8日で，期限を厳守してください。講演申し込み用紙（同封の連絡会ニュースに添付されているものをコピーして使用）と講演予稿原稿（A4サイズ一枚）のオリジナルとコピーを，それ

ぞれ1部ずつお送りください。講演申し込みの詳細は，同封の「合同大会連絡会ニュース」をご覧下さい。尚，ファクシミリでの申し込みはお受けできませんので，予め御了承下さい。

合同大会の共通セッションとしては，惑星科学会との共催で「primitive achondrites」のセッションを半日程度開催するほか，いくつかのセッションに参加する予定でいます。共通セッションへの講演申し込みは合同大会のプログラム委員会宛申し込んで下さい。このように，講演申し込み先が共通セッションと固有セッションで異なりますので御注意下さい。共通セッションの詳細については連絡会ニュースをご覧下さい。1993年大会では固有，共通セッションとも，例年よりポスター形式での発表件数を増やす方向で検討されています。

1993年合同大会では，日本地球化学会が開催する春季シンポジウムの講演予稿集は共通セッションの予稿集と合本化されることになりました。他学会の固有セッション分も大方合本化される見込みです。講演予稿原稿は昨年と同様，A4サイズで提出していただきますが，印刷時にA5に縮刷され，一頁当たり2篇の原稿が収録される予定です。尚，予稿集と懇親会の費用は1993年大会では前納制になる予定ですので，こちらの締切日もご留意下さい。（行事担当幹事　海老原　充）

日本地球化学会

1992年度第2回評議員会議事録

日　時：1992年6月20日　15：00－19：00

場　所：東京大学山上会館

出席者：脇田宏会長，半田暢彦副会長，一國雅巳監事，安部喜也，石渡良志，大隅多加志，北　逸郎，日下部　実，佐野有司，清水　洋，下山　晃，鈴木徳行，高岡宣雄，富樫茂子，中井俊一，長尾敬介，野崎義行，野尻幸宏，乗木新一郎，藤原祺多夫，松田准一，松久幸敬（以上評議員）

1. 前回議事録を了承した。
2. 報告事項

2－1　庶務（清水評議員）

日本宇宙生物科学会第6回大会，BIOSIS基礎講習会，第2回地下水汚染とその防止対策に関する研究集会，の共催，協賛を承認した。トヨタ財団，地球化学研究協会から研究助成の募集が2件あった。広島大学より教官公募が1件あった。地球化学研究協会「三宅賞」，日本気象学会「堀内基金奨励賞」，朝日新聞社「朝日賞」の受賞候補者の推薦依頼があった。学会，研究会プログラム5件が回覧された。献本が1冊あった。平成4年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付内定が通知され，Geochemical Journalに対して1,400,000円の補助金が内定し，交付申請書を提出した。東京工業大学理学部地球・惑星科学科設立の案内があった。

2－2　幹事会（清水評議員）

6月13日16時より東京大学理学部において開催。出席者は脇田会長，半田副会長，清水，中井，野尻各幹事，松久GJ編集長で第2回評議会の議題内容について整理した。

2－3　会計（中井評議員）

黒田和夫氏より40万円の寄付があった。故松尾禎士氏の遺族より50万円の寄付があった。

2－4　編集

(1)　Geochemical Journal（松久評議員）

Vol. 25はNo. 6まで出版済み。総ページ数は458。Vol. 26はNo. 1, No. 2は校正中。No. 3, は編集済，No. 4は編集中。No. 5は希土類元素の地球化学の特集号で現在編集中。

(2)　地球化学（田中編集長からのメモ）

Vol. 25, No. 2は出版済。Vol. 26, No. 1は7月中に印刷できる見込。No. 2は二酸化炭素と炭酸塩岩の特集号を計画している。

(3)　ニュース（野尻評議員）

No. 128, No. 129は配付完了。No. 130は年会プログラムを掲載し8月上旬に配付予定。

2－5　行事

(1)　1992年度東京年会（安部評議員）

ニュースNo. 129に年会の案内，申込用紙をのせた。

(2)　1992年度春季シンポジウム（松田評議員）

4月9，10日，地球惑星科学関連学会1992年合同大会に参加する形で，京都大学で開催された。一般講演26件，招待講演2件，講演要旨集販売数96部であった。

(3)　地球惑星科学関連学会連絡会（清水評議員）

4月24日に連絡会が開かれた。日本惑星科学会がメンバーとして加わり，構成学会が11学会になった。1992年度の幹事学会は地球電磁気・地球惑星圏学会とする。1993年度合同大会は東京都立大学で3月19日（金）～22日（月）の日程で開催することとした。1992年度合同大会の反省と今後の合同大会の方針についての議論，連絡会の今後の活動方針についての議論があった。WPGMへの対応についての議論があった。6月17日に1993年度合同大会の第1回実行委員会が開かれ中井，日高会員が出席した。

2－6　委員会

(1)　名誉会員推薦委員会（半田副会長）

6月20日に委員会を開催。今年度，名誉会員候補を推

日本地球化学会（学会賞等）受賞候補者推薦用紙

日本地球化学会授賞規程により，下記の者を日本地球化学会（柴田賞，学会賞，奨励賞，功労賞）受賞候補者として推薦します．

年　　月　　日

推薦者

氏名　　㊞

記

1. 候補者氏名，生年月日，略歴（わかる範囲でお書き下さい）

2. 受賞の対象となる業績等の題目

3. 推薦理由

言するか検討中である。

(2) 学会賞等受賞者選考委員会

綿秋委員長欠席のため，脇田会長より報告があった。6月13日に委員会を開いた。綿秋委員長の病気のため選考が遅れている。7月18日に委員会を開き選考決定する。

2-7 学術会議

(1) 地球化学・宇宙化学研連（石渡評議員）

3月12日，3月30日に研連が開かれ科研費の分科「地球科学」の細目「地球化学」の審査員候補の選出方法について議論があった。その結果，この推薦に地球化学・宇宙化学研連が関わることが決定した。4月22日の研連で，候補者の推薦依頼先の学協会，推薦人数などの細目を決定した。地球化学会へは1段審査員候補者，上位3名，下位3名，2段審査員候補者2名の推薦を依頼することに決まった。

(2) 陸水研連（安部評議員）

4月24日に研連が開かれ，IAMAP，IAHSへの対応について討議され，組織委員会名簿が決定された。

(3) 鉱物研連鉱床学専門委員会（松久評議員）

6月19日に委員会が開かれ，科研費審査員の選出方法についての報告があった。委員の欠員の補充について討議された。

(4) 海洋研連（半田副会長）

4月25日に研連が開かれGOOSへの対応について討論された。

3. 審議事項

3-1 科学研究費審査員候補者の推薦

平成4年度より科研費の分科細目の改定が行われ，分科「地球科学」の中に細目「地球化学」ができることになった。この細目「地球化学」の審査員候補者の推薦に関して地球化学・宇宙化学研連の角皆委員長より地球化学会へ推薦の依頼が届いた。2月の評議員会で学会からの審査員候補者の推薦方法に関して，(1) 各評議員が1段審査員推薦人数（上位）の4倍の人数を連記投票する，(2) 投票結果の上位20名の中から，会長，副会長が専門分野も考慮して，1段審査，2段審査の審査員候補者を決定する，と決定した。この結論をもとに，12名の候補者の投票が行われた。投票の結果は次回評議員会で発表する。

3-2 入退会の承認

1992年1月1日から4月30日までの入会退会は以下の通り承認された。

入会（10名－すべて正会員）：小松崎光男，山根幹生，渡辺一樹，石井雅男，岩崎　廉，（以下学生）大河内直彦，田中里志，天川裕史，田中尚毅，狩野直樹

退会（6名）：（正会員）金井待二，米谷　宏，中村　真，小杉昌徳，（以下学生）田村和巳，（賛助会員）東邦ガス㈱

また，その他の異動は，以下の通りである。

学生→一般（2名）：渡辺　豊，松村徹

国内→海外（1名）：Mariusz Orion JEDRYSEK

この結果，会員数は以下のようになった。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1991年12月31日	929	19	6	954
入　会	10	0	0	10
退　会	−5	−1	0	−6
1992年4月30日	934	18	6	958

学生72在外31を含む。

3−3 1991年度決算

鳥居監事の監査を受けた1991年度会計決算報告案が提出され，審議の上，了承された。

3−4 一般会員の特別措置について

会員問題検討委員会（半田委員長）から，永年にわたり本学会に貢献されてきた会員に対して，特別措置を取ることが提案された。委員会からの原案に基づいて，資格や措置の形態及び財政的な問題について討論された結果，なんらかの措置の導入に関しては了承されたが，細部については，今後継続して検討することになった。この措置の導入のため会則検討委員会が設置され以下の委員が了承された。

会則検討委員会

委員長　半田暢彦

委　員　大隅多加志，清水洋，中井俊一

3−5 地球惑星科学関連学会連絡委員会および合同大会への対応

連絡委員会から各学会へ検討要請があった，名簿の統一，合同大会予稿集の統一などについて意見が交換された。本学会としては，学会の主体性を保った範囲で協力することとなった。

3−6 IGCブースへの参加の承認

8月24日から9月3日まで京都で開かれるInternational Geological Congressのブースを他学会と共に借用することが了承された。

1992年度第3回評議員会議事録要旨

1992年度第3回評議員会は，9月30日16時より東京農工大学福利厚生センターで開かれ，出席者は脇田会長を始め23名であった。以下に，議事の概要をまとめる。正式の議事録は，次回評議員会で承認された後，ニュースに掲載の予定である。

1. 平木敬三会員（近畿大学理工学部）を，会長委嘱の評議員とすることが承認された。

2. 庶務，会計，編集，行事に関する報告があった。1992年度学会賞等受賞者選考委員会の選考結果に対する諾否は，評議員の郵送による投票により行なった。そして，以下の通り授賞を決定したことが報告された。

- 日本地球化学会賞：松田准一博士（大阪大学理学部助教授）「ユレライト中のダイヤモンドの新成因説とその実験的検証」
- 日本地球化学会奨励賞：坂田将博士（工業技術院地質調査所主任研究官）「火山岩を貯留岩とする石油・天然ガス鉱床の炭化水素の起源」
- 日本地球化学会奨励賞：高橋和也博士（理化学研究所研究員）「分化した隕石の年代学的及び化学的研究」
- 日本地球化学会功労賞：安藤厚博士（資源探査用観測システム研究開発機構）「地球化学的標準試料の作製とその国際標準化」

また，本会の学会賞等の各賞の性格づけについての意見交換があった。

1992年度年会の準備状況の報告並びに夜間集会「地球化学の将来計画」についての説明があった。1992年度の年会は，9月30日～10月2日の日程で近畿大学（大阪府東大阪市）で開催の予定との報告があった。1993年春季シンポジウムは，地球惑星科学関連学会1993年合同大会に参加する形で，3月19日～22日の期間中に東京都立大学で開催される。合同大会の秋季開催が検討されていることが紹介され，この問題について意見の交換を行なった。

3. 将来計画委員会，会員問題検討委員会，名誉会員推薦委員会からの報告があった。

4. 地球化学・宇宙化学研究連絡委員会の報告があった。科研費の細目「地球化学」の一段審査委員候補者及び分科「地球科学」の二段審査委員候補者は，17学協会から研連への推薦をもとにして，研連から学術会議第4常置委員会へ推薦を行なったことが報告された。本会は6月20日の評議員会で行なった投票結果の上位20名の中から，専門分野も考慮して，会長，副会長が，審査委員候補者を研連へ推薦した。この上位20名の発表があった。

その他，陸水研連，海洋研連から報告があった。

5. 1992年5月1日から7月31日までの入会12名（すべて正会員），退会5名（正会員4名，賛助会員1名）が承認された。この結果1992年7月31日現在，正会員942名（学生72名，在外30名を含む），賛助会員17名，名誉会員6名，合計965名となった。

6. 1993年度学会賞等受賞者選考委員会委員5名を投票により選出した。

7. 幹事（会員問題担当）の追加が了承された。

8. 1992年度総会議事次第，および総会に提出される案件が審議された。なお，この件は本号のニュースに「総会報告」として掲載されている。また，総会に先立ち学会賞等受賞式及び学会賞受賞講演を行ない，総会に引き続き懇談会「日本地球化学会の将来計画を語る」を行なうこととした。

新入会員紹介（1992. 5. 1～1992. 7. 31）

正会員（12名）

上野	隆	日本原子力研究所環境安全研究部
小池	裕子	埼玉大学教養部
杉本	敦子	京都大学生態学研究センター
濱	克宏	動力炉核燃料開発事業団中部事務所
塚原	弘昭	信州大学理学部地質学教室
根山	敦史	コンピュータソフト開発㈱
楊	宗興	農業環境技術研究所
S南	雅代	電気通信大学
S滝沢	英夫	秋田大学鉱山学部
S長谷川英尚		秋田大学鉱山学部
S高畑	直人	広島大学理学部
S鈴村	昌弘	東京水産大学海洋生産学科

（Sは学生会員）

1992年度日本地球化学会総会報告

1992年度日本地球化学会総会は，1992年10月2日16時より，東京農工大学農学部において，下記の総会次第に従って行なわれた。

1. 開会宣言
2. 議長選出　議長には平木敬三評議員（近畿大学）が選出された。
3. 会長挨拶　脇田宏会長（東京大学）
4. 年会実行委員長挨拶　安部喜也評議員（東京農工大学）
5. 議事
   1) 1991年度事業報告ならびに決算報告
   2) 監査報告
   3) 1992年度事業中間報告ならびに会計中間報告
   4) 1993年度事業計画ならびに予算案
   5) その他
6. 閉会宣言

総会において了承された1991年度事業報告，1991年度決算報告，1992年度事業中間報告，1992年度会計中間報告，1993年度事業計画，1993年度予算案を以下に順次示す。

総会に引き続いて「日本地球化学会の将来計画を語る」と題した懇談会が，半田暢彦副会長（名古屋大学）を進行役に行なわれ，活発な議論があった。

1991年度事業報告

1. 会員状況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1991年1月1日	929	19	4	952
入　会	56	0	0	56
変　更	−2	0	2	0
退　会	−54	0	0	−54
1991年12月31日	929	19	6	954

2. 年会，委員会等開催数

年会1回（9／30-10／2：松山），総会1回（10／1：松山），評議員会4回（2／16，6／24，9／29，12／14），幹事会4回（2／9，6／15，9／21，12／14），編集委員会4回，春季シンポジウム1回（4／3-4：八王子，地球惑星科学関連学会1991年合同大会に参加），地球化学の振興に関するミニシンポジウム1回（6／24：東京），日本地球化学会市民講演会1回（9／29：松山），将来計画委員会2回，学会賞等受賞者選考委員会2回，会員問題検討委員会1回，名誉会員推薦委員会3回，選挙管理委員会2回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 25 (1-6)，地球化学 Vol. 25 (1, 2)

4. ニュース発行　Nos. 124, 125, 126, 127
5. 会員名簿発行
6. 学会賞等の授与（柴田賞1件，日本地球化学会奨励賞1件）
7. 1992－1993年度役員選挙
8. 学会共催，協賛

第28回理工学における同位元素研究発表会（共催）
日本宇宙生物学会第5回大会（共催）
1991年度質量分析連合討論会（共催）
CO_2と海洋とのかかわりに関する国際ワークショップ（第1回）（協賛）

1991年度決算報告

収支決算書

（自1991年1月1日　至1991年12月31日）

収入の部

科　目	収入額(円)	(予算額，円)
1. 会費収入	8,086,300	(7,100,000)
1.1. 正会員	6,866,000	
1.2. 学生会員	354,000	
1.3. 賛助会員	428,000	
1.4. 海外会員	310,300	
1.5. 入会金	128,000	
2. 刊行物売上	5,115,187	(4,600,000)
2.1. 別刷	694,067	
2.2. Back No.	4,421,120	
3. 広告料	720,000	(300,000)
4. 助成金	1,400,000	(1,400,000)
5. 雑収入	1,607,690	(50,000)
6. 前年度名簿積立金	300,000	(300,000)
7. 前年度基本財産充当引当金	2,000,000	(2,000,000)
8. 前年度繰越金	13,399,910	(10,500,000)
収入合計	32,629,087	(26,250,000)

（注）雑収入には，黒田和夫氏よりの寄付100万円，銀行預金利息58万7090円を含む．

支出の部

科　目	支出額(円)	(予算額，円)
1. 事業費	16,139,758	(13,350,000)
1.1. 出版費	12,530,625	(10,000,000)
編　集	(1,200,000)	(1,200,000)
印　刷	(9,683,904)	(8,000,000)
発　送	(1,646,721)	(800,000)
1.2. 行事費	640,310	(400,000)
1.3. 学会賞経費	356,822	(50,000)
1.4. 委員会活動費	109,729	(300,000)
1.5. 名簿積立金	0	(0)
1.6. 名簿作成費	817,180	(800,000)
1.7. 事務委託費	1,614,226	(1,600,000)
1.8. 会員業務郵税	70,866	(200,000)
2. 管理費	1,723,919	(1,748,400)
2.1. 庶務費	200,000	(200,000)
2.2. 会議費	206,728	(300,000)
2.3. 通信費	72,455	(30,000)
2.4. 旅費	952,000	(800,000)
2.5. 選挙費	55,360	(100,000)
2.6. 雑費	18,976	(100,000)
2.7. 会誌保管料	218,400	(218,400)
3. 予備費	0	(500,000)
4. 基本財産充当引当金	2,000,000	(2,000,000)
5. 次年度繰越金	12,765,410	(8,651,600)
支出合計	32,629,087	(26,250,000)

（注）次年度繰越金には1991年度発行出版物の出版費未払い分約400万円を含む。

貸借対照表（1991年12月31日現在）

資産の部	(円)
現金	35,322
普通預金	18,938,697
学会事務センター	24,391
計	18,998,410

負債・正味財産の部	(円)
前受会費	4,233,000
名簿積立金	0
基本財産充当引当金	2,000,000
正味財産	12,765,410
計	18,998,410

1992年度事業中間報告

1. 会員状況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1992年1月1日	929	19	6	954
入会	22	0	0	22
退会	−9	−2	0	−11
1992年7月31日	942	17	6	965

2. 年会，委員会等開催数

年会1回（10／1-3：府中），総会1回（10／2：府中），評議員会3回（2／15，6／20，9／30），幹事会3回（2／8，6／13，9／26），編集委員会4回，春季シンポジウム1回（4／9-10：京都，地球惑星科学関連学会1992年合同大会に参加），学会賞等受賞者選考委員会2回，会員問題検討委員会1回，名誉会員推薦委員会2回，

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 26 (1)，地球化学 Vol. 26 (1)

4. ニュース発行 Nos. 128, 129, 130

5. 学会賞等の授与（日本地球化学会賞1件，日本地球化学会功労賞1件，日本地球化学会奨励賞2件）

6. 学会共催，協賛

第29回理工学における同位元素研究発表会（共催）
1992年度質量分析連合討論会（共催）
Goldschmidt Conference
Western Pacific Geophysical Meeting
29th International Geological Congress

1992年度中間決算報告

収支決算書 （自 1992年1月1日 至 1992年6月30日）

[収入の部]

科目	収入額(円)	(予算額，円)
1. 会費収入	6,726,000	(7,500,000)
1.1 正会員	5,932,000	
1.2 学生会員	336,000	
1.3 賛助会員	390,000	
1.4 海外会員	42,000	
1.5 入会金	26,000	
2. 刊行物売上	2,420,520	(4,600,000)
2.1 別刷り代	117,200	
2.2 Back No. 収入	2,303,320	
3. 広告料	0	(200,000)
4. 助成金	0	(1,400,000)
5. 雑収入	1,011,750	(300,000)
6. 前年度名簿積立金	0	(0)
7. 前年度基本財産充当引当金	2,000,000	(2,000,000)
8. 前年度繰越金	12,765,410	(11,500,000)
(収入合計)	24,923,680	(27,500,000)

(注) 雑収入には，黒田和夫氏よりの寄付40万円，故松尾禎士氏遺族よりの寄付50万円，銀行預金利息10万3922円を含む．

[支出の部]

科目	支出額(円)	(予算額，円)
1. 事業費	2,723,839	(13,450,000)
1.1 出版費	2,368,587	(10,400,000)
編集	(1,200,000)	(1,200,000)
印刷	(427,450)	(8,200,000)
発送	(741,137)	(1,000,000)
1.2 行事費	340,000	(500,000)
1.3 学会賞経費	0	(50,000)
1.4 委員会活動費	0	(300,000)
1.5 名簿積立金	0	(400,000)
1.6 名簿作成費	0	(0)
1.7 事務委託費	0	(1,600,000)
1.8 会員業務郵税	15,252	(200,000)
2. 管理費	981,535	(1,650,000)
2.1 庶務費	200,000	(200,000)
2.2 会議費	87,663	(300,000)
2.3 通信費	5,238	(30,000)
2.4 旅費	664,000	(800,000)
2.5 選挙費	0	(0)
2.6 雑費	24,634	(100,000)
2.7 会誌保管料	0	(220,000)
3 予備費	0	(500,000)
4 基本財産充当引当金	0	(2,000,000)
5 次年度繰越金	0	(9,900,000)
(支出合計)	3,705,374	(27,500,000)

1993年度事業計画

1. 年会（近畿大学）
2. 総会（近畿大学）
3. 春季シンポジウム：地球惑星科学関連学会1993年合同大会（東京都立大学）
4. 評議員会4回
5. 幹事会4回
6. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 27 (1-6)，地球化学 Vol. 27 (1, 2)

7. ニュース発行 Nos. 132, 133, 134, 135
8. 会員名簿発行
9. 学会賞等受賞者の選考
10. 1994-1995年度役員選挙
11. 学会共催，協賛

第30回理工学における同位元素研究発表会
1993日中砂漠化機構解明研究シンポジウム
第4回国際水文科学協会科学会議

1993年度予算

[収入の部]

科目	1993年(円)	1992年(円)	増減
1. 会費収入	7,500,000	(7,500,000)	0
2. 刊行物売上	4,600,000	(4,600,000)	0
3. 広告料	200,000	(200,000)	0
4. 助成金	1,400,000	(1,400,000)	0
5. 雑収入	300,000	(300,000)	0
6. 前年度名簿積立金	400,000	(0)	400,000
7. 前年度基本財産充当引当金	2,000,000	(2,000,000)	0
8. 前年度繰越金	11,000,000	(11,500,000)	△500,000
(収入合計)	27,400,000	(27,500,000)	△100,000

[支出の部]

科目	1993年(円)	1992年(円)	増減
1. 事業費	15,550,000	(13,450,000)	2,100,000
1.1 出版費	11,700,000	(10,400,000)	1,300,000
編集	1,500,000	(1,200,000)	300,000
印刷	8,500,000	(8,200,000)	300,000
発送	1,700,000	(1,000,000)	700,000
1.2 行事費	700,000	(500,000)	200,000
1.3 学会賞経費	50,000	(50,000)	0
1.4 委員会活動費	300,000	(300,000)	0
1.5 名簿積立金	0	(400,000)	△400,000
1.6 名簿作成費	1,000,000	(0)	1,000,000
1.7 事務委託費	1,600,000	(1,600,000)	0
1.8 会員業務郵税	200,000	(200,000)	0
2. 管理費	1,870,000	(1,650,000)	220,000
2.1 庶務費	200,000	(200,000)	0
2.2 会議費	300,000	(300,000)	0
2.3 通信費	50,000	(30,000)	20,000
2.4 旅費	900,000	(800,000)	100,000
2.5 選挙費	100,000	(0)	100,000
2.6 雑費	100,000	(100,000)	0
2.7 会誌保管料	220,000	(220,000)	0
3. 予備費	500,000	(500,000)	0
4. 基本財産充当引当金	2,000,000	(2,000,000)	0
5. 次年度繰越金	7,480,000	(9,900,000)	△2,420,000
(支出合計)	27,400,000	(27,500,000)	△100,000

1992年度学会賞
各賞受賞者のプロフィール

学会賞等選考委員会の選考により，以下の各氏が受賞され，東京農工大学における総会の場（10月2日）で受賞式が行われました。各氏を知る方に，紹介文を寄稿して頂きました。

日本地球化学会賞：松田　准一会員（大阪大学理学部）

受賞課題「ユレライト中のダイヤモンドの新成因説とその実験的検証」



松田君は，1972年東京大学理学部物理学科を卒業し，直ちに地球物理学科の修士課程に入学し，私達の研究室で同位体地球科学の研究に従事したのが研究者としての始まりです。以来今日まで，物理のバックグランドを見事に生かして，特色のある優れた地球化学研究を進めてきました。松田君の数ある業績の中でも，とりわけ優れたかつ独創性の高いものとして，分化した隕石中のダイヤモンドの成因に関する研究があげられ，今回の受賞の対象となりました。これはこの面の研究史上，一つのブレークスルーとして，今後永く国際的な評価の対象となるものと思います。

隕石に含まれるダイヤモンドの成因については，これまで，(1)隕石母天体中での静水圧による，(2)隕石の衝突の際の衝撃圧力による，の二つの説が主張されてきました。しかしどちらの説にも難点がありました。松田君は，隕石中のダイヤモンドを調べているうちに，ダイヤモンドが比較的多量の希ガスを含む反面，ダイヤモンドと同じ炭素からなるグラファイトには，ほとんど希ガスが含まれないことに気が付きました。静水圧説，衝撃説のどちらからも，こうした希ガス特性の際立った違いを説明するのは困難です。

こうして松田君は第三の可能性として，CVD (chemical vapour deposition) によるダイヤモンド成因説の実験に裏付けられた提案を世界で初めて行いました。さらにこの仮説を証明するため，まず自らの考案による高周波加熱炉を用いたダイヤモンド合成装置を作り，希ガス中でCVDによるダイヤモンドの合成を試みました。こうして合成されたダイヤモンドには，希ガスが多量に取り込まれる反面，衝撃をうけたグラファイトには殆ど希ガスが入らないことを示し，CVD起源説を強く指示する有力な証拠を得ることに成功しました。この結果はNature誌上（1987）に発表されました。

松田君は，さらにCVD仮説を検証するため，衝撃法で造られた人工ダイヤモンド及びこの人工ダイヤモンドの材料物質に用いられたグラファイトの希ガス特性を比較検討することにより，分化した隕石中の希ガス特性が，静水圧ダイヤモンドや衝撃ダイヤモンドより，CVDダイヤモンドに酷似していることを結論できました (Geochim. Cosmochim. Acta, 1989)。最近では，CVD起源ダイヤモンドの希ガス特性をさらに詳細に調べ，希ガスの取り込みが，希ガスがイオンとしてイオンプランテーションで行われることを突き止めました (Geochim. Cosmochim. Acta, 1991)。この結果は，隕石中のダイヤモンドの成因に留まらず，分化した隕石の起源についても，重要な制約条件を加えるものと期待されます。

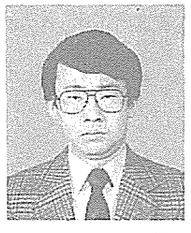
隕石中のダイヤモンド成因の研究は，1950年代，Ureyにより初めて静水圧起源説が提起され，その後，Anders／LipshitzによりUreyの説が否定されて代わりに衝撃説が主張される，という二つの大きな流れがあったと思います。松田君のCVD起源説は，隕石ダイヤモンド研究史上，これらに次ぐ第三のブレークスルーと言えると思います。事実松田説は，この数年次第に研究者の間に浸透しつつあるように見えます（ちなみに，武田弘，中公新書，p. 181,（1991），増田彰正他，大日本図書，p. 95,（1991）を参照)。

今回の日本地球化学会賞の受賞を期に，松田君の今後の研究のますますの発展を，大いに期待するものであります。

小嶋　稔（大阪大学理学部）

日本地球化学会奨励賞：坂田　将会員（地質調査所）

受賞課題「火山岩を貯留岩とする石油・天然ガス鉱床の炭化水素の起源」



坂田氏は，1982年に地質調査所に入所されて以来，主として堆積岩中の有機物の化学的研究，石油・天然ガスの成因に関する地球化学的研究に取り組んできました。特に，東北日本グリーンタフ地域の石油・天然ガス鉱床に関して，「Heはマントル起源，炭化水素は生物起源」とする2成分混合モデルによって，Heの濃度と同位体比のデータを矛盾なく説明できることを示すとともに，天然ガスの炭化水素（メタン～ブタン）の化学組成・炭素同位体比（$^{13}C/^{12}C$）がいずれも有機物起源（熱分解起源＋微生物起源）の特徴を反映すること，石油の炭素同位体比が鉱床近傍に分布する有機物（ケロジェン）の炭素同位体比に対比されることなどの事実を示し，生物起源説を強力に支持する考え方を発表しました。この研究成果は，石油・天然ガスの起源という，基本的で未解決の地球化学的課題に対して，重要な指針を与えるものです。

坂田氏はさらに，東北日本地域の泥質岩や石油の生物指標化合物の異性体比の精密な分析データから，根源岩から貯留岩への石油の移動が続成作用前期に行われたこと，東北日本地域における石油生成反応が，世界の主要な油田地域と比較して，より高温・短期間に進行したこと，を明らかにするなど，いくつかの独創的で重要な研究成果をあげています。

現在坂田氏は，工業技術院国際研究協力課において，国際研究協力に関する調整業務に携わっています。地質調査所への復帰後には，より広い視野に立った研究の進展が期待されます。

柴田　賢（地質調査所）

日本地球化学会奨励賞：高橋和也会員（理化学研究所）

受賞課題「分化した隕石の年代学的及び化学的研究」



高橋氏は東京大学理学部化学教室増田研究室で，隕石の年代学的及び化学的研究に着手され，理化学研究所着任後も，その研究を発展させています。特に，分化した隕石に関する，希土類元素存在度に基づいた地球化学的研究と，Rb-Sr法等による年代学的研究において，大きな成果をあげてきました。

代表的な分化した隕石であるダイオジェナイト隕石について，初めて信頼度の高い年代を求めた研究は，非常に高い評価を受けています。ダイオジェナイトについて求められた44億年の年代は，ダイオジェナイトと密接な成因関係があると従来考えられていたユークライト隕石の45億年の年代よりも明らかに若い年代です。希土類元素存在度パターンからも，ダイオジェナイトとユークライトの2つのグループの成因関係についての従来の考え方は，再検討の必要のあることを指摘しました。

南極において近年発見された月隕石については，希土類元素存在度パターンとRb-Sr同位体系の精密測定より，月の形成初期において水が存在していたことを示し，注目を集めています。

高橋氏は，理化学研究所での砂漠化機構の研究においても中心的な役割を果たしており，今後，宇宙化学のみならず地球化学，環境科学の面でも活躍が期待されます。

清水　洋（熊本大学理学部）

日本地球化学会功労賞：安藤厚会員（資源探査用観測システム研究開発機構）

受賞課題「地球化学標準試料の作成とその国際標準化」

安藤厚さんと岩石標準試料



元地質調査所地殻化学部地球化学課長，安藤厚さんは，地球化学標準試料の作製と標準値の設定による多方面の地球化学分析精度の向上の業績により，日本地球化学会初の功労賞を受けられました。安藤さんは，1953年に東北大学理学部化学教室を卒業後，地質調査所に入所され，地球化学系のリーダーとして御活躍，1989年に退官，現在は資源探査用観測システム研究開発機構で御活躍中です。

そもそも，岩石標準試料は米国において作られたW-1（輝緑岩）とG-1（花崗岩）が最初でした。岩石標準試料の重要性は，世界の一流研究機関で分析された値が予想をはるかに上廻る不一致を見せた時に始まったようです。一人の分析者から出される値が，その分析者の内で高い相対精度を持っていても，他の分析者と比較した時，その確度が悪い。これは，凡世界的な地球化学の進展に，大きな妨げになります。

上記W-1とG-1の重要性が認識された時，すでにこれらの供給は底をつきかけていたようです。安藤さんは1964年から，カナダ，フランス，ドイツとともに岩石標準試料作成プログラムを始められました。JG-1（花崗緑閃岩）JB-1（玄武岩）が作られ，その国際共同分析結果が集計・発表された時，私は学生でした……が，発表時における質疑の一部をおぼろげながら覚えています。一つは地質系の方からで，「ここで得られた標準値よりも，一人の湿式分析のプロが分析した値の方がより信頼できるのでは？」というもので，もう一つは化学系の方からで，「薬品を混合した人工試料の方が値が確かなはずで，なぜ苦労して天然の岩石を標準物質にするのか？」という，いずれも否定的な考えを表すものでした。私は，安藤さんが何とお答えになったかは覚えていません。いずれにせよそれから20年余，今や岩石標準試料といえば，地球化学の研究者にとって，水か空気のごとく，あって当然，無ければ何に頼ってよいのか…という程のものになりました。

安藤さんは御退官までに，JG-1とJB-1に続いて酸性岩から超苦鉄質岩まで，本邦の代表的な火成岩15種の火成岩シリーズ，ストレートや石灰岩など8種類の堆積岩シリーズを作られました。予算規模もさほど大きくないのに，私などあまり仕事を手伝わなかった課員にも

予算を分配され，実質的にはほとんど安藤さんお一人の作業だったように覚えています。地球化学への貢献は，単なる試料の作製にとどまりません。分析データの収集とその解析を初めとし，粉砕法とコンタミネーションの問題，粒度と均質性の問題，分析手法による値の偏向などなど……常に分析・地球化学について廻わる問題について，多くの論文で私達の注意を喚起して下さいました。学問的な詳細については，近く安藤さんから「地球化学」誌に論文がいただけることになっています。

最後になりますが，個性の強い研究者の世界においては，一人の仕事が次の世代に引き継がれることは極めて稀なことと思います。しかし，この岩石標準試料に関する研究は，地質調査所を代表する看板プロジェクトの一つとなり，現伊藤地球化学課長を始め，寺島さん，今井さんらに引き継がれ，更に機器分析に適した試料の研究へと展開されています。次世代に引き継がれた研究！これこそ安藤さんの業績の重さを示す最高の指標ではないでしょうか。

田中　剛（名古屋大学理学部，元地質調査所）

故 松尾禎士先生所蔵の雑誌について

さる5月8日に逝去された松尾禎士先生（当時電通大）は，長年にわたり，下記の雑誌を個人的に購入されていました。先日，研究室の後片付けを致しましたが，未整理のまま電通大に残っています。所蔵雑誌が今後の地球化学研究の発展に役立てば，先生の御遺志も生かされると存じます。つきましては下記の各雑誌の全部，もしくは一部を御希望の方（個人，教室，研究機関など）は，希望雑誌名，その巻号と発行年を明記の上，11月末日までに，下記宛に郵便で御連絡下さい。なお，御希望が重なった場合には，当事者間で調整して頂くことになります。また送料は受領者の負担と致します。

故 松尾先生　所蔵雑誌一覧

雑誌名	巻・号・年から	巻・号・年まで
火　山	8, No. 1 (1963)	7, No. 1 (1992)
地球化学	1, No. 1 (1967)	25, No. 1 (1991)
質量分析	12, No. 26 (1955)	40, No. 1 (1992)
南極資料	No. 57 (1976年12月)	No. 86 (1985年9月)
	30, No. 1 (1986)	35, No. 9 (1991)
日本原子力学会誌		
	18, No. 4 (1976)	20, No. 9 (1978)
日本地熱学会誌		
	10, No. 3 (1988)	13, No. 4 (1991)
Endevour Newseries		
	No. 91 (1963)	No. 126 (1976)
	1, No. 1 (1977)	1, No. 2 (1977)
Geotimes	2, No. 10 (1958)	
	11, No. 10 (1965)	24, No. 9 (1979)
Geochemical Journal		
	1, No. 1 (1966)	25, No. 6 (1991)
Geochimica et Cosmochimica Acta		
	36, No. 1 (1972)	53, No. 4 (1992)
Journal of Physics of the Earth		
	25, No. 1 (1977)	40, No. 1 (1992)
Precambrian Research		
	1, No. 1 (1974)	4, No. 2 (1977)
Reviews of Geophysics and Spacephysics		
	12, No. 1 (1974)	17, No. 7 (1979)
Viva Origino		
	11, No. 1 (1982)	19, No. 3 (1991)

日下部　実
岡山大学地球内部研究センター
〒682－01 鳥取県東伯郡三朝町山田827

人 事 公 募

本学会宛に，下記の人事公募の案内がありましたので，お知らせいたします。

記

東京工業大学理学部，地球・惑星科学科教官公募
　惑星内部物性講座，教授1名，同，助教授1名
　惑星間空間物理学講座，教授1名，同，助教授1名
1. 専門分野：広い意味での地球惑星科学
2. 着任時期：平成5年4月以降のできるだけ早い時期
3. 応募書類：履歴書
　業績目録（学位論文，著者，論文，総説等に分けて記載して下さい。
　主要論文の別刷3編程度（各3部）
　推薦文，または応募者に関する所見を伺うことのできる2～3名の方の連絡先
　今後の研究計画・方針・抱負など（応募ポスト名を明記のこと）
4. 締　　切：平成4年11月13日（金）必着
5. 送付先　：〒152 東京都目黒区大岡山2－12－1
　東京工業大学理学部，地球・惑星科学科
　教官選考委員会
6. 問合せ先：東京工業大学理学部，地球・惑星科学科
　tel. 03-3726-1111，斎藤正徳(ext. 2342)
　fax. 03-3727-4662

1993日中砂漠化機構解明研究シンポジウム

当学会の後援事業として，下記要領で「日中砂漠化機構解明研究シンポジウム」が開催されます。

本シンポジウムは科学技術庁科学技術振興調整費による「砂漠化機構解明に関する国際共同研究」の一環として研究成果の発表を行います。同時に，砂漠および砂漠化問題に関わりを持つ日本，中国等の研究者に広く参加を求め，中国を主体として世界の砂漠および砂漠化に関わる問題について討論することを目的とした国際シンポジウムです。招待後援者として，中国科学院蘭州砂漠研究所長の夏訓誠教授，蘭州冰川凍土研究所長の程国棟教授，フランスのM. Mainguet博士等を予定しており，熱心な意見交換の場になることを期待しています。

組織委員会委員長，一国　雅巳

記

主　催：科学技術庁（日中砂漠化機構解明研究シンポジウム組織委員会）
後　援：日本地球化学会ほか
期　日：平成5年3月2日～4日
場　所：科学技術庁研究交流センター
　つくば市竹園2－20－3
　tel. 0298－51－1331
シンポジウムの主要課題：
1. 砂漠形成史
2. 砂漠化機構および環境変動
3. 砂漠化と気候変動
4. 半乾燥地域における生態系の保存および回復機構
5. 砂漠化のシミュレーションおよび砂漠化防止への応用

参加登録：平成4年11月30日締切
登 録 料：無料
講演要旨：平成5年1月10日締切
連絡先およびサーキュラー請求先：
〒351－01 和光市広沢2－1 理化学研究所内
1993日中砂漠化機構解明研究シンポジウム事務局
岡田　昭彦
tel. 0484－62－1111，内線3632
fax. 0484－62－4654

1993年度質量分析連合討論会

下記の共催学会が開催されますので，お知らせします。

記

主　催：質量分析学会
共　催：日本地球化学会ほか
日　時：1993年5月12日（水）～14日（金）
会　場：岡崎市竜美丘会館
　愛知県岡崎市東明大寺町5－1
　tel. 0564－24－3951
討論主題：1. イオン化機構とイオン反応
　2. 新しい技術・システムの展開
　3. バイオサイエンス・環境化学への応用
発表申込締切：1月25日（月）
　討論主題のほか一般研究発表を含み，A. ポスター，B. ワークショップ（衝突法，MS／MS法，LC／MS法，ESI法，フラングメンテーション機構等のテーマを予定）の形式があります。
申込方法：1件ごとにB5用紙を用いて，発表形式（必ずしもご希望に添えないことがあります），演題，所属，氏名，（発表者に○印），申込者氏名，連絡先（住所，tel. fax.），200字程度の概要を記入し，連絡用宛名（封筒に貼り付けられる大きさ）を添えて下記宛にお送り下さい。申込者には2月中旬に要旨作成要領をお送りします。
要旨原稿締切：3月22日（月）
参加登録，要旨集予約申込締切：3月22日（月）
　1名ごとにB5用紙を用いて，氏名，所属，連絡先，所属学会名を明記し，下記宛お申し込み下さい。参加費（懇親会出席の場合は会費を合計した金額）は郵便振替によりご送金下さい。予約申込により送金し，要旨集の発送を希望される方は連絡用宛名（封筒に貼り付けられる大きさ）を添えて下さい。なお，当日申し込みも受け付けます。
参加費（要旨集代を含む）：
　主催・共催学会員で予約の場合5,000円，当日申込および非会員6,000円，学生3,000円
懇 親 会：5月13日（木），会費5,000円
申 込 先：〒448 愛知県刈谷市井ケ谷町
　愛知教育大学物質科学　小西英之
　tel. 0566－36－6931　fax. 0566－36－4337
　郵便振替口座番号　名古屋　0－48991
　口座名　質量分析連合討論会事務局

第7回太平洋学術中間会議

下記の協賛学会が開催されますので，お知らせします。

記

第7回太平洋学術中間会議（Pacific Science Inter-Congress）が，1993（平成5）年6月27日（日）～7月3日（土），沖縄（宜野湾市，那覇市）で開催される。

1. 会議の正確・目的：
　太平洋学術会議は，太平洋地域の住民の繁栄と福祉に直接関わる学術上の問題を研究するため，人文・社会，自然科学の分野を網羅した学術的かつ総合的な会議である。
　この会議は，太平洋学術協会（Pacific Science

Association，PSA）が4年に1回開催する学術会議で，回を重ねるにつれて規模が拡大し，発展途上国・地域での開催が困難になってきた。そのため，これらの国や地域にも学術会議を開催する機会を与えるため，1969年から学術会議の中間年に会議が開催されるようになった。これが太平洋学術中間会議である。

太平洋学術協会は，太平洋地域における科学技術に関する研究・協力と情報交換を促進し，ひいては住民の繁栄と福祉に貢献することを目的とする国際学術団体であり，非政府学術機関である。現在，33の国・地域が加入している。

日本では，日本学術会議（太平洋学術研究連絡委員会）が代表機関で，密接な連携を図っている。

2. 開催日程：6月27日(日)～7月3日(土)
3. 主　　催：

日本学術会議，日本民族学会，日本生態学会，日本地理学会，日本海洋学会，㈳日本水質汚濁研究協会，日本熱帯農業学会，㈳日本水産学会，日本熱帯医学会，日本応用動物昆虫学会

4. 後　　援：外務省，環境庁，沖縄開発庁ほか
5. メインテーマ・サブテーマ：

メインテーマ　太平洋：文化と自然の十字路

サブテーマ　太平洋における文化の交流

太平洋における種の分化，分散と保全

太平洋における開発および自然環境保全の適正な技術と政策

6. 分科会：

農業科学，海洋生物有機化学，植物，さんご礁，生態学・保全・自然保護・経済学，昆虫学，民族芸術学，林学，淡水科学，地理学，人文科学，情報科学技術，IGBP，マングローブ，海洋科学，材料科学技術，技術の科学，気象学，自然災害防止，栄養学，科学情報及び教育，固体地球学，社会科学，熱帯医学

第2回サーキュラー（1992年9月に発行）では，アブストラクトの提出方法，宿泊など詳細について最終案内する。

本件の問合わせ先

第7回太平洋学術中間会議事務局

（琉球大学庶務部国際主幹室内）

〒903-01 沖縄県西原町字千原1番地

tel. 098－895－2221，内線 2126，2027

バイカルドリリングプロジェクトへの参加と試料採取

本ニュースNo. 129で紹介したバイカル国際生態学研究センター（BICER）における重要課題の一つバイカルドリリングプロジェクト（BDP）での第1期（－1992）の主な仕事は，物理探査法による湖底層序の調査と湖内全域の表層（～10m）柱状試料の採取であった。第2期の100m柱状試料の氷上から採取の準備もこの間に行われ，本年3月に北バイカルで装置のテストを兼ねる試料採取が試みられ，当協議会からも2人が招待された。

日本BICER協議会のBDPグループは，本年3月BDPの会議で正式に参加を認められた。これに伴い，6月から7月にかけてロシアとの共同で表層柱状試料の採取を行い，現在分担して分析を行っている。持ち帰った試料は別表の通りである。現在，この冬の試料採取に向けて準備を進めている。BDPに参加，試料の分析等に携わりたい方は，下記までご連絡下さい。

〒305 つくば市小野川16－2

国立環境研究所地球環境研究グループ内

日本BICER協議会 事務局 兼

BDP(JABIRP) 代表　河合　崇欣

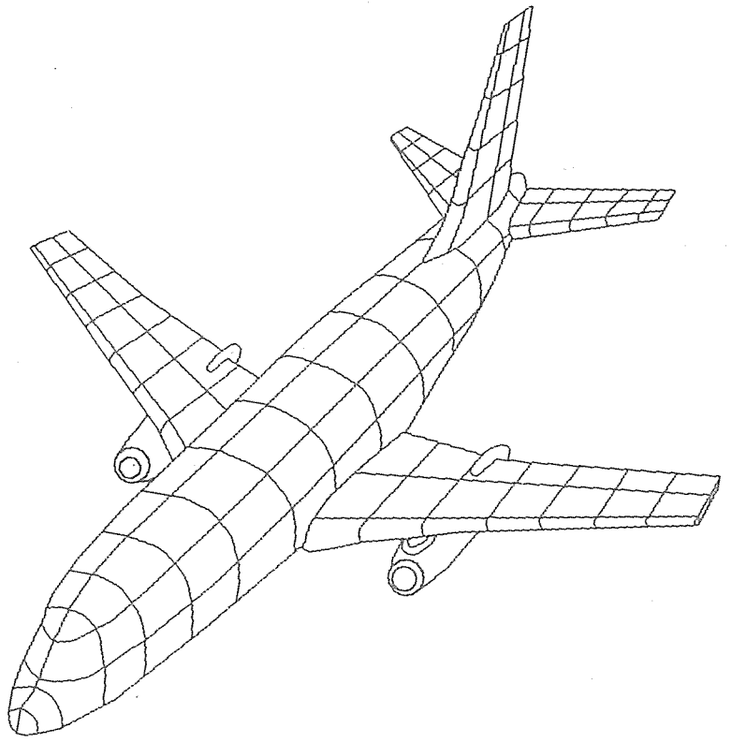
tel. 0298－51－6111（内線 288）

fax. 0298－51－4732

バイカルドリリングプロジェクトでの試料採取表

No.	種　類	長さ(cm)	保存法	採　取　位　置	
6	BGC	83.5	F	51°51′04″ N	105°18′37″ E
8	BGC	51.0	F	51 30 06	104 19 38
13	BGC	74.0	F	52 15 17	106 04 55
15	GC	450.0	F	52 17 45	106 03 10
16	BGC	84.5	F	52 17 45	106 03 10
22	BC	40.0	F	52 17 45	106 03 10
23	BC	40.0	F	52 17 45	106 03 10
24	BC	42.0	F	52 17 45	106 03 10
25	BGC	69.0	F	52 31 00	106 09 33
27	GC	465.0	F	52 31 00	106 09 33
28	BC	42.0	F	52 31 16	106 09 56
32	BGC	65.0	F	53 31 56	107 56 04
37	GC	363.0	F	53 31 47	107 55 55
38	GC	80.0	F	53 31 47	107 55 55
43	BGC	68.0	F	53 31 47	107 55 55
46	BGC	38.0	F	54 55 40	109 09 30
48	GC	300.0	F	54 55 57	109 09 49
50	BC	21.0	F	54 55 58	109 09 45
54	TGC	35.0	F	51 30 14	105 18 37
57	TGC	41.0	F	51 30 22	104 15 04
58	TGC	50.0	F	51 30 22	104 15 04
65	BC	?	F	51 38 31	104 16 29
68	PC	100.0	R	53 33 34	108 00 47
69	PC	868.0	R	53 33 29	108 00 39
75	PC	310.0	R	54 47 17	109 29 18
76	GR	23.0	F	54 47 17	109 29 21
84	GC	?	R	53 22 00	107 56 34

略号，TGC：3連装重力コアラ，BGC：2連装重力コアラ，GC：重力コアラ（5.0m），PC：ピストンコアラ(10m)，BC：ボックスコアラ(0.4m)，GR：グラブサンプラ，F：冷凍，R：室温



日本学術会議だより　No.26

— 共同主催国際会議閣議了解得る —

平成４年９月　日本学術会議広報委員会

平成５年度の日本学術会議の共同主催国際会議６件については，平成３年５月の第111回総会において決定されましたが，政府としても，本年６月30日の閣議において，これらの会議を日本で開催すること及び所要の措置を講ずることを了解しましたので，お知らせします。

平成５年度の共同主催国際会議の閣議了解

１．日本学術会議では，昭和28年９月の国際理論物理学会議，昭和30年の国際数学会議の開催以来，平成３年度までに123件，本年度も６件の国際会議を関係の学会と共同して開催し，我が国のみならず世界の学術水準の向上に努めてきたところである。平成５年度にも，下記の６会議の共同開催を既に平成３年５月に決めているが，本年６月30日，政府全体としても，これらの会議の開催とこれについての所要の措置（会場・警備・入国手続き上の配慮・予算措置等）を講ずる旨の閣議了解を行った。

（平成５年度開催会議）

・アジア社会科学研究協議会連盟第10回総会
　平成５年９月５日から11日（川崎市・かながわサイエンスパーク）
・第15回国際植物科学会議
　平成５年８月23日から９月３日（横浜市・横浜国際平和会議場）
・第７回太平洋学術中間会議
　平成５年６月27日から７月３日（沖縄県宜野湾市・沖縄コンベンションセンター）
・第24回国際電波科学連合総会
　平成５年８月23日から９月３日（京都市・国立京都国際会館）
・第21回国際純粋・応用物理学連合総会
　平成５年９月20日から25日（奈良県奈良市・奈良県新公会堂）
・第６回国際気象学大気物理学協会科学会議及び第４回国際水文科学協会科学会議合同国際会議
　平成５年７月11日から23日（横浜市・横浜国際平和会議場）

（閣議了解の内容）

〔各国際会議ごとに了解〕

１　（各会議名）を（共同主催学会名）と共同して平成５年度に我が国において開催すること。
２　関係行政機関は，上記会議の開催について所要の措置を講ずること。

２．なお，国際会議共同主催の申請から決定までのスケジュールはおおむね次のようになっている。

・会議開催３年前（年末まで）申請募集
・会議開催２年前
（２－３月頃）
　関係部会，運営審議会附置国際会議主催等検討委員会でのヒアリング等
（３－４月頃）
　運営審議会での決定，総会への報告
・会議開催１年前
（６－７月頃）
　閣議了解（政府としての共同主催正式決定）
　共同主催学会との合意書締結，組織委員会の発足

現在本年年末締切りの平成７年度共同開催会議の募集を広報しているところである。（詳細は，日本学術会議月報をご覧下さい。）

日本学術会議主催公開講演会

本会議では，毎年公開講演会を開催しています。この講演会は会員が講師となり，一つのテーマを学際的に展開しています。この秋には二つの講演会の開催が決まりましたので，お知らせします。多数の方々のご来場をお願いします。入場は無料です。

Ⅰ　公開講演会「20世紀の意味と21世紀への展望」
日時　平成４年10月５日（月）13：30～16：30
会場　日本学術会議講堂
演題・演者
「国際政治の観点から－『長い平和』は持続可能か」　永井陽之助　第２部会員（青山学院大学教授）
「文明論的観点から」　弓削　達　第１部会員（フェリス女学院大学学長）
「科学・技術の観点から」　伊達宗行　第４部会員（大阪大学理学部長）

Ⅱ　公開講演会「医学からみた日本の将来」
日時　平成４年11月28日（土）13：30～16：30
会場　金沢市文化ホール　大集会室
　金沢市高岡町15－１　TEL 0762－23－1221
演題・演者
「子どもたち」　馬場一雄　第７部会員（日本大学名誉教授）
「成人病」　百島徳一郎　第７部会員（東海大学教授）
「医療技術の開発」　渥美和彦　第７部会員（東京大学名誉教授）
「食物と栄養」　内藤　博　第６部会員（共立女子大学教授）
「医療制度の将来」　下山瑛二　第２部会員（大東文化大学教授）

物理学研究連絡委員会報告「物理学研究の動向と将来への課題」

７月24日の運営審議会において標記の報告の公表が承認された。1970年代から1980年代にわたって，日本の物理学の研究動向，研究環境を，かなり厳しい批判的スタンスで収集した客観的データに基づいて分析し，1990年代における日本の物理学の課題を展望しようとする野心的な報告である。日本の物理学研究・教育の将来を論ずるための不可欠の資料といえる。A４版112ページにまとめられており，日本物理学会の協力を得て，同学会会誌別刷の形で関係者に公開される予定である。

本報告は，もともと第14期物理学研究連絡委員会が，久保亮五委員長の提案に基づいて「物理学の研究・教育に関する調査小委員会」（委員長長岡洋介京大基研所長，幹事伊井浩二高エネ研教授，委員小林俊一東大理，鈴木洋上智大理Ⅰ，玉垣良三京大理，平田邦男山梨大教育，小沼通二慶大理の各教授）を設置してデータの蒐集・分析・要約を1990年７月から1991年５月にわたって精力的に行い，1992年６月20日の物理学研究連絡委員会全体会議に提出されたものである。第14期物研連任期終了に伴い，報告書及び今後の進め方についての取扱いを次期物研連への引継事項とした。これを受けて，第15期物理学研究連絡委員会は1992年５月22日の全体会議において本報告の取扱いについて協議し，公表を決定して中嶋貞雄委員長を通じて７月７日の第４部会の了承を求め，運営委員会に提案することとなった次第である。

本報告書が，日本の物理学の研究・教育に関心を寄せる多方面で活用されることを期待したい。

物理学研究連絡委員会報告「理論物理学の研究体制の充実について」

７月24日運営審議会において標記の報告の公表が承認された。湯川秀樹博士のノーベル賞受賞にちなんで初の全国共同利用研究所として設置された京都大学基礎物理学研究所と一般相対論のユニークな研究で知られる広島大学理論物理学研究所は，1990年に統合され，内外の期待を集めつつ，理論物理学の総合的研究を目指す拡充・強化された基礎物理学研究所として再発足することとなった。しかし，現実には分野間の均衡が十分でなく，また北白川と宇治に建物が分離されている等，統合の実を十分に挙げ得ない現状である。

1992年５月22日の物研連全体会議は，このような状況の改善が速やかに改善され，理論物理学における日本の輝かしい伝統が復活されるよう，関係各方面に報告，支援を要請することとなった。

材料工学研究連絡委員会報告「繊維工学研究・教育に関する諸問題」産・学協力による繊維工学研究と教育の振興

わが国の繊維産業はかつて，日本を支える大産業であった。石油危機，貿易摩擦などによって低迷を余儀なくされた時期もあったが，今日では先端産業の要素技術ともなって，その裾野を拡大し，また新合繊に象徴されるような高度機能商品を開発し，日本は世界のトップレベルを行く繊維技術国となった。現在繊維産業の従業員数は280万人，総取引額は約64兆円に達し，日本産業の中でも上位を占める基幹産業となっている。

この繊維産業を支える繊維科学技術教育を見ると，かつて国立大学には３つの繊維学部と，染色化学・加工学を含めて19の繊維関連学科があったが，産業構造の変化と共に改組転換されて，今日では繊維系学生の定員50人と激減するに至っている。大学院教育では，繊維学研究科の名称は一時期全廃された。その後，産・学の強い要望によって，平成３年に信州大学工学研究科に，繊維生物機能科学，繊維機能工学，繊維極限材料工学の３大講座が唯一設置されるに至った。

ところが，繊維産業の将来は，世界人口の増加，発展途上国の１人当たりの繊維消費量の増加から，繊維需要は膨大な成長力を秘めている。さらに，消費者主導型経済社会となって，ファッションにも，色，柄，デザインに加えて高機能性と加工技術が重要となってきている。また，繊維素材から最終商品までをシステム化した生産・物流技術，産業資材用途の拡大，地球環境改善への用途開発への期待高性能スーパー繊維による航空・宇宙，海洋，原子力，土木・建築分野への貢献，光ファイバーによる情報通信分野，中空糸による人工腎臓，酸素濃縮などヘルスケア分野，海水脱塩造水など先端分野でも重要な産業として自立しつつある。

こうした繊維産業発展の基礎となる高度技術の開発を促進し，その力を次世代へと継承させるためには，高度に訓練・教育された人材の育成が不可欠である。我が国にとって，繊維科学技術の研究・教育機構の再構築は焦眉の急となっている。これに対して，欧州ではＥＣ統合を控え，各国の特徴に応じ産学協力し，繊維系大学の単位互換制度を指向するなど，繊維技術教育の再活性化に成功している。米国では繊維関連大学が十数校もあり，その中でノースカロライナ州立大学を繊維科学技術教育のセンターとして，ニューヨーク州立ファッション工科大学をアパレル・ファッション教育のセンターとして位置付けて，全世界へ人材を送り出している。

我が国で，産学協力して設立する機構としては，全国繊維関連大学，研究所，及び地域産業を結ぶ役割を持ち，我が国の優れた繊維工学知識の世界への発信と，国際的人材育成への寄与のため，欧州，米国と並ぶ，東アジアの繊維科学・技術の中心機構として活動することが望まれる。

この活動は，我が国に全世界の人々から期待されている国際貢献の一つとなろう。

御意見・お問い合わせ等がありましたら，下記までお寄せください。
〒106 東京都港区六本木7-22-34
日本学術会議広報委員会　電話03(3403)6291

書　評

「環境科学」

西村　雅吉 著

裳華房　1991年　1,800円

本書は，元北海道大学理学部，水産学部で教鞭をとられていた本学会の大先輩によって書かれたものである。

環境化学と題する著者には大きく分けると2つのタイプがあるように思う。一つは，工学系の著者が書いたもので，その基本はエネルギー問題，公害問題，保全技術に重点を置いて書かれている。他は，理学系の地球化学に専門をもつ著者によって書かれたもので，環境化学を地球化学の延長線上にとられて書かれたものである。本書は著者が述べているように後者に属するものである。

地球化学的な基礎に7章を省き，太陽系・地球，大気圏・水圏・生物圏，分析値の意味するもの，物質の動きについて簡潔にわかり易く述べてある。特に，4章物質の動きの中で南極やグリーンランドにおける積雪氷柱状サンプル中の鉛，水銀濃度分布と人間活動との関係を取り上げ，水銀に関しては近年における汚染を積極的に証明できなかったことを述べている。他方，大気圏を通しての物質移動の重要性を指摘している。5章での化学物質による汚染では，各汚染物質濃度の経年変化等を簡単に述べるに留めている。6章で地球規模の環境問題を取り上げ，地球温暖化問題を中心に述べ，地球化学的基礎がこの章で生かされている。まえがきではワープロの変換ミスがあり気になった。

地球環境問題がクローズアップされている今日，この問題に興味を持つ学生に本書の一読を進めたい。

（東京水産大学　大槻　晃）

前号（No. 130）から再録しました。前号では，印刷・校正のミスにより，書題を誤り「地球化学」として掲載してしまいました。著者の西村先生，寄稿して頂いた大槻先生にはたいへんご迷惑をおかけいたしました。ここに，謹んでおわび申し上げます。　（編集子）

編集者　野尻幸宏　〒305 つくば市小野川16-2　国立環境研究所，地球環境研究グループ
電話　0298－51－6111，ファックス　0298－51－4732
発行者　日本地球化学会　〒113 文京区本駒込5－16－9　学会センター　C21
日本学会事務センター内　電話　03－5814－5801

15-214

日本地球化学会ニュース

No. 132

1993. II. 1.

1993年度日本地球化学会春季シンポジウム

標記シンポジウムが，1993年度3月19日～22日，東京都立大学教養部で開催される地球惑星科学関連学会1993年合同大会中に地球化学会の固有セッションとして開催されます。期日は19日（1日目）で，場所はK会場です。また22日（4日目）の午後には惑星科学会との共通セッション，「primitive achondrites」がA会場で予定されています。

合同大会全体のプログラムは，別途，大会実行委員会より送付される予定です。合同大会の懇親会は3月21日（日）午後6時から都立大学の国際交流会館にて開催されます。参加費用等は以下の通りです。

合同大会参加費	一般	1000円
	学生	500円
予稿集		4000(3000)円
プログラム		300円
懇親会費		6000(5000)円

国立国会 5.2. 図書館

以上の諸費用は前納することができます（締切り：3月1日）。その場合，予稿集・懇親会費はともにカッコ内の金額となります。詳しくは合同大会プログラムをご覧下さい。

合同学会連絡先

〒192-03　東京都八王子市南大沢 1－1
東京都立大学理学部化学教室
海老原　充
Tel. 0426－77－2553　Fax. 0426－77－2525

（次頁につづく）

科学研究費補助金申請状況に関するアンケートのお願い

日本地球化学会将来計画委員会

1993年度から，科学研究費補助金の申請の際の系・部・分科・細目のうち，細目に「地球化学」が新設されました。科学研究費への申請状況を把握することは，地球化学会のこれからの研究活性化のために重要な情報であると考え，今回の細目の改定の機会を捉えてアンケート調査を行うこととしました。本ニュースに同封して用紙を配布し回収します。昨秋の申請状況に関してお知らせ下さい。会員各位の協力をお願い致します。